

長	野	県		
埋	蔵	文	化	財
セ	ン	タ	ー	
年	報		37	

2020年度

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報 37
～ 2020年度～

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター



①中野市 南大原遺跡 遠景（発掘調査区と千曲川の現・旧河道部）



②飯田市 座光寺石原遺跡 竪穴状遺構 遺物出土状況（古墳時代後期）



③朝日村 氏神遺跡 竪穴建物跡 SB1001 遺物出土状況（縄文時代中期）



④朝日村 氏神遺跡 竪穴建物跡 SB1001 炉跡 遺物出土状況（縄文時代中期）



⑤下諏訪町 ふじ塚遺跡 礫石経塚（中世末～近世初頭）



⑥下諏訪町 ふじ塚遺跡 和鏡出土状況（中世末～近世初頭）



⑦長野市 塩崎遺跡群 天王山式系土器（弥生時代後期）



⑧辰野町 沢尻東原遺跡 竪穴建物跡 SB10（左）・屋外埋設土器群 SK42（右）出土の縄文土器（縄文時代中期）

目 次

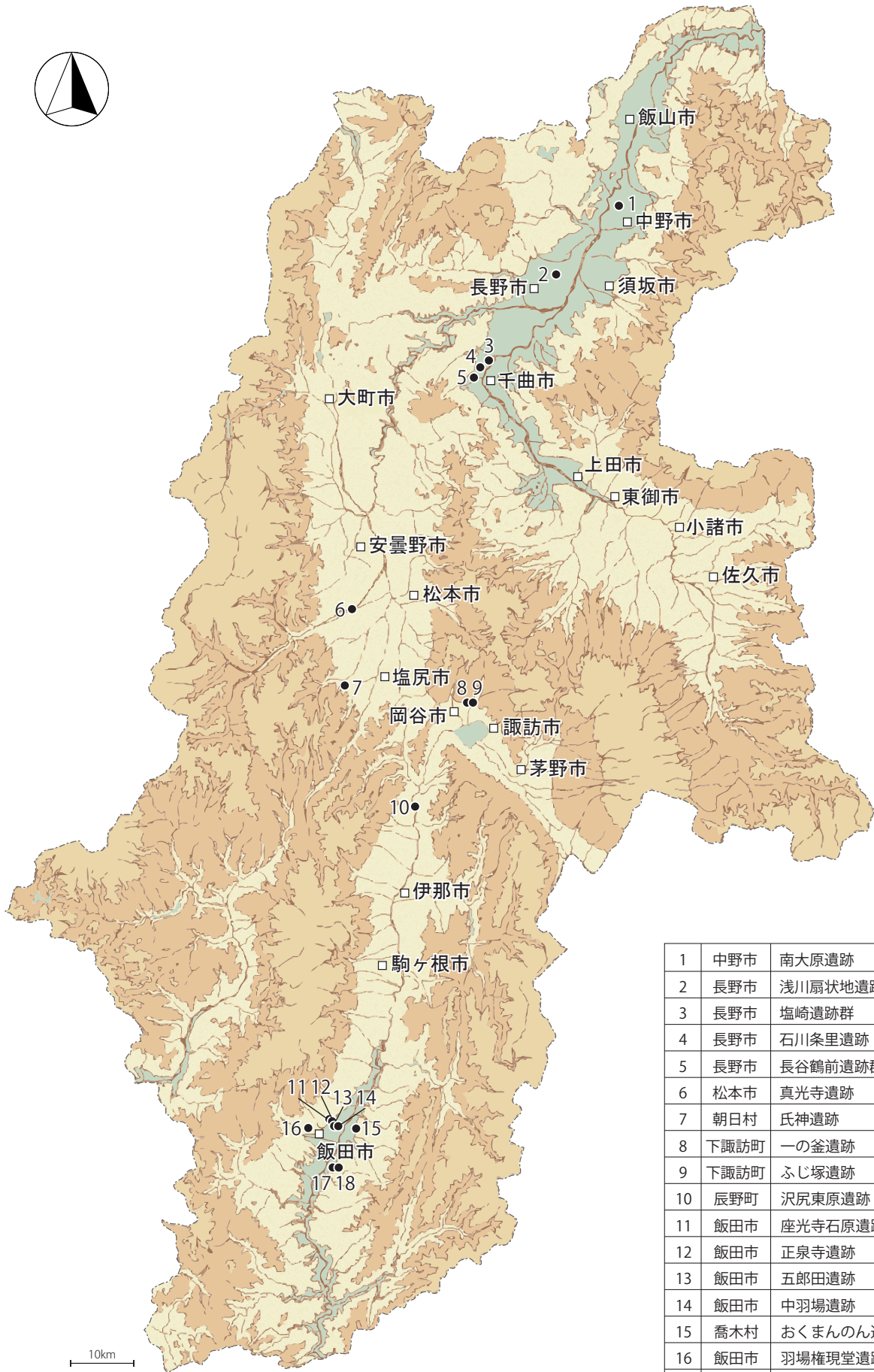
口絵 1～4

- ①中野市 南大原遺跡 遠景
- ②飯田市 座光寺石原遺跡 堅穴状遺構
- ③朝日村 氏神遺跡 堅穴建物跡
- ④朝日村 氏神遺跡 炉跡
- ⑤下諏訪町 ふじ塚遺跡 礫石経塚
- ⑥下諏訪町 ふじ塚遺跡 和鏡出土状況
- ⑦長野市 塩崎遺跡群 天王山式系土器
- ⑧辰野町 沢尻東原遺跡 縄文土器

目 次

I	2020年度の事業概要	1	V	有識者による鑑定・指導	35
II	発掘作業の概要	2	VI	会議・研修会への参加	35
	(1) 南大原遺跡	3		(1) 会議・委員会等	35
	(2) 氏神遺跡	5		(2) 研修会・資料調査等	36
	(3) ふじ塚遺跡	8	VII	関係機関等への協力等	36
	(4) おくまんのん遺跡ほか	11		(1) 学校関係への協力	36
	(5) 座光寺石原遺跡			(2) 講師等の派遣	37
	正泉寺遺跡	13		(3) 関係機関等への協力	38
	(6) 南の組久保田遺跡			(4) 調査資料の利用	39
	南の組塚平遺跡	15	VIII	組織・事業の概要	40
III	整理等作業の概要	16		(1) 組織	40
	(1) 南大原遺跡	17		(2) 職員	40
	(2) 浅川扇状地遺跡群	18		(3) 事業	41
	(3) 塩崎遺跡群	20	IX	調査研究ノート	42
	(4) 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群	22		(1) 「縄文時代中期中葉における土器と堅穴	
	(5) 一の釜遺跡	24		建物跡の二次利用について」	43
	(6) 沢尻東原遺跡	25		(2) 「縄文時代中期の松本盆地における下呂	
	(7) 羽場権現堂遺跡	27		石製石器」	51
IV	普及公開活動の概要	28		(3) 「弥生時代後期の較正年代」	57
	(1) 施設公開	29		(4) 「小島・柳原遺跡群出土の塔鏡形合子蓋	
	(2) 現地説明会・遺跡見学会	30		の模様」	63
	(3) 速報展・講演会等	31			
	(4) 県庁ロビー展	32			
	(5) 講座・出前授業・発掘体験等	32			
	(6) 体験学習用教材	34			
	(7) 施設利用	34			
	(8) 出版物	34			

奥 付



10km

1	中野市	南大原遺跡
2	長野市	浅川扇状地遺跡群
3	長野市	塩崎遺跡群
4	長野市	石川条里遺跡
5	長野市	長谷鶴前遺跡群
6	松本市	真光寺遺跡
7	朝日村	氏神遺跡
8	下諏訪町	一の釜遺跡
9	下諏訪町	ふじ塚遺跡
10	辰野町	沢尻東原遺跡
11	飯田市	座光寺石原遺跡
12	飯田市	正泉寺遺跡
13	飯田市	五郎田遺跡
14	飯田市	中羽場遺跡
15	喬木村	おくまんのん遺跡
16	飯田市	羽場権現堂遺跡
17	飯田市	南の組久保田遺跡
18	飯田市	南の組塚平遺跡

図1 2020年度 調査・整理対象遺跡

I 2020年度の事業概要

本年度は、整理作業も含む発掘調査事業は、国3件、県4件、市町村4件（うち2件は技術指導）、民間事業1件の計12件となった。このほかに長野県教育委員会からの研修等の受託事業を実施した。また、普及公開事業として、施設公開および速報展、講演会、遺跡説明会等も行っている。

1 発掘調査事業

国土交通省1億8282万円、長野県1億5260万円、その他1億1577万円の計4億5119万円の受託費により、11遺跡の発掘作業と7遺跡の整理作業を行い、発掘調査報告書1冊を刊行した。

(1) 発掘作業

中野市南大原遺跡では、すでに可能性が指摘されていたが、本年度調査で弥生時代中期後半の鉄器加工遺構の存在が明らかになった。

朝日村氏神遺跡では、縄文時代中期の集落跡が検出された。出土した土器、石器から、西日本との交流がうかがえる。

下諏訪町ふじ塚遺跡では、マウンドが調査の結果、戦国時代から江戸時代初に築造された一字一石経礫からなる礫石経塚であることが明らかになった。盛土からは、和鏡、かわらけ、銭貨も出土しており、造営する際に行われた儀礼に伴うものと考えられる。

中央新幹線建設事業に伴う飯田市おくまんのん遺跡、中羽場遺跡、五郎田遺跡、座光寺上郷道路建設事業に伴う飯田市座光寺石原遺跡、正泉寺遺跡、下久堅バイパス建設事業に伴う南の組塚平遺跡、南の組久保田遺跡では、用地取得などの関係で部分的な発掘であったが、遺構や遺物が検出され、今後の調査につながる資料が得られている。

また、松本市県町遺跡、信濃町宮の腰遺跡の発掘作業及び整理作業の技術指導を行っている。

(2) 整理等作業

中野市南大原遺跡では、弥生時代中期後半の鉄製品及び鉄器加工関連遺物（小鉄片等）の分析が注目される。鉄器加工遺構の存在を確実にするだけでなく、鉄器加工の初期実態を明らかにすることが期待される。

長野市浅川扇状地遺跡群では、2011年度から2019年度の発掘調査により、竪穴建物跡218軒、溝跡86本、土坑1364基などの遺構とそれらに伴う遺物が得られているが、本年度は、来年度の報告書刊行に向けて、本格整理作業を行った。

2013年度から2019年度まで発掘調査が行われた坂城更埴バイパス改築事業関連では、長野市塩崎遺跡群、石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡の整理作業が行われた。塩崎遺跡群では弥生時代から中世までの竪穴建物跡441軒、墓跡111基、土坑2,168基に及びことが明らかになった。

下諏訪町一の釜遺跡では、昨年度調査の縄文時代集落跡と平安時代土坑墓の整理を行った。

また、同じく昨年度に縄文時代中期集落全体を発掘調査した辰野町沢尻東原遺跡では、竪穴建物跡50軒はじめとした遺構、総計約300点の略完形土器の接合などの遺物の整理を進めた。

やはり昨年度発掘調査した縄文時代中期の集落跡の飯田市羽場権現堂遺跡では整理を行い、報告書の発刊に至った。

2 研修、普及公開事業

研修事業は、奈良文化財研究所の専門研修「保存科学Ⅰ」を受講し、文化庁主催の文化財マネジメント講習などに参加している。

普及公開事業は、冒頭に紹介したイベント以外に、情報・教育普及誌の発行、教材資料「縄文土器立体パズル」の制作を行った。〔川崎 保〕

II 発掘作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代・内容	主な遺物
南大原	中野市	防災・安全 交付金（道路） 事業 一般県道三水 中野線	1,965	6月10日～9月18日	縄文・弥生：土坑、遺物集中 弥生：竪穴建物跡、木棺墓、溝跡 古墳：周溝墓	縄文～古墳：土器 縄文・弥生：石器（打製・ 磨製石鏃、大型刃器、台石 ほか） 弥生：土製品（土製勾玉、 紡錘車）、鉄製品（未成品・ 小鉄片）
氏神	朝日村	朝日村向原地域 道路等整備事業	2,000	4月1日～8月3日	縄文・平安：竪穴建物跡、土坑 平安：掘立柱建物跡	縄文・平安：土器 縄文：石器 平安：鉄製品
ふじ塚	下諏訪町	一般国道20号 （下諏訪岡谷バ イパス） 改築工事	3,000	7月1日～12月11日	中近世：礫石経塚 不明：土坑、溝跡	縄文・古代・中近世：土 器・陶磁器 縄文：石器（石鏃、打製石 斧） 奈良平安・中近世：金属製 品（銭貨、和鏡） 中近世：礫石経（一字一石 経）
おくまんのん	喬木村		450	4月14日～5月29日	なし	弥生・奈良平安・中近世： 土器・陶磁器 弥生：石器（打製石斧、横 刃形石器）
中羽場	飯田市	中央新幹線建設 工事	700	12月7日～12月17日	縄文：礫を伴う遺物包含層	縄文：土器・石器（打製石 斧など）
五郎田			1,880	1月18日～2月5日	奈良平安：竪穴建物跡、掘立柱 建物跡、土坑	弥生・奈良平安：土器・石 器（打製石斧ほか）
座光寺石原			2,350	7月27日～12月16日	古墳：竪穴状遺構 平安：土坑 不明：竪穴状遺構、集石炉、焼 土跡	縄文～中近世：土器、陶磁 器 縄文・弥生：石器（打製石 斧、石鏃、横刃形石器ほか） 古墳：玉類（勾玉、小玉、 ガラス小玉） 古墳：金属製品（耳環、鉄 鏃、辻金具ほか）
正泉寺	350	弥生：竪穴建物跡、土坑	弥生：土器・石器			
南の組久保田		防災・安全 交付金（街路） 事業 下久堅バイパス	2,000	10月1日～12月16日	なし	平安：土器
南の組塚平			2,400		なし	古墳：土器
真光寺	松本市	松本羽田道路	500	1月20日～2月25日	表土剥ぎ	縄文：石器 中近世：陶磁器

(1) みなみおおほらいせき 南大原遺跡

防災・安全交付金（道路）事業
一般県道三水中野線

所在地および交通案内：中野市上今井字南大原
1071-1

ほか 上信越自動車道信州中野 I C から北西に
2.3km

遺跡の立地環境：千曲川は1870～1872（明治3～5）年に現在の位置に瀬替えされているが、遺跡形成時には旧千曲川左岸の曲流部に発達した自然堤防上に立地する。対岸には弥生中期栗林式土器の標式遺跡で著名な栗林遺跡（県史跡）がある。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2020.6.10～2020.9.18	1,965㎡ (5,350㎡)	柳澤 亮 鶴田典昭

() 内は2019年・2020年の総面積

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	4 (20)	弥生中期後半～後期前半
掘立柱建物跡	0 (8)	弥生中期後半
竪穴状遺構	0 (4)	縄文前期・弥生中期後半
礫床木棺墓	0 (5)	弥生中期後半
木棺墓	2 (9)	弥生中期後半
周溝墓	2 (2)	古墳前期
溝跡（埋没谷含む）	1 (6)	弥生中期後半
環状土坑列	0 (2)	弥生中期後半
土坑	15 (319)	縄文・弥生中期後半以降
遺物集中	2 (8)	縄文前期・弥生中期後半

() 内は4次調査（2016報告）を含めた合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文前期・中期、弥生中期後半～古墳前期
土製品	弥生中期後半（紡錘車・土製勾玉）
石器	縄文、弥生中期後半～後期（打製石鏃、磨製石鏃、大型刃器、台石ほか）
鉄製品	弥生中期後半～後期前半（未成品・小鉄片）



図2 遺跡の位置（1：50,000）

調査の概要

縄文～平安時代の集落遺跡で、過去4次（1950・1957・1979・2011～2013年）の発掘調査が行われている。5次調査となる今回は2019・2020年に発掘調査を行い、2021年に報告書を刊行する。調査地は当センターによる第4次調査部分（県道三水中野線改修用地）に隣接し、弥生時代中期後半～後期前半の集落跡を良好な状態で確認した。

遺跡と千曲川の関係

調査区は集落跡が立地する自然堤防上と旧千曲川河道部に分かれる。明治時代初期、千曲川の滑走斜面側突出部の瀬替え工事を行ったため、遺跡の立地する自然堤防は現旧千曲川河道部に挟まれる地形となっている（口絵①・図5）。

現在と弥生時代とは、立地環境が大きく変容していることから、理化学的な古環境復元が必要となった。そこで、本年から信州大学理学部（保柳康一教授研究室）に土壌分析を委託した。遺跡に堆積した洪水砂層等の粒度分析、珪藻化石分析等から、古環境や更には歴史的な環境変動との関連



図3 信州大学理学部による土壌試料の採取

を明らかにしたい。

実際に旧千曲川河道部は地表下3.4mまでトレンチを掘削したが、明治時代以前に遡る遺構や遺物は発見されなかった。

弥生時代の鉄器加工

昨年度の調査では、過去の調査成果も含め本遺跡の弥生時代中期後半の様相が明らかになり、当該期の竪穴建物内で小規模な鉄器加工が行われていたことを指摘している（年報36参照）。弥生時代の鉄器加工遺構の検出は県内初であり、全国的にも非常に早い時期にあたる。

本年度は狭小な範囲ながら、新たに中期後半の竪穴建物跡1軒、木棺墓2基等を発見し、集落構成の空白部分を補完する。

また昨年度から継続して調査を行った後期前半の竪穴建物跡（SB23）から、新たに小型鉄製品の未成品と小鉄片が出土した。本跡の炉（長さ34cm、深さ12cm）は北側炉壁に小さな半円形の張り出し部が付属する特徴的な形状で、一般的な炉に比べて炉底や周辺床面まで被熱によって赤く変色している。これらのことから、この炉は鉄器加工に用いられたとも考えられる（図3）。



図4 被熱赤化した竪穴建物跡の炉（半截状況）

当集落は中期後半を主体として、後期前半まで継続する。後期前半の竪穴建物跡は今回以外に2軒検出されていて、そのうち1軒からは鉄鏃と、砥石や台石が出土している（4次調査SB13）。本集落では鉄器加工技術が次世代まで継承されていたことも考えられる。

今後、遺構や遺物の分析によって北信濃における弥生時代中後期の集落と鉄器加工技術の様相を明らかにしたい。

本年度下半期からは整理作業を本格的に進めている。内容についてはP17を参照されたい。

（柳澤 亮）



図5 南大原遺跡上空から見た現旧千曲川河道部と栗林遺跡（左奥は善光寺平）

(2) 氏神遺跡

朝日村向原地域道路等整備事業

所在地および交通案内：東筑摩郡朝日村西洗馬向原。JR 塩尻駅の西6.3km

遺跡の立地環境：鎖川の支流である内山沢が形成する河岸段丘上に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2020.4.1～2020.8.3	2,000㎡	村井大海 平林彰

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	7	縄文時代中期初頭・中葉（6） 平安時代（1）
掘立柱建物跡	2	平安時代
土坑	99	縄文時代中期初頭・中葉（96） 平安時代（3）

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代前期末葉・中期初頭・中葉（特殊凸帯文系、三角印刻文、五領ヶ台式、新道式、藤内式、ミニチュア土器等） 平安時代（灰釉陶器、土師器、羽釜等）
石器	縄文時代中期初頭・中葉（石鏃、石匙、石錐、打製石斧、石錘、石皿、敲石等）
鉄製品	平安時代（刀子）
自然遺物	縄文時代中期初頭・中葉（クルミ属の炭化材） 平安時代（人骨）

発掘調査の概要

内山沢両岸には当センターが2016・2017年度に発掘調査を実施した、山鳥場遺跡、三ヶ組遺跡をはじめとした縄文時代、弥生時代、平安時代、中世に属する多数の遺跡が認められ、本遺跡から北西に1kmほどの鎖川左岸には熊久保遺跡がある。

本遺跡は、1951年に実施した村内遺跡踏査において存在が認識されていたが、発掘調査を行うの



図6 遺跡の位置（1：50,000）



図7 氏神遺跡の全景（南より）

は本年度調査が初めてである。調査範囲は宅地造成に伴い敷設される道路部分で、第1～5トレンチを設定した（図8）。遺構検出面は御岳乗鞍火山帯起源と推定されるローム層の上面で、現代の耕作に伴うかく乱が多数認められ、調査範囲の北西部は削平を受けていた。特に第2トレンチよりも北西側は削平が大きく、遺構が確認できなかったため面的な調査は不要と判断した。

調査の結果、熊久保遺跡や山鳥場遺跡、三ヶ組遺跡に先行する縄文時代中期初頭や中葉の竪穴建物跡、陥し穴や貯蔵穴を含む土坑、朝日村内では初の調査例となった平安時代の竪穴建物跡と掘立柱建物跡、墓坑を検出した。

基礎整理作業での集計の結果、上記の遺構および検出面から縄文時代と平安時代の土器が1万片以上、総重量約145kg、石器は1450点、総重量約85kgが出土したことを確認した。

石器の石材は、石鏃や石錐には黒曜石、石匙に

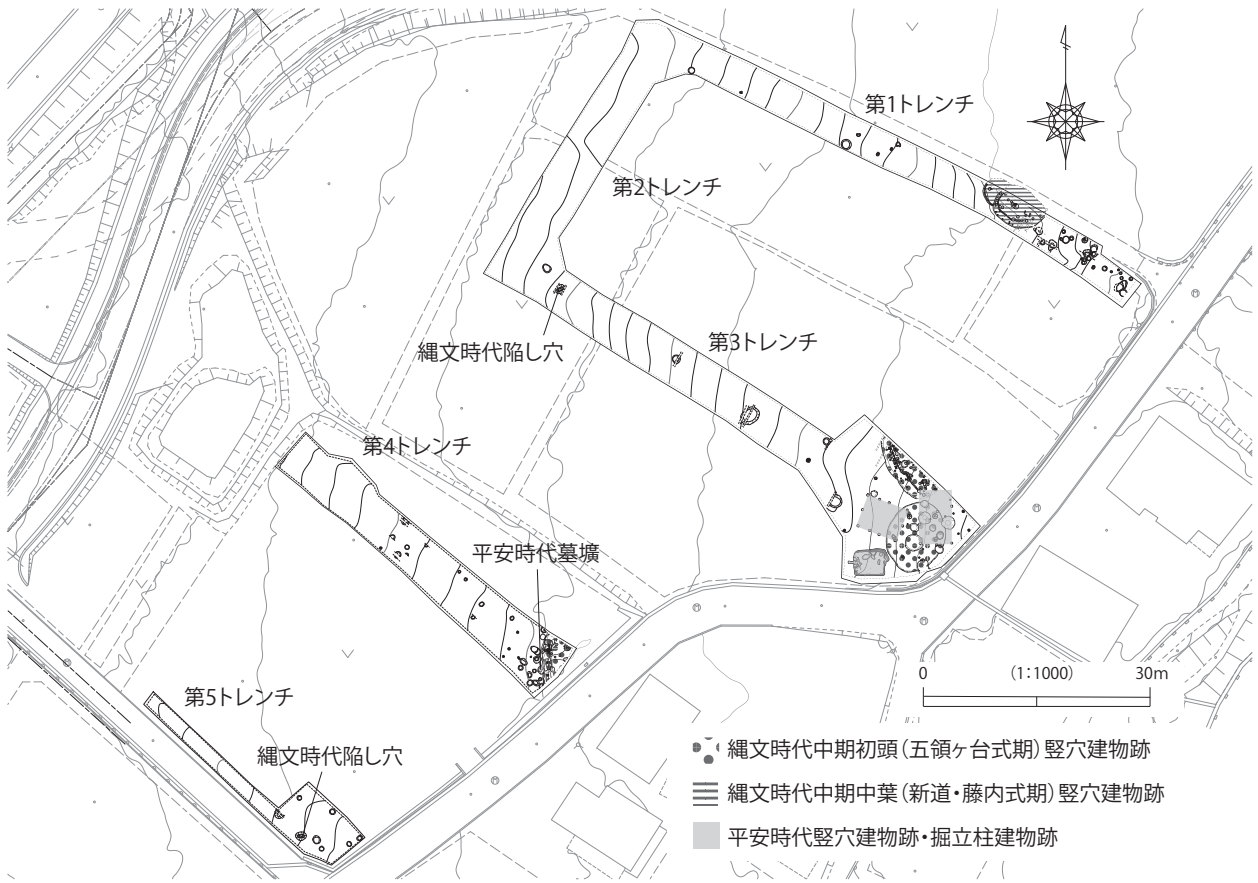


図8 氏神遺跡全体図 (1 : 1000)

けつがん
は頁岩やチャート、打製石斧や石錘、石皿、たたいし
には砂岩や泥岩、粘板岩が主に利用されている。
黒曜石は産地分析の結果、ほとんどが下諏訪町の
ほしがだい
星ヶ台産と判明した。この傾向は縄文時代中期初
頭および中葉で共通する。

縄文時代中期初頭の集落跡

縄文時代中期初頭の竪穴建物跡 (図9) は、い
ずれも出土遺物からこりょうがだい
五領ヶ台式期に属すると推
定され、土器付着炭化物から、5,584~5,476calBP



図9 縄文時代中期初頭の竪穴建物跡

(2δ : 95.4%) の暦年較正年代が得られている。
当期の集落における居住域は、第3トレンチおよ
び第4トレンチの東側周辺に展開していたと考え
ている。土器には、ミニチュア土器や関西を中心
に分布する特殊凸帯文系土器が含まれていた (図
10)。石器にはげろいし
下呂石の剝片もあり、長野県域以
西との交流をうかがわせる。

縄文時代中期中葉の集落跡

縄文時代中期中葉の竪穴建物跡を、第1トレン



図10 左：特殊凸帯文系土器 右：ミニチュア土器

チで検出した(図11)。この時期には、居住域が北へ移った可能性がある。共伴土器から、新道式から藤内式期に属すると考えられ、土器付着物炭化物から5,265~4,877calBP(2 δ :95.5%)の暦年較正年代が得られている。埋土からほぼ完形または半完形状態の土器が26個体出土しており、この中にはミニチュア土器や有孔鏝付土器の破片も含まれる。



図11 縄文時代中期中葉竪穴建物跡の遺物出土状況

縄文時代の土坑

縄文時代の土坑には、陥し穴や貯蔵穴がある。陥し穴を、調査区の外縁部で2基検出した。断面がT字またはロート状を呈し、底面にはいわゆる逆茂木跡がみられる(図12)。壁面がえぐられ、断面が袋状を呈する貯蔵穴も認められた。

土坑から出土した土器は、竪穴建物跡と同様、ほとんどが中期初頭から中葉のものであるが、前期末葉の土器片が出土したものもある。土坑の帰



図12 縄文時代の陥し穴
(白点箇所が上端 底面に逆茂木痕が見える)

属時期や、前期末葉の遺構が広がる可能性があるかなどが、今後の検討課題である。

平安時代の集落跡

平安時代の竪穴建物跡は、共伴遺物から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる(図13)。掘立柱建物跡は2棟検出され、いずれも2×3間で短軸は約4.5m、長軸は6mと7.4mである(図14)。竪穴建物跡および掘立柱建物跡は、第3トレンチの東側において隣接しており、埋土の特徴も似ているためほぼ同時期と推定される。また、これらの建物跡と同時期と想定される墓坑が第4トレンチの東側で見ついている。

長野県では一般的に、平安時代中期に属する墓坑の検出例は、建物跡に比して少なく、集落構造全体を捉えるのは意外に難しいが、今後、当遺跡において居住域と墓域が伴う景観を復元できるかを、検討していきたい。(村井大海)



図13 平安時代竪穴建物跡の調査風景



図14 平安時代の掘立柱建物跡

(3) つかいせき ふじ塚遺跡

一般国道20号（下諏訪岡谷バイパス）
改築工事

所在地及び交通案内：下諏訪町社6922-4ほか
JR 下諏訪駅から北北西約1.7km

遺跡の立地環境：砥川右岸の河岸段丘上で南向きの傾斜地に立地。諏訪大社下社春宮の背後。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2020.7.1～12.11	3,000㎡	長谷川桂子 河西克造 西山克己 田中一穂

検出遺構

遺構の種類	数	時期
土坑	3	不明
溝跡	3	不明
礫石経塚	1	中世末～近世初頭

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代前期末～中期初頭、奈良平安、中近世（かわらけ、陶磁器）
石器	縄文時代（石鏃、打製石斧など）
金属製品	奈良平安（銭貨）、中近世（和鏡、銭貨）
礫石経	中世末～近世初頭



図16 墳丘調査前状況



図15 遺跡の位置（1：50,000）

調査の概要

本遺跡はこれまでに下諏訪町教育委員会が町道拡幅に伴う発掘調査をおこなっているが、ごく狭い範囲の調査であったため、遺構・遺物は発見されていない。

本年度はおもに遺跡の西部と東部で調査をおこなった（図21-①～⑧区）。①区で土坑3基、⑤区で溝跡3条を確認した。いずれも遺物の出土が少なく遺構の時期は不明である。また②区、③区、④区、⑥区、⑦区は後世の耕作によって検出面である黄褐色のローム層の上部まで攪拌を受けており、遺構は確認できなかった。

れきせききょうづか 礫石経塚の発見

本遺跡内には墳丘がみられた（図16・図21⑧区）。規模は底面一辺約10m、上面一辺約8m、高さ約1mである。「ふじ塚古墳」として下諏訪町では登録されている。調査をおこなったところ、墳丘の下部から約4万個の礫石経（一字一石経）がまとまって出土し、礫石経塚であることが判明した。おもに径4～10cmほどの扁平な円礫や垂角礫を利用して文字が書写されている。礫石経



図17 墳丘表土除去後の状況

に使われた石の大きさや書かれた文字の書体から、礫石経塚の造られた時期は中世末から近世初頭と推定される。

礫石経塚の規模は長軸約8m、短軸約5mである(口絵⑤)。塚の構造を大きく三面(下・上・表)に分けると、下面は地形に沿ってゆるやかに南へ傾斜するが、上面は傾斜しないため南側に礫石経を厚く敷き詰めている。表面は数cmほどの凹凸をもつ楕円形状のままとりとして捉えられた。なお縁には石列があり、礫石経を埋納する範囲を区分していると考えられる。

この礫石経塚の上には黒色や褐色、灰色、黄褐色の締まりのよい土と亜円～亜角礫を混合して版築状に盛土し、墳丘を形成していた(図17・18)。礫石経塚と盛土との関係の解明は今後の課題である。

礫石経の文字

礫石経には文字が書写された石と書写されていない石が一緒に出土する(図19)。その中で、これまでに判読できた文字には「無」「樹」「所」「衆」「佛」「能」などがあり、法華経の経文を書写したと推測できる。他にも経文ではないと思われる文字や異体字が含まれる。また筆跡が違う文

字があるため、複数の人が書写した可能性が考えられる。



図18 礫石経塚と盛土 断面



図19 礫石経出土状況



図20 ふじ塚遺跡全景

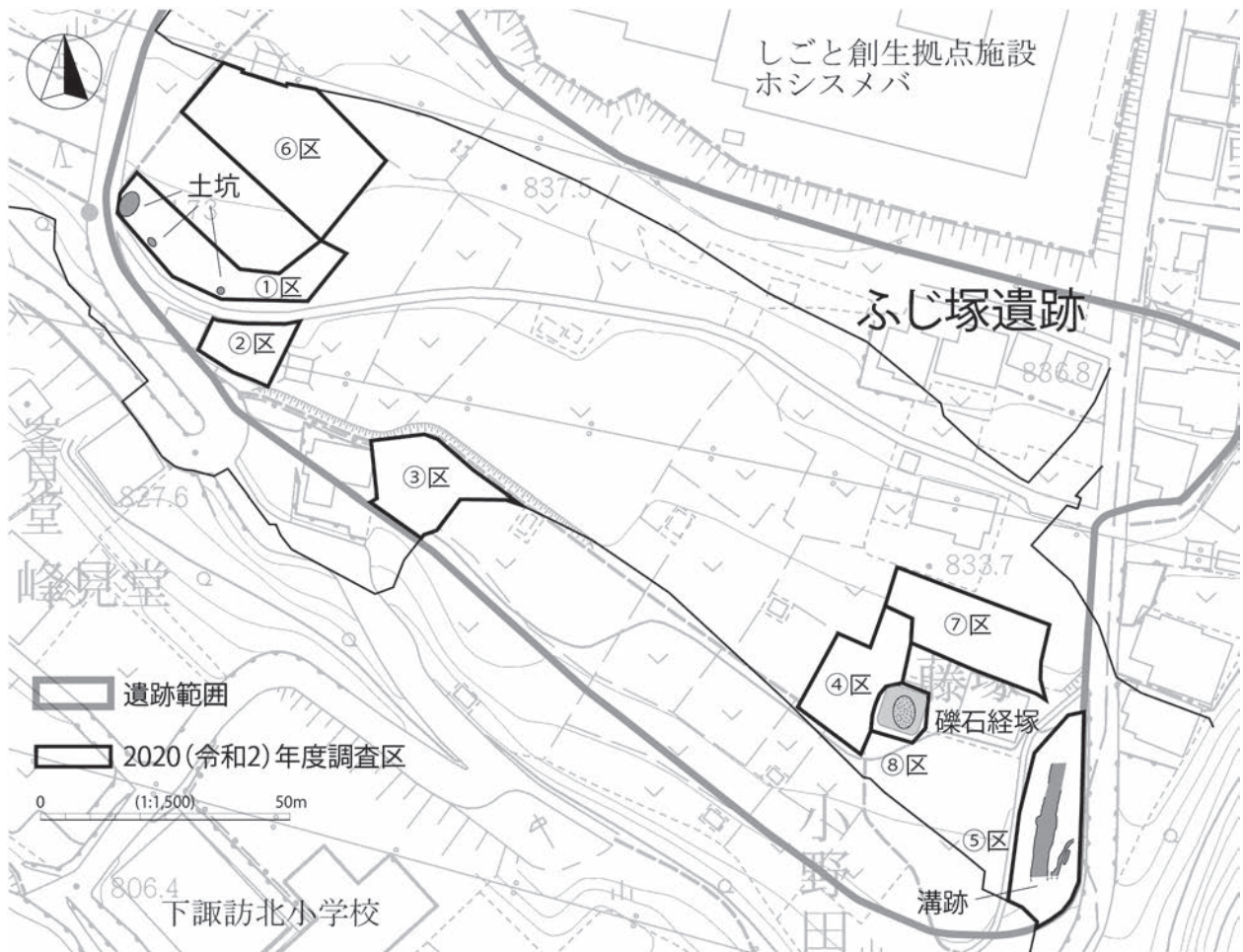


図21 ふじ塚遺跡全体図

出土遺物

礫石経塚の中央から和鏡とかわらけ、銭貨が出土した(図22・口絵⑥)。和鏡は銅製で直径約8cmである。鏡面を上に向けて出土した。鏡背には小鳥、竹・笹、松と思われる植物の文様がみられ、鈕の孔は貫通し、座は亀形をしている。詳細は今後の整理作業で明らかにしていきたい。かわらけは底径約9cm、口径約13cmと約12cm、器高約2cmのほぼ完形の2点で、合わせ口の状態で出土した。礫石経塚を造営時に行った儀礼に伴うものと考えられる。

礫石経の間や盛土中からは全部で銭貨が92点出土している。文字が判読できた銭貨には宋銭の他、「永樂通寶(初鑄年1408年)」、「開元通寶(同621年)」などがある。

周辺遺跡との関わり

1733(享保18)年、高鳥藩5代藩主諏訪忠林が領内の様子を知るために各村に命じて描かせ



図22 和鏡 出土状況

た『諏訪藩一村限村地図』には、遺跡が所在する「東山田村」の箇所に「藤塚と申す処」と記されている。江戸時代にはすでに「藤塚」という名称でその存在が知られていたようである。本遺跡からは富士山や守屋山を望むことができるため、富士信仰や守屋信仰との関連性もうかがわれる。また、本遺跡の南東約1.6kmに立地する「綿の湯経塚」でも一字一石経と和鏡が出土しており、本遺跡との関係解明が検討課題である。(長谷川桂子)

(4) おくまんのん いせき 遺跡ほか

中央新幹線建設工事

中央新幹線建設工事に伴い、下伊那郡喬木村おくまんのん遺跡、飯田市中羽場遺跡・五郎田遺跡の調査を実施した。

1 喬木村おくまんのん遺跡

所在地および交通案内：喬木村阿島146ほか

喬木村役場から北東約1.7km

遺跡の立地環境：城原台地^{じょうばら}西側の段丘崖に形成された斜面直下に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2020.4.14～5.29	450㎡	贅田 明 伊藤 愛

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	弥生時代後期、平安時代、中世、近世以降
石器	弥生時代（打製石斧、横刃形石器）

調査の概要

本遺跡は、天竜川左岸の城原台地西端から段丘崖の斜面下部にかけて広がる。遺跡は縄文時代の包蔵地とされているほか、台地西端では弥生時代後期の竪穴建物跡と、15世紀末～16世紀前半の阿島城熊野支城が調査されている。また、直刀や土師器などが出土した熊野古墳が存在したようであるが位置は明確ではない。

今回の調査地点は段丘崖の斜面下部となり、台地上よりも約70m低く、遺跡範囲としては西側の境界付近に相当する（図24）。調査では、遺跡の内容を確認するため、中央（トレンチ1）と北側（図25：トレンチ2）の東西方向トレンチの掘削と南側の1か所で坪掘りを行った。

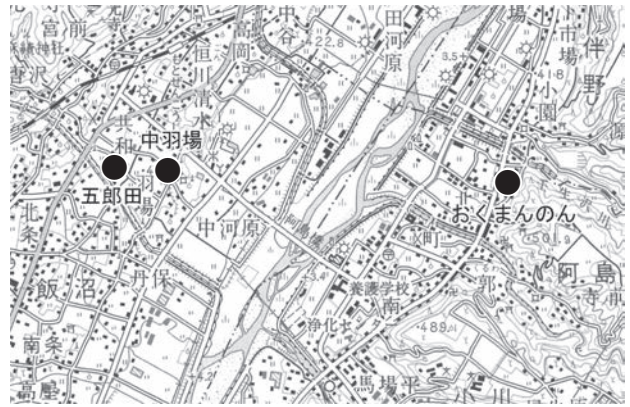


図23 遺跡の位置（1：50,000）

その結果、調査地点には流入したとみられる砂礫層が堆積し、地形的に緩斜面を形成するなど、段丘崖から続く谷状地形の中にあることがわかった。砂礫層では、弥生時代後期の土器や石器が出土したものの、遺構は確認できなかった。この状況から、今回の調査地点は遺跡の主体からは外れており、面的調査の必要はないと判断して調査を終えた。（贅田 明）



図24 調査地点の状況



図25 トレンチ2の様相

参考・引用文献
喬木村教育委員会 1991『阿島城原遺跡』

2 飯田市中羽場遺跡^{なかはば}

所在地および交通案内：飯田市座光寺4485-1

J R 飯田線元善光寺駅から南約1km

遺跡の立地環境：天竜川の形成した低位段丘面に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2020.12.7~12.17	700㎡	西山克己 岡村秀雄

検出遺構

遺構の種類	数	時期
遺物集中	1	縄文時代中期後半～後期

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・石器	縄文時代中期後半～後期(打製石斧ほか)

調査の概要

本遺跡は天竜川西岸の低位段丘面に立地している。過去の飯田市教育委員会の調査では古墳時代の集落と方形周溝墓が確認されている。今回の調査区は遺跡範囲の中でも標高の低い一帯である。

今回は、遺跡の内容把握のため確認調査を実施した。当初は、弥生時代の集落遺跡関連の遺構・遺物の出土を想定していた。結果、該当時期の遺構・遺物は確認できなかったが、地表から約1.3m下で縄文時代中期を主体とする土器・石器が出土するとともに一定の範囲に礫が広がることと分かるといった新たな所見を得た。よって、低地に向かう緩斜面上に礫を伴う遺構もしくは土器捨て場、さらに、水場に関する遺構の存在も想定できるので、本調査が必要と判断される。



図26 中羽場遺跡調査風景

3 飯田市五郎田遺跡^{ごろた}

所在地および交通案内：飯田市座光寺4068ほか

J R 飯田線元善光寺駅から南西約0.9km

遺跡の立地環境：天竜川の形成した低位段丘面に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.1.18~2.5	1,880㎡	平林 彰 鈴木時夫

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	15	弥生時代、奈良平安時代
土坑	60	弥生時代、奈良平安時代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	弥生時代、奈良平安時代
石器	弥生時代(打製石斧、石剣)
銅製品	奈良時代

調査の概要

本遺跡は、天竜川西岸の低位段丘面に立地し、その範囲が中羽場遺跡に近接している。今回の調査地点は遺跡範囲の西南端にあたり、西南には天竜川に向かい土曾川が流れている。

本遺跡は弥生時代、奈良平安時代の土器散布地として知られる。過去の調査例はないが、土曾川の対岸にある堂垣外遺跡^{どうがいと}や丹保遺跡^{たんぼ}などの弥生時代・奈良平安時代の大規模集落遺跡が調査されている。今回、確認調査を行い、結果は後世の耕作地造成の改変を受けているが、主に奈良平安時代の竪穴建物跡、土坑等が確認でき、本調査が必要と判断した。(鈴木時夫)



図27 五郎田遺跡2トレンチ

(5) 座光寺石原遺跡 正泉寺遺跡

社会資本整備総合交付金(広域連携)事業

1 座光寺石原遺跡

所在地および交通案内：飯田市座光寺2368ほか

J R 元善光寺駅から南西約1.3km

遺跡の立地環境：土曾川沿いに形成された谷地形
左岸の緩斜面に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2020.7.27~12.16	2,350㎡	贅田 明 吉川 豊

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴状遺構	2	古墳時代、時期不明
土坑	2	古墳時代、平安時代
集石炉	3	時期不明
焼土跡	1	時期不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代中期後半、弥生時代中～後期、古墳時代、平安時代、中世、近世以降
石器	縄文時代中期後半、弥生時代中～後期(打製石斧、石鏃、横刃形石器ほか)
玉類	古墳時代(勾玉、小玉、ガラス小玉)
金属製品	古墳時代(耳環、鉄鏃、辻金具ほか)



図28 遺跡の位置 (1:50,000)

調査の概要

中央新幹線の(仮)長野県駅と中央自動車道座光寺スマートインター(建設中)を結ぶ座光寺上郷道路の建設に伴い、座光寺石原遺跡と正泉寺遺跡の調査を実施した。

座光寺石原遺跡は、これまで縄文～古墳時代、平安時代～近世の散布地および古墳分布地として知られていたが、詳細は不明であった。

本年度は1・2・10区で調査を実施し、1区で古墳時代の竪穴状遺構と平安時代の土坑など、10区で時期不明の竪穴状遺構・集石炉・焼土跡などを検出した(図29)。また、2区は土曾川の氾濫原に含まれ、遺構は確認できなかった。

集石炉の調査

集石炉は3基検出した。そのうち、2基は直径60～65cm、深さ10～15cmの円形もしくは楕円形の掘り込みをもち、1基は礫が内部に密に詰まり、もう1基は礫が上部のみに散在していた。この2基は、掘り込みの壁や内部の礫に明確な被熱痕がない点で共通する。もう1基のSF01は、直径約1.7m、深さ65cmの円形に掘り込まれる。内部に

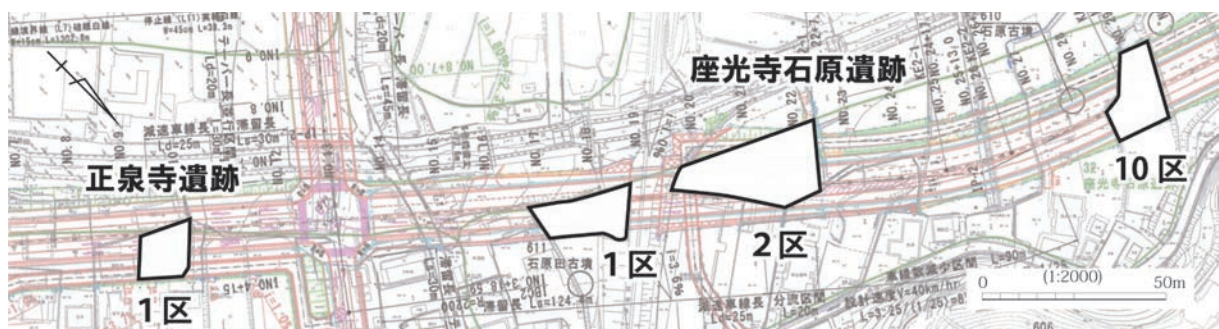


図29 座光寺石原遺跡、正泉寺遺跡の調査地点



図30 集石炉の底部付近 (SF01)

は礫が密に詰まり、底部付近の中央に長さ55cm、幅35cmの板状を呈する礫が水平に置かれていた(図30)。掘り込みの壁や礫は赤く焼け、焼土が観察できるなど、被熱が明確であった。時期は遺物が出土せず不明だが、SF01は埋土出土の炭を放射性炭素年代測定する予定である。

なお、集石炉は調査区の西～南側境界付近で検出されていることから、来年度以降に調査予定の10区西側へ分布が広がると考える。

古墳時代の竪穴状遺構

竪穴状遺構のSB02は隅丸長方形を呈し、短軸約2.6m、長軸4.8m以上を測る。底面は貼床や硬化面は認められず、段を形成していた。土師器高坏・須恵器甕・横瓶などの遺物がまとまって出土した。

SB02は、長軸方向が東側の来年度以降の調査範囲へと続くので東側には同時期の遺構が広がると考えている。一方、SB02の西側は遺構が確認できないのでSB02が遺構分布の境界と考える。

なお、1区周辺には石原田古墳が存在したとする記録が残る。今回の調査では、古墳に関わる施設は確認できなかったことから、1区には古墳が存在していなかった可能性が高い。しかし、表土下の黒褐色土から辻金具(図31)、鉄鏃、耳環、勾玉、小玉、ガラス玉など、古墳に副葬されることの多い遺物が一定範囲で出土したため、1区の近隣にかつて古墳が存在し、破壊され、その土砂が1区に流入したと推測される。

参考・引用文献

下伊那誌編纂会 1955 『下伊那史 第二巻』



図31 1区から出土した辻金具

2 正泉寺遺跡

所在地および交通案内：飯田市座光寺4098-4

J R 元善光寺駅から南西約1.2km

遺跡の立地環境：土曾川左岸の自然堤防上に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2020.7.27～12.16	350㎡	贅田 明 吉川 豊

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	2	弥生時代中期
土坑	4	弥生時代中期

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・石器	弥生時代中期

調査の概要

正泉寺遺跡は、採集された土器の一部が弥生時代中期の恒川式土器こんがを代表する資料とされるなど同時期を主体とする遺跡だが、発掘調査歴がなく詳細は不明である。今回の調査地点は、土曾川の氾濫原に含まれる可能性があったことから、遺跡の内容を把握するため、土曾川に直行する南北方向のトレンチを設定し、確認調査を行った。

結果は、深さ約80cmで弥生時代中期(北原式期)の竪穴建物跡および土坑を確認し、一帯が集落跡であることがわかった。今後は、今回の地点よりさらに東側で、確認調査を行う計画である。

(贅田 明)

参考・引用文献

上郷町教育委員会 1983 『堂垣外遺跡』

(6) 南の組塚平遺跡

南の組久保田遺跡

(下久堅バイパス建設事業関連)

所在地及び交通案内：飯田市下久堅下虎岩2838ほか（南の組塚平遺跡）、飯田市下虎岩2908ほか（南の組久保田遺跡）。

JR伊那八幡駅から南南東へ約2.0km 南の組塚平遺跡の西約60mに南の組久保田遺跡

遺跡の立地環境：天竜川左岸の河岸段丘上の傾斜地に立地。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2020.10.1～12.16	2,400㎡（南の組塚平） 2,000㎡（南の組久保田）	藤原直人、 鈴木時夫

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器（南の組塚平）	古墳時代
土器（南の組久保田）	平安時代

遺跡の概要

一帯は現在、水田や畑地・宅地として利用されている。南の組塚平遺跡範囲の北東には塚平古墳が存在する。墳丘の盛土部分が消滅し石室の基底部分と側壁の一部が露出している。また下虎岩地籍には塚平古墳の他に8基の古墳が登録されており、下久堅地区の中では比較的古墳が多い地域である。

南の組塚平遺跡では、幅約2mのトレンチを10本掘削した。その結果、古墳時代の土師器片が1点出土したが、遺構は確認できなかった。

南の組久保田遺跡では、トレンチを3本掘削した。表土層から須恵器片が1点出土したが遺構は検出できなかった。

また、南の組塚平遺跡の調査区東側や南の組久保田の調査区西側では地山の黄褐色土層が見られるが、南の組塚平遺跡の調査区西側や南の組久保



図32 遺跡の位置（1：50,000）



図33 天竜川を隔てて臨む南の組塚平遺跡：①と南の組久保田遺跡：②



図34 飯田市街地を望む調査区（南の組塚平遺跡）

田の調査区東側では耕作土直下には黄褐色土層はみられず、礫を多量に混入する粘質土層であったことから、地山の黄褐色土層は削平を受けたものと思われ、その削平に伴って遺構が消失したとも考えられる。

来年度、南の組久保田遺跡では、今回調査した地点以外の区域の調査が予定されている。近隣では打製石斧や平安時代初期の須恵器片・土師器片が出土していることから、遺構が存在する可能性が高い。（藤原直人）

Ⅲ 整理作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容（作業）	整理中の主な成果
南大原遺跡	中野市	防災・安全交付金（道路）事業 一般県道三水中野線	遺構図のデジタルトレース、図面整理、遺物接合・復元・実測・トレース、原稿執筆	弥生時代の土器は在地の粟林式と吉田式土器が大半を占め、稀に外来系土器が認められる。弥生時代中期後半の堅穴建物跡から、同心円文または渦文をもつ東北地方南部の川原町口式類似の壺形土器破片を確認した。
浅川扇状地遺跡群	長野市	社会資本整備総合交付金（街路）事業（都）高田若槻線	全体図の作成、遺構図の作成、遺構一覧表作成、遺構写真編集・版組、遺物写真撮影、原稿執筆など	本遺跡は弥生時代から近代までの複合遺跡で、以下の注目すべき遺物を確認した。弥生時代では他地域に類を見ない口縁が二段となる壺と、北陸地域の形態を取り入れた赤彩土器。古墳時代では、北陸地方や東海地方の特徴を持つ多数の土器。奈良・平安時代では、筆立付円面硯や帯金具、緑釉陶器。中世以降では、碗・徳利・燈明具などの生活雑器、キセル・寛永通宝、「従軍記念杯」など多彩な遺物を確認した。
塩崎遺跡群	長野市	一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築工事	遺構図のトレース、図面整理、土器接合・復元作業、石器・土器実測、骨の鑑定指導	弥生時代後期の堅穴建物跡で、東北地方南部の天王山式とみられる甕、北陸系の甕を確認した。また、平安時代の堅穴建物跡から出土した金属器のクリーニングで、皇朝十二銭の「隆平永宝」を確認した。
石川条里遺跡 長谷鶴前遺跡群	長野市	一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築工事	木製品整理、遺物実測・木製品写真撮影	木製品は、弥生時代中期後半が18点、同後期が79点、古墳時代前期が168点、平安時代が171点、中近世が4点である。中でも、平安時代の田下駄が37点出土したことが注目される。田下駄はすべて緒孔がある踏み板である。
一の釜遺跡	下諏訪町	国道20号（下諏訪バイパス）改築工事	遺物実測・トレース、遺構図および遺跡周辺の環境に関わる図面のトレース作業、図版作成、原稿執筆	黒曜石産地推定分析の結果は、資料160点のうち105点65%が星ヶ塔や星ヶ台産、43点27%が和田峠産、12点は産地不明ながら霧ヶ峰産と推定された。黒色土器坏が出土した長方形の土壇墓を集落から離れた単独の土壇墓と推定した。
沢尻東原遺跡	辰野町	北沢東工場適地開発事業	土器の接合・復元、遺構図トレース	顔面把手付深鉢をはじめ勝坂式土器が多く出土しており、器台形土器に象徴されるように山梨県との関係が注目される。さらに、平出三類A、下伊那型櫛形文、後沖式、焼町式などの土器も一定量出土しているだけでなく、東海、関西、北陸、越後系土器も少量出土しており、当該期に広範囲な交流が行われていたことがうかがえる。
羽場権現堂遺跡	飯田市	中央新幹線幹線建設関連	遺構図編集、遺物実測・トレース、写真撮影、各種計測台帳の作表、版組、原稿執筆、報告書印刷・製本	縄文時代中期初頭では他の地域との交流をうかがわせる東海地方や近畿地方に起源のある船元式土器・北裏C式土器が出土している。

(1) みなみおおほらいせき南大原遺跡

防災・安全交付金（道路）事業
一般県道三水中野線

2021年度の発掘調査報告書の刊行に向けて、遺物の分類・接合・実測・トレース、遺構図作成、原稿執筆等を行った。長野県埋蔵文化財センターによる第4次調査分（2011-2013年）に続く遺構は、過去の調査成果と照合し、図面の合成や遺物整理も行っている。

外来系土器

遺物は弥生時代中期後半から後期前半のものが主体となり、縄文時代前期、中期と古墳時代前期の土器がわずかに確認された。弥生時代の土器は在地の栗林式と吉田式土器が大半を占めるが、若干外来系土器も認められる。

図35の1～6は同心円文または渦文をもつ東北地方南部の川原町口式かわらまちぐち類似の壺形土器破片であり、いずれも弥生時代中期後半の堅穴建物跡（SB24）から出土した。

川原町口式土器は、千曲川流域の長野市松原遺跡まつばら、佐久市西一本柳遺跡にしいっぽんやなぎで確認される。また、新潟県や北関東地方でも出土事例が複数報告されている。千野浩氏がすでに指摘しているように後期前半の天王山式土器てんのうやまと合わせて、弥生時代中期終末～後期前半の東北系文化の南下現象が長野県域にも及んでいた可能性がある（長野市教育委員会2001『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』）。本例も東北系土器の伝搬の実態を探ることができる資料である。

このほか、7は中期後半の遺構から出土し、口縁部に赤彩、頸部に簾状文と2段の押し引き状の刺突列が施文される。8は後期前半の遺構から出土し、頸部に櫛描波状文が認められ、在地には見られない器形である。いずれも、栗林式土器や吉田式土器とは趣が異なる。

鉄製品および鉄器加工関連遺物

4次調査では弥生時代中期後半の鉄器加工の可能性について指摘した。今回の発掘調査でも、弥

生時代の鉄製品2点と鉄器加工に関連すると考えられる小鉄片や焼成粘土塊、敲石、台石がみつかった。鉄製品は長野県立歴史館でX線透過撮影を実施した。

図36の1は縁辺に切断したような面が確認され、2は右側面に加工途中の痕跡がみられ、いずれも小型工具等の未製品と想定される。これらの鉄製品は、X線CT検査を実施しており、その成果を待って、詳細な検討を行いたい。

（鶴田典昭）

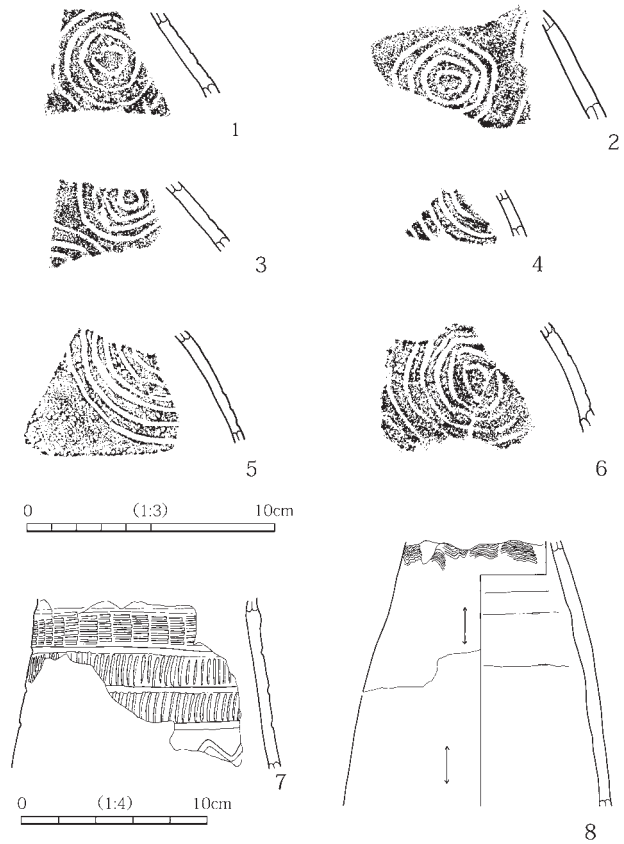


図35 外来系土器

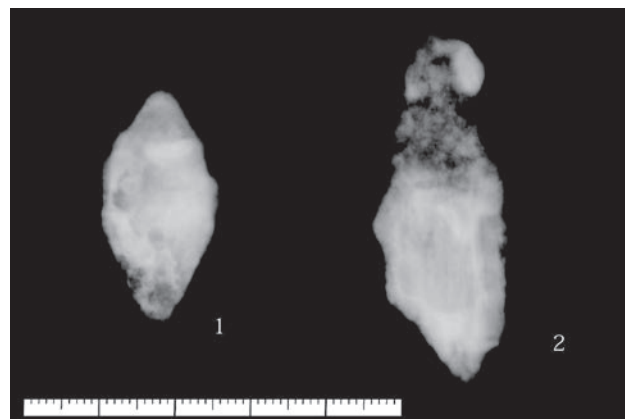


図36 弥生時代鉄製品のX線透過画像

(2) 浅川扇状地遺跡群

社会資本整備総合交付金（街路）事業
（都）高田若槻線

浅川扇状地遺跡群は2011年度から発掘調査を実施している。発掘調査で検出した遺構は下表のとおりである。

時期	遺構	竪穴建物跡	掘立柱建物跡	墓	溝跡	土坑
弥生時代後期		26	0	1	2	46
古墳時代		43	0	6	22	191
奈良・平安時代		149	1	0	44	474
中世以降		0	4	7	18	653
合計		218	5	14	86	1364

本年度は、2019年度に発掘調査を行った部分について本格整理作業を行い、それ以前の本格整理作業の内容と合わせて、報告書印刷の版組等の作成を行った。遺構記録についての主な作業は、全

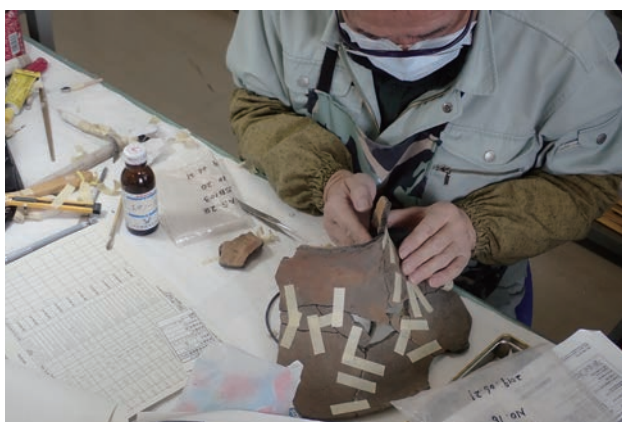


図37 土器復元作業風景

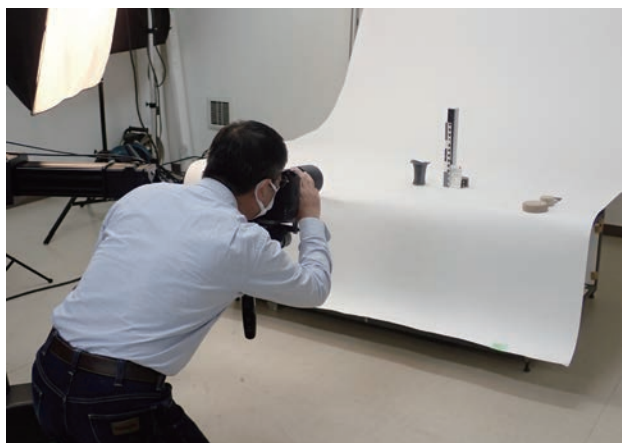


図38 遺物写真撮影作業風景

体図の作成、個別遺構図の作成、遺構の一覧表作成、遺構写真の選別・編集・版組、原稿作成などである。遺物についての主な作業は、2019年度に出土した土器・石器・石製品・金属製品の観察・選別、土器復元、土器・石器・土製品・金属製品等の実測・トレース、写真撮影、県立歴史館において金属製品の保存処理などである。また、報告書印刷に向けて、遺構図・遺物図等の版組、原稿作成などを行った。

以下に、整理作業により判明した、時代ごとの特徴をまとめる。

弥生時代

後期中葉から終末の集落跡・墓跡などがみつまっている。注目されるのは桐原地区で確認した終末期の方形周溝墓である。一部が調査範囲外となり、主体部は確認されなかったが、調査した周溝部分から、一辺が約17.5mの規模であると推定される。埋土からは葬送儀礼に使用されたと考えられる土器がまとまって出土した。その多くは、この時期の在地の土器の特徴である赤色塗彩が施されていて、うち3点の壺は、他地域に類を見ない口縁が二段となる器形を呈している。また、北陸



図39 二段の口縁を持つ壺

地域の甕の形態を取り入れた土器にも、在地の特色である赤色塗彩が施されている。このようなことは、他地域との文化的な交流を図りながらも、地域の伝統を重視しているこの時期の特徴をあらわしている。

古墳時代

前期から後期までの遺構がみつまっている。特に前期の竪穴建物跡は吉田田町地区の北側の地区を除くすべての地区に広がっており、相当規模の大集落が営まれていたと考えられる。

その前期の竪穴建物跡や墳墓跡からは、多くの土器が出土しており、北陸地方や東海地方の特徴を持つものも多数みつまっている。それらの遺物からは、古墳時代に東日本の各地で展開された広範囲な地域間の文化的交流が、この地でも例外なく行なわれていた状況を反映している事がうかがわれる。

奈良・平安時代

8世紀から9世紀の集落跡がみつまっている。この時期の竪穴建物跡の総数は149軒で、大規模な集落が営まれていたことがわかる。竪穴建物跡などの埋土からは、土師器、須恵器、灰釉・緑釉陶器、金属製品など様々な遺物が出土している。

なかでも注目されるのは、筆立付円面硯や帯金具、緑釉陶器など、役人や有力者が使用した道具の出土である。

このことは、集落内にそのような道具を所有する人物が居住していたことや調査地周辺に官衙の存在する可能性も考えられる。

中世以降

中世の遺構としては、掘立柱建物跡や堀跡・井戸跡・墓跡などを確認した。桐原牧神社東側の居館（桐原要害）の堀跡埋没時期は、埋土から出土した、在地系の土師器の皿や内耳鍋などから、15世紀前半ごろと推定できる。

近世以降の遺構としては、相ノ木通り（北国街道）周辺や桐原牧神社周辺から土坑が複数確認されている。遺物としては、近世の陶磁器製の碗・徳利・燈明具などの生活雑器、キセルなどの金属製品、桶などの木製品、瓦や寛永通宝、近代の磁器製の「従軍記念杯」と呼ばれる杯などが出土している。

これらの遺物は、材質も様々で産地も広範囲となり、そこから、一般の人々の生活や世情が色濃く反映されていることが読み取れる。

(西 香子)



図40 東海地方の影響を受けた台付甕



図41 筆立付円面硯



図42 キセル（雁首と吸口部分）



図43 従軍記念杯

(3) 塩崎遺跡群

一般国道18号(坂城更埴バイパス)改築工事

塩崎遺跡群は、千曲川左岸の自然堤防上に立地する弥生時代～中世の複合集落遺跡で、2013～2017年度に発掘調査し、下表のように数多くの遺構が検出された。整理作業は2016年度より着手し、本年度も整理作業を継続した。

本年度は、前年度に引き続き遺構図のデジタルトレースと図面整理、遺物は土器接合・復元作業、石器・土器実測、骨の鑑定指導を実施した。

遺構の種類	総数	時期
竪穴建物跡	442	弥生中期～平安
溝跡	98	弥生後期～平安
墓跡	111	弥生前期末～中世
土坑	2,168	弥生前期末～中世
井戸跡	93	弥生中期～中世

検出遺構数（2017年までの合計数）

竪穴建物跡の時期別軒数

本年度は遺構出土土器の分類・接合を終了し、遺構の時期がほぼ捉えられた。弥生時代後期の竪穴建物跡は軒数が最も多く、続いて古墳時代後期や奈良時代、そして平安時代がつづく。このなかで、竪穴建物跡の軒数が多い弥生時代後期と古墳後期～奈良時代では共通した特徴がある。この2つの時代はそれぞれ同じエリアに類似した規模・構造の竪穴建物跡が建てられ、柱穴やカマドの造り替えも認められる。これは、類似範囲で継続的に建替えが行われたもので、屋敷地のような居住範囲が決まっていた可能性がある。このことは古墳時代後期～奈良時代では集落内が短い溝跡数条で区切られていることも関連しよう。また、居住範囲が決まっていたとすれば、密集した居住であったともいえる。

石川条里遺跡との関係

塩崎遺跡群の竪穴建物跡軒数は時代により増減があるものの、弥生時代～平安時代にわたる長期の居住が確認できている。これは後背低地の水田遺跡である石川条里遺跡に隣接し、生産域に近い立地条件によるところが大きいと考えられ、おお

時代・時期		竪穴建物跡軒数	石川条里遺跡水田址
弥生時代	中期後半	25	
	中期後半末～後期初頭	9	○
	後期前半～	10	○
	後期後半	157	
古墳時代	弥生後期末～古墳時代初頭	19	
	前期前半	44	
	前期後半	0	○
	中期	4	
	後期	24	
奈良	古墳後期末～奈良時代初	32	○
	奈良時代前半	42	
	奈良時代後半～平安時代初頭	3	○
平安時代前期	48		
平安	時期不明	24	
計		441	

むね建物跡の増と水田跡の有無は対応している。しかし、石川条里遺跡で検出された水田遺構と塩崎遺跡群の竪穴建物跡の時期が厳密には必ずしも一致しないところがある。

例えば、石川条里遺跡の水田遺構は、古墳時代前期後半で、塩崎遺跡群の竪穴建物跡は主に前期前半に位置付けられる。

このような両者の遺構時期がずれる理由は、石川条里遺跡では泥炭や洪水砂被覆水田面を中心に調査したため、連続耕作等で遺存しなかった時期の水田面や水田遺構は捉えきれなかったり、調査地点以外の地点に水田域が存在していた可能性がある。なお、塩崎遺跡群でも未発掘調査範囲広大であり、その状況はわからないので同様な課題はある。

さらに、古墳時代中期など塩崎遺跡群では竪穴建物跡が少ない場合は、必ずしも水田耕作を集落立地背景に考える必要はないかもしれない。このことは土器の器種組成や生産具としての石器、金属製品等を含めて総合的に考える必要があると思われる。

土器整理作業の所見

本年度の土器整理作業のなかで特筆される事柄を中心に紹介する。

弥生時代後期：東北地方南部の天王山式^{てんのうやま}とみられる甕が確認できた。塩崎遺跡群西側の後背低地に近い場所で検出された竪穴建物跡 SB3009から出土したもので、口縁端部と体部下半を欠損するが、口縁は波状で、頸部近くに交互刺突文が認められる（口絵⑦）。

天王山式系甕は、竪穴建物跡の端部付近から北陸系甕の小片、箱清水式の赤彩壺や波状文甕とともに集中的に出土した。弥生時代後期の竪穴建物跡で、調査所見では同時廃棄されたものと捉えられているが、天王山式の甕は年代的に若干遡る可能性がある。

また、この甕は体部外面下半を欠損するが、内面はミガキ調整される。内面をミガキ調整する手法は、当地域の栗林式や箱清水式甕に共通して認められる手法であり、手法からは搬入品と断定できない。しかし、長野県では弥生後時代後期には縄文施文が施されなくなって、こうした土器を地元の間人が製作したとは考えにくい。この甕の位置づけについては、更に検討が必要である。

弥生時代後期末：前年度の年報で弥生後期の北陸系器台が出土していることは紹介したが、本年度は竪穴建物跡 SB2374から北陸系の甕が多く出土していることが確認できた。

北陸系の甕は、外反する口縁端部が面取されるものや、口縁部に擬凹線を施す形態で、外面はハケ調整・内面がケズリ調整するという特徴をもつ。これらの北陸系甕とされるものには、胎土が異なり、内面ケズリ調整の手法が認められる北陸から搬入されたとみられるものと、内面ケズリ調整は北陸の甕と同様の手法ながら、胎土は当地域の土器と同じものがある。前者は搬入品、後者は当地域で北陸と同形・同手法で製作されたもので、人間の移動の可能性が考えられる。

また、SB2374からは北陸甕と同形の口縁ながら、外面に波状文を施す甕も出土している。これまでに箱清水式波状文甕への北陸の影響は、球胴化傾向、頸部の折れ、口縁部の面取り等の、部分的な模倣が指摘されていたが、SB2374出土例のような北陸系甕の器形に波状文を施す土器はあま



北陸系甕



隆平永宝

り知られていない。むしろ箱清水式土器を模倣した北陸系甕とすべきかもしれない。

なお、北陸系土器の出土は本遺跡群のみではなく、長野市の浅川扇状地遺跡群、長谷鶴前遺跡群、石川条里遺跡、篠ノ井遺跡群、千曲川対岸の屋代遺跡群等で知られる。特定の集落に集中するよりも、地域北陸系甕全体に認められる。また、本遺跡では北陸系甕を出土した竪穴建物跡は方形を基調とし、弥生後期の長方形・長楕円形の竪穴建物跡と形状が異なる。

平安時代：本年度の金属クリーニングで皇朝十二銭の「隆平永宝」（初鑄年790年）が確認された。出土した竪穴建物跡 SB1113出土土器の食膳具組成は須恵器杯を中心に黒色土器杯が加わる。SB1113出土土器はこれまでの古代土器の研究結果に照らせば、9世紀前半頃とみられ、土器と出土銭の年代観に合致する。（市川隆之）

いしかわじょうり いせき はせつるさきいせきぐん
(4) 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群

一般国道18号(坂城更埴バイパス)改築工事

石川条里遺跡は、千曲川左岸の後背湿地に展開する水田跡を中心とした生産遺跡である。坂城更埴バイパス建設に伴う発掘調査は、2016年度から着手し、2019年度までに44,100㎡を終え、一部未調査区を残すものの、ほぼ終了したことから、本年度から本格整理作業に着手した。

隣接する長谷鶴前遺跡群は、千曲川左岸の山々が形成する崖錐傾斜地（微高地）と蓮田と呼ばれる低湿地にかけて立地する。この低湿地は中世（安土・桃山～戦国時代）以降には造成され、居館跡や近代の窯工房跡となったが、それ以前は石川条里遺跡から続く水田跡であった。よって水田跡から出土した木製品などは石川条里遺跡出土遺物と一括して扱うことにした（下表参照）。

	調査段階	整理段階
長谷鶴前遺跡群	150	37
石川条里遺跡	327	440

木製品整理作業の概要

本年度の作業は、基礎整理ですでに作成されている脆弱遺物台帳を基に、木製品整理カード（A5判）の作成からはじめた。カードには正面写真をつけ、実測および報告書掲載用写真撮影の要否、保存処理の優先順位等を記載した。さらに整理カードをもとに実測図作成163点、報告書掲載用写真撮影174点を完了した。また、293点の樹種同定分析をおこなった。

石川条里遺跡出土木製品の概要

木製品の時期別出土数を以下に示す。

時期	出土点数
弥生時代中期後半	18
弥生時代後期	79
古墳時代前期	168
平安時代	171
中近世	4

遺構との詳細な伴出関係は次年度に行う予定で



図44 木製品の写真撮影風景

あるが、ほとんどが畦畔に伴う杭か芯材である。

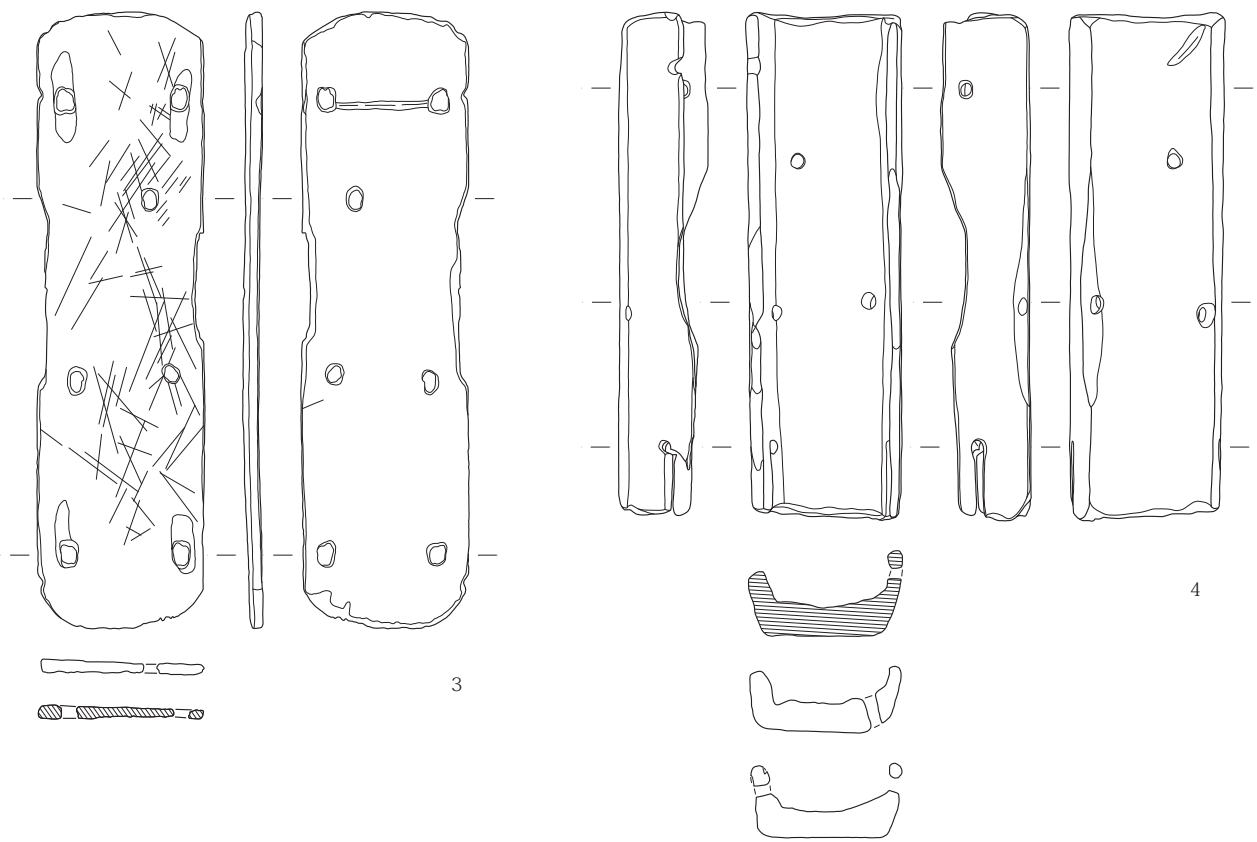
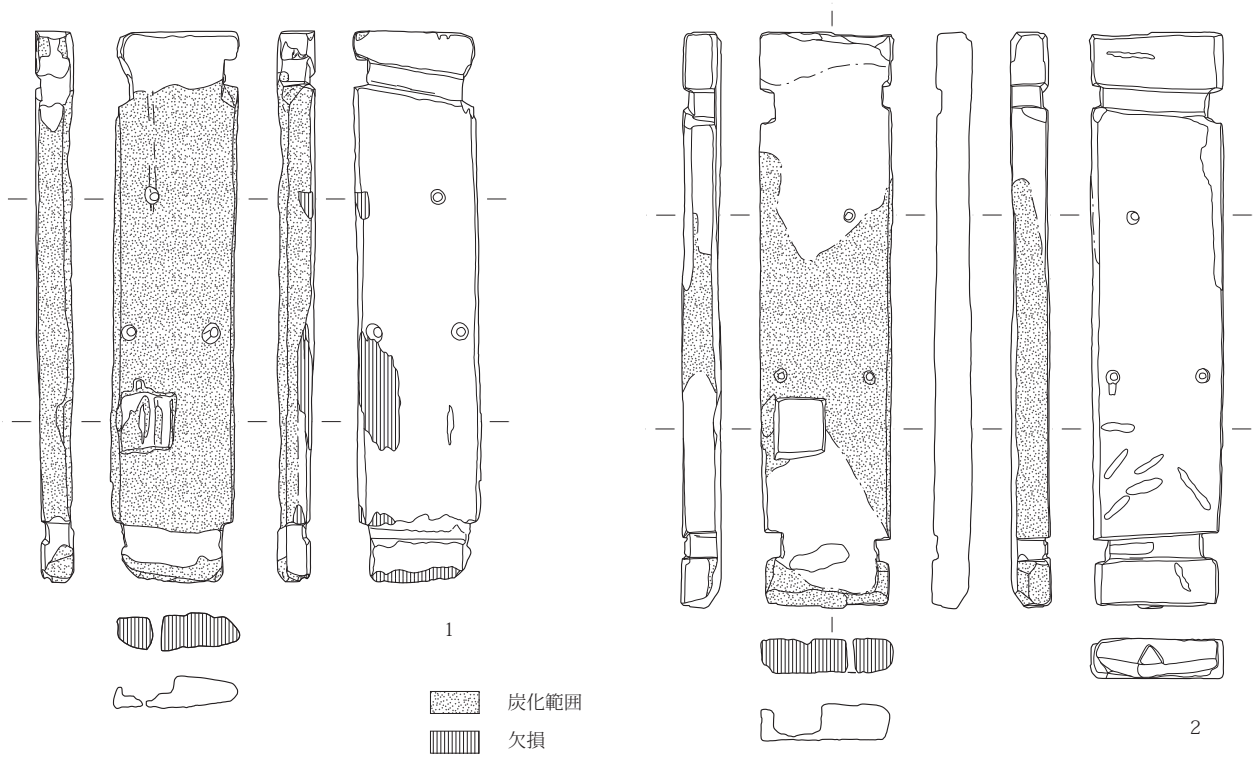
杭は、平安時代以前のものが大半で、内訳は、弥生時代中期後半が13点（同時期木製品の72%、以下同じ）、同後期が75点（95%）、古墳時代前期が151点（90%）となった。平安時代になると杭は、16点（9%）と極端に減少し、建築部材や板状木製品等を用いた芯材が89点（52%）に増える。石川条里遺跡では、畦畔構造が、杭を多用する弥生・古墳時代から芯材を多用する平安時代へと変化したことが読み取れた。

石川条里遺跡の田下駄

今回の調査で農耕土木具はさほどみられなかったが、その中では平安時代の田下駄が37点出土したことが注目される。出土した田下駄は、すべて緒孔がある踏み板である（図45）。1・2は隣り合って出土、一対になると思われる。他の田下駄より厚みがあるので、板状の建築部材等を転用したようである。3は表面に細い刻みが観察される。4は樋を再利用している。田下駄としての一定の用材、規格はないようで、廃材などをうまく再利用しているようだ。今までに石川条里遺跡では弥生・古墳時代のものも含め16点が出土、周辺では川田条里遺跡で18点、榎田遺跡で5点、千曲市更埴条里遺跡5点とまとまっているので、今後、時期や形態を比較検討したい。

長谷鶴前遺跡群出土木製品の概要

長谷鶴前遺跡群の37点はすべて中世であった。曲物など生活用具が出土している。特筆されるべき遺物に、居館の堀跡から「三方」が出土している（昨年度の『年報36』参照）。（大竹憲昭）



0 (1:6) 20cm

図45 石川条里遺跡出土田下駄 (1・2 : SC04, 3・4 : SC11)

(5) 一の釜遺跡

一般国道20号(下諏訪岡谷バイパス)改築工事

本遺跡は、2019年度に発掘作業を実施し、縄文時代と平安時代の遺構・遺物を検出した。

昨年度基礎整理を終了しており、本年度は出土遺物の整理・実測作業、遺物実測図、遺構図および遺跡周辺の環境に関わる図面のデジタルトレース作業と図版作成、原稿執筆を実施した。

縄文時代早期・前期の集落跡

縄文時代の遺構には、竪穴建物跡2軒、土坑17基がある。斜面に立地するため、竪穴建物跡の遺存状態は良くないが、SB02は遺物が少量ながら早期立野式土器がまとまっている。SB01は早期土器も混じるが、諸磯b式新段階からc式土器が多い。

土坑は平面形が円形か不整楕円形、規模は長径1.3m、深さは0.4m前後が多く、最大0.8mまでである。遺物には特徴的な出土状況は認められなかったが、諸磯b式新段階から十三菩提式並行期の、前期末葉土器を出土した土坑が多い。

遺物について前述した土器以外の時期では、早期条痕文期の茅山下層式、絡条体圧痕文土器と東海系土器、前期前葉から中葉の羽状縄文系土器と木島式、中越式、晩期末葉の氷I式少量などが出土している。

石器の器種には、石鏃、石錐、スクレイパー、石匙、凹石・磨石・敲石類、石皿、台石などがある。剥片石器の石材は、わずかなチャートなどを除いて黒曜石が占める。原石、石核、剥片・碎片類と、くさび形石器、小剥離痕ある剥片などが多数出土している。前年度実施した黒曜石産地推定分析の結果は、資料160点のうち105点65%が星ヶ塔や星ヶ台産、43点27%が和田峠産、12点は産地不明ながら霧ヶ峰産と推定された。

縄文時代の遺構・遺物については、隣接する武居林遺跡を含め、これまでの下諏訪町教育委員会による調査結果とおおむね共通する。その中で、立野式期と諸磯b式期にかかる竪穴建物跡は、確

認されていない時期の遺構である。

本遺跡を中心に東西約24km・南北約16kmの範囲にある、縄文前期末葉前後の遺跡を概観すると、諸磯a・b式期の遺跡は約30か所、諸磯c式・十三菩提式期は約70か所、中期初頭五領ヶ台式期は約60か所と推移する。本遺跡と同時期の遺跡は下諏訪町から岡谷市の湖北地域では密度が高い。時期の継続性、竪穴建物を有する遺跡と土坑群のみの遺跡など、いくつかの型があるらしい。遺跡の立地環境、黒曜石の利用状況など、様々な視点から総合的に検討することが今後の課題となる。

平安時代の土坑墓

SK18は、長さ1.22m、幅0.86m、検出面からの深さ0.38mを測る、隅丸長方形の土坑である。北東隅から黒色土器坏が1点出土した。形態と遺物出土状況から、9世紀代の土坑墓、または木棺墓と考える。同時期の遺物には土器数片があるのみで、町教育委員会による調査でも遺構は検出されていない。集落から離れた単独の墓であろう。

(綿田弘実)



図45 縄文前期末葉土器 (SK02)

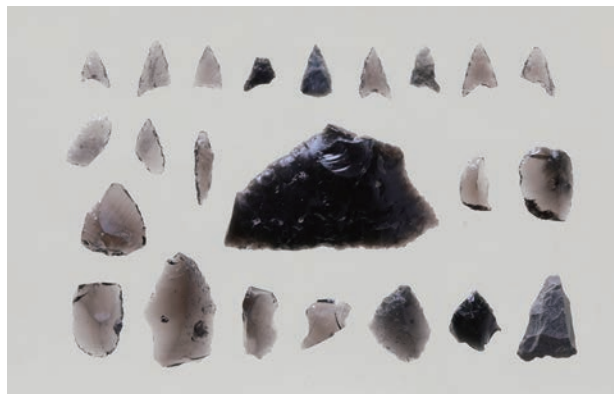


図46 縄文前期剥片石器 (SB01)

さわじりひがしばら いせき
(6) 沢尻東原遺跡

北沢東工場適地の開発事業

本遺跡は、2019年度に発掘作業を実施し、本年度から本格整理作業を開始した。

本遺跡は、天竜川右岸の河岸段丘上に立地する。調査対象面積は1.8haと広大で、縄文時代中期集落のほぼ全体を調査した。現天竜川との比高差は約13mを測る。

これまでに判明した遺構数は以下のとおり。

遺構の種類	総数	時期
竪穴建物跡	50	縄文時代中期
	1	古墳時代前期
屋外埋設土器	43	縄文時代中期
土坑	54	縄文時代中期

本年度は出土土器の接合、復元と遺構のデジタルトレースを実施し、うち土器の接合が完了した。

本年度に得られた所見により、各遺構の時期を検討することが可能となり、集落の様子が明らかになりつつある。以下、中間報告として紹介する。また、接合が終了した一部の土器の遺物オルソ画像等作成を外部に委託した。

縄文時代中期の集落変遷

集落は長野県縄文中期3期～10期（文献1）ま

で継続する。3期と10期を除き、集落のまとまりが南北の2群に大きく分かれることが判明した。竪穴建物跡の軒数は、常に北群が多く、南群に対し数的に優位であったと考えられる（図48）。

集落の開始は3期で4軒程が確認できる。4期は集落が南北2群に分かれる。北群の軒数は前段階と同程度であるが、南群にも竪穴建物跡がみられる。5～8期に南北両群で軒数が増加し、9期に集落全体で20軒程と最盛期を迎える。しかし10期になると軒数が激減し、集落の北端に2軒程しか確認できなくなる。当該期に南北2群が対峙する構造はなくなり、その直後に集落は廃絶に至る。略完形土器が大量に出土する竪穴建物跡

50軒の竪穴建物跡のうち、数軒からは略完形土器が大量に出土した（図49）。1軒の建物跡の中で3～4時期に渡る土器が出土しており、廃屋が継続的に利用された状況を示している。土器の中には底部を欠損した土器が逆位で出土する例や2個体が横位に並ぶ例、土器を割った状態で広げる例など、通常の出土状況と異なる事例が存在する。（P43～50の調査研究ノート参照）。一方で小破片が少量しか出土しない竪穴建物跡も存在する。こうした土器出土状況の差が何に起因するかについては今後の検討課題である。

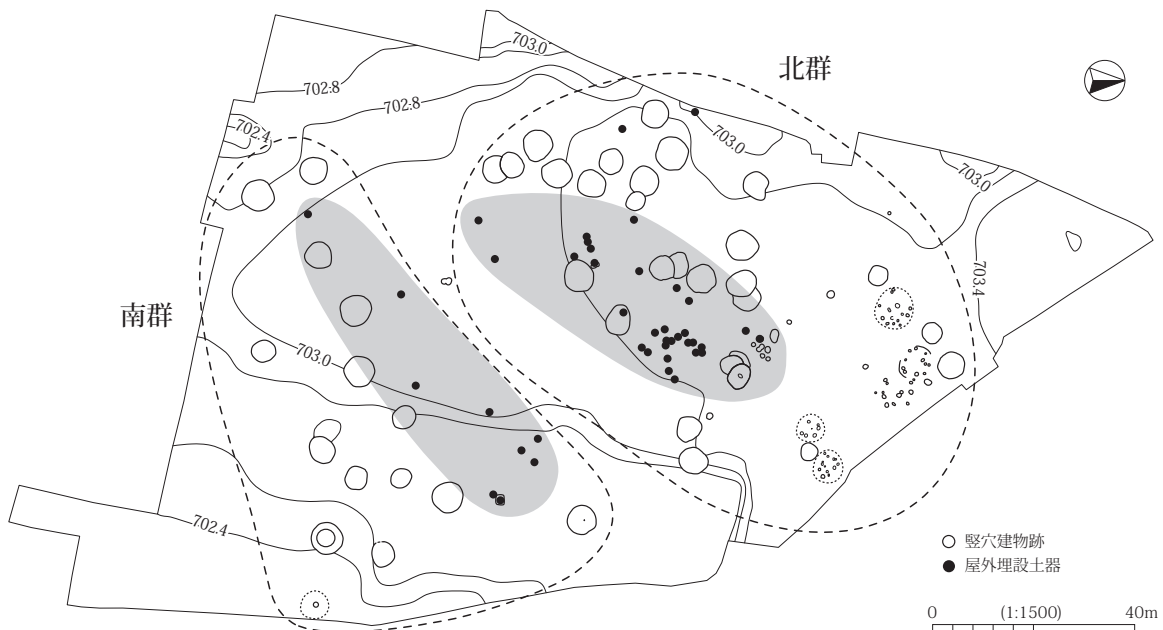


図48 沢尻東原遺跡 主要遺構配置図



図49 13号竪穴建物跡遺物出土状況

屋外埋設土器群

出土状況の検討から、3期～9期までの期間にわたり43基が埋設されることが判明した。特に7～9期に伴うものが多い。これは当該期の竪穴建物跡軒数の消長と連動している。

埋設場所は居住域に近接する。特に7～9期は南群、北群の両居住域に明確に埋甕群が伴う（図48）。埋甕は主に深鉢を用い、口縁から底部まで残存したとみられ、穿孔はない（口絵⑧）。埋設法は正位を基本とし、斜位、横位は数基しかない（図50）。深鉢の器高は50cm台と30cm台に大別される。

なお、屋外埋甕の分布は特定住居群との関連性がうかがえる、上伊那では南箕輪村久保上ノ平遺跡（文献2）に類例がみられる。こうした観点で既出資料を見直せば、類例は増えるものと思われる。

多様な土器

顔面把手付深鉢（口絵⑧）をはじめ諏訪地域を



図50 屋外埋設土器群出土状況



図51 器台形土器



図52 後沖式土器

含む八ヶ岳南西麓～関東南西部と関係が深い勝坂式が多く出土している。中でも、器台形土器（図51）に象徴されるように山梨県との関係が注目される。さらに、伊那谷の平出3A式土器、下伊那型櫛形文、東信の後沖式（図52）や焼町式なども一定量出土しているだけでなく、東海、関西、北陸、越後系土器等も少量出土しており、当該期に広範囲な交流が行われていたことがうかがえる。

土偶

主に立像土偶の破片であり、頭部、胴部、臀部、手、足などが出土した。現在までに26点を数え、上伊那地域としては比較的まとまった資料である。板状の顔の表現にはカップ型や、板状の顔面に粘土紐で眉から鼻を貼付する例（図53）などがある。出尻土偶は9～10期に多い傾向がある。

整理作業は年度以降も継続する。接合結果を基に各遺構の時期を確定し、遺構・遺物の変遷など様々な観点から検討を進めたい。（廣田和穂）



図53 土偶

参考・引用文献

- 1 宮崎朝雄・綿田弘実2013「長野県における縄文時代中期土器の編年と動態」『文化の十字路信州』日本考古学協会
- 2 南箕輪村教委1997『久保上ノ平遺跡』

(7) 羽場権現堂遺跡

(中央新幹線建設工事関連)

風越山^{かざこしやま}の南麓、松川左岸の河岸段丘上に位置し、また、同じ段丘上には縄文時代早期・中期、弥生時代後期の遺跡が分布している。

調査区は飯田と南木曾を結ぶ旧大平街道の拡幅に伴うものであるため、東西約100mの東西に細長い調査区で、500㎡の発掘作業を昨年度実施した。検出した遺構は縄文時代中期初頭～中葉1軒(SB01)、中期後葉1軒の竪穴建物跡(SB02)、土坑81基である。出土した遺物はコンテナに28箱分である。

本年度は本格的な整理作業(遺構図編集、デジタルトレース、遺物選別、実測・写真撮影、各種計測台帳の作表、版組、原稿執筆、報告書刊行(12月)、印刷・発送、収納)を実施した。

遺構の内容

SB01は1区の中央付近で検出され、床面の中央に埋甕炉を伴っていた。SB02は2区の西端部で検出され、南東壁寄りと南西壁寄りから2基の埋甕が出土した。このうち、南西壁寄りの埋甕は床面が埋甕上を覆っており南東壁寄りの炉が構築される以前の埋甕と考えている。2軒とも遺構の一部は調査区外に及んでいるが、検出部分から円形基調の平面形を呈していると推測する。

土器の様相

1区ではSB01を中心に中期初頭～中葉の土器



図54 遺物実測作業

が、2区ではSB02を中心に中葉後葉の土器が出土した。

中期初頭では五領^{こりょう}ヶ台式土器^{がだい}、平出3A式土器^{ひらいで}、中期中葉が猪沢式土器^{むじなざわ}、新道式土器^{あらみち}などが出土している。SB01は調査当初中期初頭でも古手の様相を示しているものと考えていたが、共伴する集合沈線文系の土器の中に、「U」字状沈線区画と三叉文の組み合わせなど中期初頭の中でも比較的新しい段階の様相を示す土器が出土していることから中期初頭の中でも比較的新しい段階ととらえている。中期後葉では下伊那唐草文式土器^{からくさもん}を主体に出土した。

また、中期初頭では他の地域との交流をうかがわせる近畿・瀬戸内系^{ふなもと}の船元式土器・東海系の北裏C式土器が出土している。

石器の様相

主な器種は打製石斧48点、横刃形石器33点、石鏃4点、石鏃未成品が4点、石匙2点、石錘6点、磨製石斧6点、敲石8点、磨石2点、凹石1点、石皿4点、台石2点等である。採集具が多く、狩猟具が少なく、漁労具が散見される。打製石斧は欠損品が多い。短冊形が主で撥型・分銅型はみられない。石材では緑色岩が半数を占め、次いで硬砂岩が多い。横刃形石器では逆に硬砂岩が3分の2、次いで緑色岩となる。打製石斧では緑色岩、横刃形では砂岩系が多い結果となった。下伊那地域には横刃形石器は県内の他の地域に比べて比較的出土する割合が多く、本遺跡でも例外ではない。また、石鏃、石鏃未製品、石匙の石材では、黒曜石が6点、下呂石4点で、下呂石の比率が高いのも下伊那地域の特徴であるといえる。

(藤原直人)



図55 SB01の埋甕炉に使用された土器

Ⅳ 普及公開活動の概要

	分類	名称	場所等	期日	参加者数(名)
①	施設公開	考古学教室	埋文センター	8/7～8	241
②	現地説明会		氏神遺跡	6/20	31
			ふじ塚遺跡	10/31	40
③	遺跡見学会	中野市豊井小学校	南大原遺跡	9/3	21
④	速報展・講演会	長野県の遺跡発掘2020	長野県立歴史館	3/14～6/14	882
		県庁ロビー展	長野県庁	11/2・3	—
		掘るしん in ながの 講演会	ホテルメトロポリタン長野	12/12	90
⑤	講座	長野県の文化のはじまり・長野市の文化のはじまり	篠ノ井老人福祉センター	6/18	16
		千曲川河岸低地が一等地だった縄文時代～千曲市屋代遺跡群を中心に～	篠ノ井老人福祉センター	7/16	15
		篠ノ井塩崎の遺跡が今に伝えること・弥生時代	篠ノ井老人福祉センター	8/20	17
		シナノから科野へ、そして信濃へ	篠ノ井老人福祉センター	9/17	15
		篠ノ井地区の遺跡・歴史散策	長野県埋蔵文化財センター	10/15	15
		発掘でわかる古代の人びとの暮らし—浅川扇状地遺跡群—	篠ノ井老人福祉センター	11/19	17
		遺跡からみた中世の篠ノ井周辺	篠ノ井老人福祉センター	12/17	14
		サムライの屋敷を掘る	篠ノ井老人福祉センター	1/21	15
	出前授業	縄文時代と弥生時代について	長野市立三輪小学校	6/17	61
		埋文センターの仕事	長野市立通明小学校	8/25	124
		大昔の暮らしにふれてみよう	長野市立安茂里小学校	9/29	46
縄文人と弥生人を比べてみたら		坂城町立坂城中学校 「学びほぐしタイム」	1/13	16	
⑥	発掘体験	中野市高社小学校	南大原遺跡	8/4	2
⑦	職場体験	長野市立篠ノ井東中学校	埋文センター	9/24・25	3
⑧	施設利用		展示室		54
			図書室		58
				総計	1793
				国補対象計	848

◎上記の内、太字の普及公開活動は、文化庁の国補事業「地域の特色ある埋蔵文化財補助事業」を活用して実施した。

◎展示室・図書室の利用人数は2月末日現在の数字。

(1) 施設公開

○夏休み考古学教室の開催

実施日：8月7日（金）午後1時～4時

8月8日（土）午前9時～午後3時

目的：夏休みの期間中に、埋蔵文化財センターの施設を一般公開し、展示室や実際の整理作業を見学してもらう。また、埋蔵文化財に関連する体験を家庭で挑戦してもらうことで、埋蔵文化財に対する理解をより深める。

内 容：

- ・施設公開…展示室や土器の接合作業を公開、文化財や考古学の質問に回答
- ・体験…施設内での体験は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため実施しなかったが、埋蔵文化財に関連する体験を自宅で挑戦してもらうことができる勾玉作成キットを配布

来場者数：241名

7日（金）109名、8日（土）132名

本年度は、新型コロナウイルス感染防止のため、施設内での体験の中止や規模の縮小等、例年

とは違った施設公開とすることとした。

当センターの業務理解の促進や埋蔵文化財に対する理解の深化という本来の趣旨に立ち返ってその内容を検討した上で、新型コロナ感染症対策に関する感染防止策等を講じて実施することができた。

地元篠ノ井地区を中心に長野市内の小学生以下の子供とその家族が多数来場された。感染防止のため遠くへ出かける機会が減ったせいも、初めて参加したという方が例年になく多かった。一方で何年も続けて来場している方も少なくなく、夏休みのイベントとして定着してきている。

施設内には、床に縄文時代の動物の足跡を配し、社会的距離を保って見学していただけるような工夫を施した。今回のブースは、接合作業の見学、展示室の見学、除籍本の配布であった。いずれも体験型ではなかったが参加者には好評であった。しかし、アンケートなどでは体験を望む声も聞かれた。来年度は、新型コロナ感染症の感染状況を踏まえた上で、来場者が参加できるような公開内容を考えて実施していきたい。

また、本年度は、自宅で埋蔵文化財に関する体験ができる記念品として、まが玉作成キットを配布し好評を得た。

来場者へのアンケートでは、「小学生や幼児も楽しめるよう、廊下に動物の足跡があったり、わかりやすく説明していただいたりして、おもしろかった」、「コロナを意識した展示のしかたに工夫があってよかった」など、好意的な感想が多かった。（西 香子）



図56 社会的距離を保つための足元標示



図57 接合作業見学の様子



図58 展示室見学の様子

(2) 現地説明会・遺跡見学会

現地説明会・遺跡見学会は、3遺跡で実施した。見学者は延べ92名であった。

①現地説明会

○氏神遺跡（朝日村）

開催日：6月20日（土） 見学者：31名

朝日村教育委員会との共催で実施した。新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、参加者は村教委の募集による村民限定の事前予約制とした。

縄文時代の竪穴建物跡と土坑、平安時代の竪穴建物跡と掘立柱建物跡といった遺構を公開したが、なかでも平安時代の遺構は、村内初の発見となったため、興味深く説明に聞き入る姿がみられた。また、土器や石器等の遺物の展示も行った。参加者からは、発見された遺構や出土遺物に関する、遺跡の調査方法や、縄文人の平均年齢など多岐に及ぶ質問が寄せられた。



図59 氏神遺跡の現地説明会の様子

○ふじ塚遺跡（下諏訪町）

開催日：10月31日（土） 見学者：40名

中世末～近世初頭の礫石経塚を公開した。新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、主に地元の東山田地区と星が丘地区の住民を対象とし、見学者は事前予約で募集した。

遺構では多量の礫石経が出土している様子を中心に説明した。また、現地では、礫石経や銭貨などの出土遺物も展示した。

見学者は、「ふじ塚古墳」として知られていた



図60 ふじ塚遺跡の現地説明会の様子

高まりが礫石経塚であったことに驚いていた。そして、この場所に礫石経塚がつくられた意味や諏訪地域での類例、石に書かれた字の種類や特徴についての質問が相次いだ。（河西克造）

②遺跡見学会

○南大原遺跡（中野市）

開催日：9月3日（水） 見学者：中野市立豊井小学校6年生19名、職員2名

地元の小学校6年生全員が歴史学習の一環で見学した。身近な畑の下から、2千年以上前の土器や建物跡が発見されることにびっくりしていた。順番に土器を触ると、「弥生土器は薄くてザラザラしている」、「持ってみると思ったより軽いよ」といった感想が口々に出た。発掘現場でしか味わえない「生の歴史」を感じてもらえた遺跡見学会であった。（西山克己）



図61 遺跡見学会の様子

(3) 速報展・講演会等

○速報展

開催日：3月25日（水）～6月14日（日）

会場：長野県立歴史館

見学者：882名

内容：長野県立歴史館の『春季展2020年 長野県の考古学—命をつなぐ技と交流—』に共催し、「長野県埋蔵文化財センター調査遺跡」コーナーで調査成果の展示を行った。

今回は、南大原遺跡（中野市）と沢尻東原遺跡（辰野町）の出土資料を出品した。

南大原遺跡は弥生時代中期の栗林式土器や管玉のほかに鉄製品加工に関連する遺物を、沢尻東原遺跡は、縄文時代中期の土器、土偶、石器を展示した。

なお、今回の長野県立歴史館春季展に伴う関連イベントは新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から中止となった。

(廣田和穂)



図62 南大原遺跡の展示



図63 沢尻東原遺跡の展示

○掘るしん in ながの2020

「塔鏡形合子は何を語る」

開催日：12月12日（土） 参加者：90名

会場：ホテルメトロポリタン長野

内容：長野市小島・柳原遺跡群で出土した「塔鏡形合子」について、日本を代表する2名の研究者による製作技術とアジア史的な視点で講演を行い、あわせて塔鏡形合子の実物と模造品を展示・公開した。参加者からは、「講演は長い歴史を背景とした技術史的かつスケールの大きな世界的な観点からの話が聞けてよかった」、「日光男体山の塔鏡形合子と共通点があることを知り驚いた」などの感想を得た。

講演会：

「基調報告」寺内貴美子（主任調査研究員）

「正倉院宝物にみられる古代技術と塔鏡形合子」

西川明彦氏（宮内庁正倉院事務所長）

「塔鏡形合子がたどった道」

内藤栄氏（奈良国立博物館学芸部長）

(廣田和穂)



図64 内藤栄氏の講演



図65 塔鏡形合子と模造品の展示

(4) 県庁ロビー展

○生涯学習月間長野県庁ロビー展示

開催日：11月2日（月）～13日（金）

会場：長野県庁1階 玄関ホール

内容：長野県教育委員会文化財・生涯学習課による生涯学習月間の展示に協力して、当センターの事業内容や、イベントについて紹介した。

（廣田和穂）



図66 県庁ロビー展の様子

(5) 講座・出前授業・発掘体験等

① 講座

○篠ノ井老人福祉センター生きがづくり講座

「おとなりさんの考古学入門」(全8回)

- 1) 「長野県の文化のはじまり・長野市の文化のはじまり―旧石器時代の信州―」(6/18)
- 2) 「千曲川河岸低地が一等地だった縄文時代～千曲市屋代遺跡群を中心に～」(7/16)
- 3) 「篠ノ井塩崎の遺跡が今に伝えること・弥生時代」(8/20)
- 4) 「シナノから科野へ、そして信濃へ」(9/17)
- 5) 「篠ノ井地区の遺跡・歴史散策」(10/15)
- 6) 「発掘でわかる古代の人々のくらし―浅川扇状地遺跡群」(11/19)
- 7) 「遺跡からみた中世の篠ノ井周辺」(12/17)
- 8) 「サムライの屋敷を掘る」(1/21)

当センター職員による連続講座を8回にわたり実施した。9月の講座では篠ノ井地区に残された近代歴史遺産を巡る歴史散策も取り入れた。見慣れた風景の中の意外な歴史遺産を知ることができ

たとの感想も寄せられ、好評を得た。

② 出前授業

○長野市立三輪小学校 6月17日（水）

内容：「縄文時代から弥生時代へ、人々の生活がどのように変化していったのか」

（6年生2クラス70分ずつの授業）

縄文土器、弥生土器に触れることにより、両土器の大きな違いを体感し、土器の文様を粘土に施文する体験も行った。また弥生時代青銅器の銅鐸や銅戈のレプリカに触れ、銅鐸を鳴らし本来の音を体感し、また銅戈についてはその使い方を体感した。子どもたちは土器の違い、銅鐸の音、銅戈の使用方法に興味を示していた。



図67 三輪小学校出前授業の様子

○長野市立通明小学校 8月25日（火）

内容：「長野県埋蔵文化財センターの仕事」

（6年生4クラスを2組に分け60分ずつの授業）

「埋蔵文化財って何?」、「遺跡って何?」、「どこに遺跡があるの? なぜわかるの?」から、「身近にどのような遺跡があるかな?」、「なぜ発掘調



図68 通明小学校出前授業の様子

査をやるの?」、「出土した土器や石器はどうするの?」、「発掘調査の記録はどうやって残すの?」を柱に、それぞれの疑問に即したパワーポイントを使いながら6年生の目線に合わせた解説を心掛けた。子どもたちは関心を持ったようで、多くの質問が寄せられた。

○長野市立安茂里小学校 9月29日(火)

内 容:「大昔のくらしにふれてみよう」

(2クラス合同で45分授業を2回)

歴史や考古学に興味を持ってもらうことを優先し、学校の近くにある古墳の紹介からはじめた。次に「となりのトトロ」を題材に、昔のくらしを学ぶことの楽しさについて、児童からの発言を主に行った。最後に、本物の土器や銅鐸の複製品を触り、観察してもらった。後日、近くの古墳見学や勾玉づくりを行うなどの成果につながった。



図69 安茂里小学校出前授業の様子

○坂城町立坂城中学校 1月13日(水)

内 容:「縄文人と弥生人を比べてみたら」

(1~3年生の希望者・地域住民:16名)

放課後に月2回程度開催する「学びほぐしタイム」のひとつとして実施した。生徒のみならず地域住民の方も参加する講座である。前半はクイズを解いてその解説をするクイズ形式で、縄文人と弥生人との違いを探った。後半には持参した弥生時代の大型蛤刃石斧や石包丁を実際に手に取っての観察を行った。石包丁にみられる精巧な穿孔技術にじっと見入る参加者が多く、「やはり、本物はすごい」との感想が寄せられた。



図70 坂城中学校「学びほぐしタイム」の様子

③職場体験

○篠ノ井東中学校 9月24日(木)・25日(金)

内 容:整理作業の体験

参加者:2年生3名

1日目は沢尻東原遺跡の縄文土器の接合作業に従事した。細かい破片から土器の形がわかる大きさまで接合できたものもあり、接合作業の難しさややりがいを感じていたようであった。2日目は図書室で全国から送られてくる報告書等の図書整理を体験した。

④発掘体験

○中野市立高社小学校 8月4日(火)

内 容:南大原遺跡での発掘作業

参加者:6年生1名、職員1名

考古学に強い興味を持つ児童1名を受け入れた。酷暑のなか、作業員と共に発掘作業と遺物洗浄作業を体験。自分の手で弥生土器を掘り出したことに満足そうであった。(西山克己)



図71 発掘体験の様子

(6) 体験学習用教材

○縄文土器立体パズル製作事業

体験学習用教材として土器立体パズルを国補事業で製作した。モデルは整理作業中である辰野町の沢尻東原遺跡出土の縄文土器とした。

立体パズルの素材にはエポキシ樹脂を使用し、パズル表面はモデルとなる土器に近い色調に彩色とした。完成した立体パズルは、今後実施する普及啓発活動や体験学習において活用する。

(廣田和穂)

(7) 施設利用

○展示室

当センターでは、発掘作業・整理作業を実施している遺跡の中で速報性のある出土品や普及公開資料等を展示室において一般公開している。本年度は南大原遺跡・浅川扇状地遺跡群・塩崎遺跡群・石川条里遺跡・沢尻東原遺跡の遺物を年度当初から展示してきた。途中1回の展示替えを行い、3遺跡の資料を新たに紹介した。飯田市羽場権現堂遺跡の縄文時代中期の遺物、下諏訪町ふじ塚遺跡の一字一石経・宋銭等、朝日村氏神遺跡の縄文時代及び平安時代の遺物を展示した。

これらの展示替えとは別に、「掘るしん2020」の開催直後の12月14日～17日の間は小島・柳原遺跡群出土の「塔鏡形合子」を特別展示した。

本年度の展示室へは2月末までに58名の見学者があった。

(廣田和穂)



図22 展示室の様子

(8) 出版物

○長野県の埋蔵文化財情報誌『信州の遺跡』

【第15号】令和2年7月30日(木)発行

- ・最新報告書から(佐久市 地家遺跡・北裏遺跡、佐久穂町 満り久保遺跡、長野市 小島・柳原遺跡群、北相木村 栃原岩陰遺跡、木島平村 平塚遺跡)
- ・埋文展示室から(長野市 浅川扇状地遺跡群・塩崎遺跡群・石川条里遺跡、中野市 南大原遺跡)ほか

【第16号】令和3年2月16日(火)発行

- ・最新調査成果から(松本市 史跡弘法山古墳、佐久市 香坂山遺跡、朝日村 氏神遺跡、信濃町 宮ノ越遺跡、辰野町 沢尻東原遺跡)ほか

○教育普及誌

『かがみちゃんと学ぼう ジュニアこうこがく』

【第9号】令和3年3月11日(木)発行

- ・発掘調査って何だろう？
- ・発掘現場をみてみよう ほか

○報告書

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書128

『中央新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 飯田市その1 羽場権現堂遺跡』

令和2年12月21日(月)発行

- ・縄文時代中期初頭～後葉の集落遺跡の報告書。

○『長野県埋蔵文化財センター年報 37』

令和3年3月23日(火)発行

- ・2020年度の事業概要 ほか

(風間真起子)



図23 『信州の遺跡』第15号



図24 『信州の遺跡』第16号

V 指導者招へい

期 日	所 属	氏 名	内 容
4月29日	長野南警察署交通課	玉置英夫	交通安全講習
5月31日	長野労働局健康安全課	松下耕治	労働安全衛生職員研修
7月28日	早稲田大学	高橋龍三郎	沢尻東原遺跡整理指導
8月18日～20日 10月21日～23日 3月10日～12日	京都大学名誉教授 獨協医科大学 総合研究大学院大学	茂原信生 櫻井秀雄 本郷一美	出土骨鑑定指導
10月22日～23日	立正大学	時枝 務	ふじ塚遺跡調査指導
12月11日	長野県文化財保護審議会	市澤英利	浅川扇状地遺跡群等整理指導

VI 会議・研修会への参加

(1) 会議・委員会等

期 日	内 容	出 席 者	場 所
4月8日	指導主事・専門主事会議	岡村秀雄	長野県庁
4月24日 1月28日	長野県文化振興事業団館所長会議	原田秀一	Web会議
5月15日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	川崎 保	Web会議
6月4日 9月7日 3月22日	長野県文化振興事業団理事会	原田秀一	書面、Web会議
6月11日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	川崎 保	Web会議
7月～3月	長野経済研究所 実務セミナー	柳沢亮ほか4名	長野市
10月29日～30日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	岡村秀雄 市川隆之	愛媛県
11月26日～27日	埋蔵文化財・史跡担当者会議	馬場伸一郎	東京都
12月3日～4日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	山田秀樹 川崎 保	神奈川県
12月17日	長野県文化振興事業団副館長等会議	山田秀樹	Web会議

(2) 研修会・資料調査等

期 日	内 容	参加者・調査者	場 所
6月26日 7月21日	WEB 技能研修	西 香子、馬場伸一郎、 高野和子、酒井清美	長野市
8月26日 2月3日	埋蔵文化財担当職員等講習会	西 香子、馬場伸一郎、 柳澤 亮	Web 参加
9月8日～11日	文化財マネジメント職員養成研修	贄田 明	川崎市
8月20日～21日 9月9日～10日	有機溶剤作業主任者技能講習	村井大海 馬場伸一郎	千曲市 松本市
10月13日～21日	文化財担当者専門研修「保存科学Ⅰ（金属製遺物）」	村井大海	奈良文化財研究所
12月1日～3日 2月17日～19日	地山の掘削及び土止め支保工作業主任者研修	馬場伸一郎・鈴木時夫、 村井大海	松本市 上田市
1月27日	一の釜遺跡に関する資料調査	綿田弘実	茅野市尖石縄文考古館
2月17日～18日	甲種防火管理新規講習	廣田和穂	長野市
2月18日	博物館等関係職員研修会	柳澤亮、馬場伸一郎	千曲市

Ⅶ 学校・関係機関への協力

(1) 学校関係への協力

期 日	学 校 名	対 応 者	内 容
8月4日	中野市高社小学校	柳澤 亮ほか	南大原遺跡発掘体験
9月3日	中野市豊井小学校	柳澤 亮ほか	南大原遺跡見学
9月24日～25日	長野市篠ノ井東中学校	櫻井秀雄ほか	職場体験学習

(2) 講師等の派遣

期 日	依 頼 者	派 遣 者	内 容
6月17日	長野市三輪小学校	西 香子	埋文センターの仕事と縄文・弥生の文化体験 ほか
6月18日 7月16日 8月20日 9月17日 10月15日 11月19日 12月17日 1月21日	篠ノ井老人福祉センター	大竹憲昭 寺内隆夫 馬場伸一郎 西山克己 櫻井秀雄 西 香子 市川隆之 廣田和穂	おとなりさんの考古学入門 旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 篠ノ井歴史散策 古代 中世 近世
8月25日	長野市通明小学校	櫻井秀雄	埋文センターの仕事
9月29日	長野市安茂里小学校	寺内隆夫	大昔の暮らしにふれてみよう
10月4日	全国山城サミット上田・坂城大会実行 委員会	河西克造	長野県における山城の調査・研究動向—考古 学の立場から— (リモート)
10月8日	中野市北部公民館	柳澤 亮	近年の新発見—見直される中野の原始・古代
11月8日	辰野町教育委員会	廣田和穂	沢尻東原遺跡発掘調査報告会
11月8日	中野市立博物館	柳澤 亮	見て歩き—栗林遺跡と南大原遺跡—
11月14日	日本のど真ん中狼煙プロジェクト実行 委員会	河西克造	中世の城—その実像に迫る—主に県内の発掘 成果から—
11月22日	長野県立歴史館	馬場伸一郎	秋季企画展「稲作とクニの誕生」シンポジウ ムパネラー
12月12日	中野市豊田公民館	河西克造	北信濃の室町・戦国時代と城
1月13日	坂城町坂城中学校	櫻井秀雄	縄文人と弥生人を比べてみたら
2月4日	中野市豊田公民館	柳澤 亮	ふるさとの歴史を掘る(2)～弥生時代の豊田
2月11日	柳原地区住民自治協議会	寺内貴美子 ほか	小島・柳原遺跡群塔鏡形合子出土の意義
3月12日	佐久穂町教育委員会	櫻井秀雄	佐久穂町内の中部横断道関連遺跡について

(3) 関係機関等への協力

期 日	依 頼 者	対 応 者	内 容
6月4日～3月31日	株式会社 AB.do	櫻井秀雄ほか	文化財3Dモデリングサービス(仮称)開発
5月21日ほか	千曲市教育委員会	市川隆之ほか	本誓寺遺跡調査指導
7月2日	小諸市教育委員会	河西克造	小諸城跡調査指導
9月9日	須坂市教育委員会	市川隆之ほか	福島東畑遺跡調査指導
9月9日 10月26日 3月12日	小布施町教育委員会	鶴田典昭	小布施町文化財保護審議委員
9月23日 1月15日	須坂市教育委員会	綿田弘実	須坂市文化財保護審議委員
9月29日	山ノ内町教育委員会	柳澤 亮ほか	佐野遺跡整理指導等
10月7日 12月8日 3月12日	川上村教育委員会	寺内隆夫	大深山遺跡保存活用検討委員会
10月31日	新潟県津南町教育委員会	田中一穂	企画展館外研究員
11月13日	朝日村教育委員会	平林 彰	向原遺跡調査指導等
11月19日	愛知県埋蔵文化財センター	綿田弘実	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡調査指導
12月24日	南相木村教育委員会	櫻井秀雄ほか	大師遺跡保存活用の指導
12月24日	伊那市教育委員会	河西克造	史跡高遠城跡整備委員会
12月25日 3月24日	佐久市教育委員会	河西克造	国史跡龍岡城跡保存整備委員会
2月4日	信濃町教育委員会	大竹憲昭	野尻湖ナウマンゾウ博物館協議会

(4) 調査資料の利用

承諾月日	申請者	対応者	内容
5月20日	長野県立歴史館長	柳澤 亮	南大原遺跡鉄斧、鉄鎌の貸与
6月18日	王滝村教育委員会教育長	川崎 保	北村遺跡報告書の転載
6月30日	木簡学会会長	川崎 保	膳棚B遺跡ほか報告書の転載
7月14日	長野県立歴史館長	川崎 保	柳沢遺跡報告書の転載
10月16日	株式会社東北新社事業部長	川崎 保	吉田川西遺跡報告書の転載
10月21日	埼玉県毛呂山町歴史民俗資料館長	川崎 保	洞源遺跡現地説明会資料の転載
11月18日	株式会社ジャパン通信情報センター	村井大海	氏神遺跡現地説明会資料の転載
11月26日	辰野町教育委員会	廣田和穂	沢尻東原遺跡パネルの貸与
12月18日	新潟県津南町教育委員会教育長	川崎 保	ひんご遺跡・千田遺跡報告書の転載
1月12日	サイバーネット・コミュニケーションズ	川崎 保	石川条里遺跡報告書の転載
1月15日	長野市柳原交流センター所長	川崎 保	小島・柳原遺跡群報告書の転載
2月15日	栄村教育委員会教育長	川崎 保	ひんご遺跡ほか報告書等の転載
3月8日	原村教育委員会教育長	河西克造	千田遺跡『信州の遺跡』の転載

Ⅷ 組織・議場の概要

(1) 組織

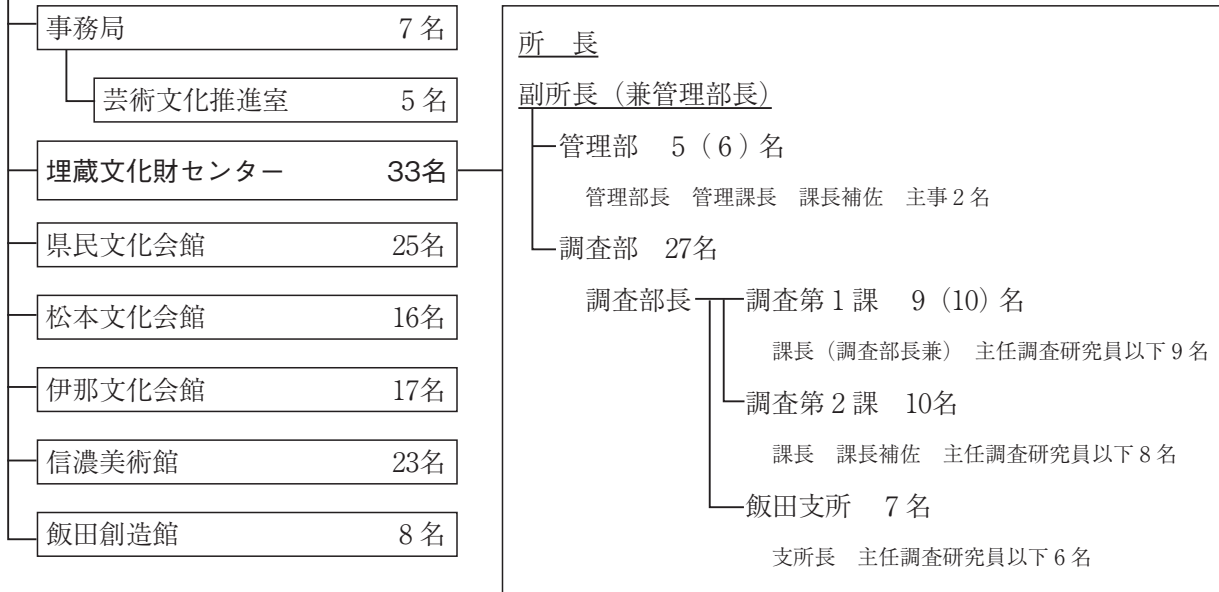
令和2(2020)年7月1日現在

一般財団法人長野県文化振興事業団

【評議員】 4名 水本一雄 堀内征治 笠原甲一 増田隆志

【理事会】 12名

理事長	： 近藤誠一(元文化庁長官)	副理事長： 金澤 茂	常務理事： 阿部精一
理事	： 武井勇二 市澤英利	唐木さち 松山 光	松本 透
	北沢理光 金井貞徳		
監事	： 小川直樹 樋代章平		



(2) 職員(臨時職員を除く)

令和2(2020)年10月1日現在

	所 長	原田秀一
	副 所 長	山田秀樹
管 理 部	管理部長(兼)	山田秀樹
	管理課長	小山田茂
	管理課長補佐	神田弘一
	主 事	日向 育 高野和子
調 査 部	調査部長	川崎 保
	調査課長	[第1課(兼)]川崎 保 [第2課] 櫻井秀雄
	調査課長補佐	[第2課] 市川隆之
	主任調査研究員	[第1課] 若林 卓 鶴田典昭 西 香子 廣田和穂 寺内貴美子 柳澤 亮 [第2課] 河西克造 長谷川桂子 馬場伸一郎 [飯田支所] 贅田 明
	調査研究員	[第1課] 田中一穂 風間真起子 [第2課] 村井大海 鈴木時夫 [飯田支所] 吉川 豊
	調査指導員	[第1課] 寺内隆夫 綿田弘実 [第2課] 大竹憲昭 西山克己 藤原直人 [飯田支所] 平林 彰

(3) 事業

事業名または個所名		委託事業者	事業個所	事業内容	精算 (千円)
発掘・整理作業 受託事業	一般国道18号 (坂城更埴バイパス) 改築	国土交通省 関東地方整備局 長野国道事務所	長野市 石川条里遺跡ほか	整理作業	94,849
	一般国道20号 (下諏訪岡谷バイパス) 改築		下諏訪町 ふじ塚遺跡ほか	発掘作業 整理作業	82,302
	一般国道158号 (松本波田道路) 改築		松本市 真光寺遺跡	発掘作業	5,673
	防災・安全交付金 (道路) (緊急対策事業) 事業 (一) 三水中野線	長野県 北信建設事務所	中野市 南大原遺跡	発掘作業 整理作業	62,411
	社会資本整備総合交付金 (街路) 事業 (都) 高田若槻線	長野県 長野建設事務所	長野市 浅川扇状地遺跡群	整理作業	45,507
	向原地区道路等整備	朝日村	朝日村 氏神遺跡	発掘作業	22,968
	北沢東工場適地開発	辰野町	辰野町 沢尻東原遺跡	整理作業	29,918
	社会資本整備交付金 (広域連携) 事業 座光寺上郷道路	長野県 飯田建設事務所	飯田市 座光寺石原遺跡ほか	発掘作業	29,843
	防災・安全交付金 (道路) 事業 国道256号下久堅バイパス		飯田市 南の組久保田遺跡ほか	発掘作業	14,839
	中央新幹線建設工事	東海旅客鉄道株式会社	喬木村 おくまんのん遺跡ほか	発掘作業 整理作業	41,957
	県道松本駅北小松線拡幅事業等	松本市	松本市 県町遺跡	発掘作業 整理作業 (技術指導)	17,593
	中部電力鉄塔建設移設事業	信濃町	信濃町 宮の腰遺跡	発掘作業 整理作業 (技術指導)	3,342
研 修 等	長野県教育委員会	奈良文化財研究所等			
自主事業	普 及 啓 発	8月 夏休み考古学チャレンジ教室			2,235
		12月 掘るしん in ながの2020			
		随時 遺跡の現地説明会			
		随時 出前授業、発掘体験			
		広報誌「信州の遺跡」15・16号「ジュニアこうこがく」9号			
		ホームページ公開			
				合計	453,437

Ⅸ 調査研究ノート

(1) 「縄文時代中期中葉における土器と竪穴建物跡の二次利用について」

調査指導員 寺内 隆夫

(2) 「縄文時代中期の松本盆地における下呂石製石器」

調査研究員 村井 大海

(3) 「弥生時代後期の較正年代」

調査研究員 馬場 伸一郎

(4) 「小島・柳原遺跡群出土の塔鉢形合子蓋の模様」

主任調査研究員 寺内 貴美子

(1) 縄文時代中期中葉における土器と竪穴建物跡の二次利用について

—辰野町 沢尻東原遺跡の土器整理作業より—

寺内 隆夫

1 はじめに

今年度、沢尻東原遺跡の土器接合作業を開始したところ、土器本来の使い方では付き得ない痕跡が数多くみつかった。それらは、打ち割り痕や破断面の磨きなど、主に器としての機能停止や転用に関わるものである。出土状況と照合すると、こうした土器の一部が竪穴建物跡¹⁾の二次利用(廃棄場利用を除く)に結びつく可能性がでてきた。

本稿では、一次的な用途(鍋や貯蔵具、居住施設)に支障をあれば廃棄物、と捉えがちだった土器や竪穴建物跡の二次利用について取り上げる。特に評価の分かれる床面直上(密着しない)～埋土出土土器に焦点をあてる²⁾。廃棄以外の可能性を探り、縄文人の複雑で密接なモノとの関係、世代間の繋がりを描く一助になればと考えている。

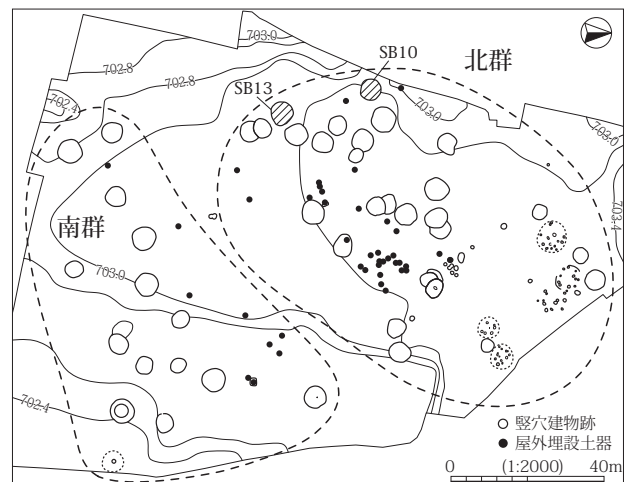
整理作業が始まったばかりであるため、代表例として竪穴建物跡SB10出土の有孔鏝付土器を中心に取り上げる。暫定的に提示した仮説などについてご教示・ご批判をいただき、今後の整理作業に反映させたいと考えている。

2 遺跡概要と紹介する竪穴建物跡の位置

沢尻東原遺跡の概要については、年報36号(廣田2020)と本号に紹介があるため、ここではごく簡単な内容確認にとどめておく。遺跡は、上伊那郡辰野町大字伊那富、天竜川右岸の河岸段丘上に所在する。工場適地の造成に伴い、2019(令和元)年度、縄文時代中期3期(貉沢期)～10期(曾利Ⅱ期)³⁾の居住域のほぼ全域を調査し、竪穴建物跡50軒などが見つかった。竪穴建物跡は大きく南北2群に分かれる。本稿で取り上げるSB10やSB13は、いずれも北群の西端付近に位置している(第1図)。居住域内においては天竜川から最も離れた、上位段丘崖の直下にあたる⁴⁾。

3 方法と手順

今回、二次利用を明らかにするためにとった方法は、整理作業中の観察が主で、



第1図 沢尻東原遺跡の集落景観とSB10・SB13の位置

- (1) 縄文土器本来の使用方法(鍋・貯蔵ほか)では付き得ない二次的な痕跡を抽出する。
- (2) 上記の痕跡と出土状況を照合し、関係性の有無を探る⁵⁾。
- (3) 類例を集成し、出土状況に廃棄以外の行動が想定できるかを検討する。

といったシンプルなものである。加工痕の分類や統計的な処理、土器付着物や土壌の科学分析をはじめ、(3)の比較検討は今後の課題である。

さて、炉の構築材や埋甕⁶⁾については、加工痕(1)と設置・埋納行為(2)が関連付けられる。また、土器片錘などには定型的な加工方法(1)がある。こうした事例については二次利用に対する意見の齟齬も少なく、研究の蓄積もある(小林・大野2002)。

問題は竪穴建物跡の床面直上～埋土中出土の土器群で、加工痕も出土状態も不規則な事例である。判断が難しい要因は、(1)土器の割れや摩擦、被熱痕跡に定型的なパターンが見出せないため、偶然なのか、目的を持って手が加えられたのか、あるいは気まぐれにすぎないのか、判断しづらいこと。(2)仮に意図的に納めるなどの行為があったとしても、定型的な分析方法が確立されていないため確証が得られないこと。(3)有機

物を伴うと予想される場合はその腐朽により、竪穴建物跡の凹地が継続的に利用された場合は攪乱により、土器の位置が動き、投げ捨てた状況との差が明確にできないこと。(4) 竪穴建物跡の埋土の土質によっては人為か自然かの判断が付きにくく、また、設置した土器を土で覆わなかった場合なども、堆積土では人為的との判断ができないこと、などにある。

しかし、疑わしき状況をすべて不問にしているのは、一時期の集落構造を断片的に描けたとしても、世代を超えて継続的に実施された可能性のある行為や、その背景に迫れないままであろう。

まず、当遺跡出土土器を対象に、二次利用痕跡の抽出をおこなう。

①故意と考えられる破損・打痕

顔面や蛇体などの把手類、主要な装飾部位や底部、その他の部位に見られる打撃痕や打ち割った痕跡⁷⁾(口絵⑧)。

②破断面の加工痕

主に、半截や輪切り状態にした土器の破断面にみられる摩耗痕(第2図)。

③土器片の加工痕

小破片の破断面の摩耗痕を②と分離した(第3図)。部分的な例が多く、土器片錘などの製品にはならないもの⁸⁾。

④異常な被熱痕

高温で焼かれたために起る激しい劣化や変色



第2図 口縁部下で切断し、破断面一周を磨いた例(SB13 ②-イ例柱穴跡出土)

(第4図)⁹⁾

⑤その他

加工した破断面へのおこげや炭化油分の付着¹⁰⁾。

これら二次的な痕跡が付いた土器の出土位置には、以下の例がある。

a 竪穴建物の炉に埋設

炉のサイズに合わせて割り、突出した把手を取り除く(①)、平滑に仕上げる(②)などがみられる。炉の修繕などで追加した土器片を加工する例もある(①)。

b 竪穴建物跡の柱や炉の埋土中

柱の抜き取り後に埋納した例に②がある(第2図)。ただし、柱跡への埋納例には二次的な加工痕のない場合もある。

c 竪穴建物跡の床直上や埋土中

①~⑤の例があり、ア) 各種の儀礼行為や作業などに絡む意図的な設置、埋納など。イ) 別の場所で加工、二次利用された後に廃棄。ウ) その他、さまざまな行為が想定される。加工痕①~⑤のついた複数の土器



第3図 特定の装飾部分を割り取り、破断面の一部を磨いた例(SB7 ③-ウ例)



第4図 高温で焼かれ、劣化・変色した例(SB13 ④-ウ例 埋土中から正位で出土)

群は、一連の行為の中で複雑に絡み合っていた可能性もある。個別の土器に対する検証だけでなく、相互の関連性も検討する必要がある。

d 屋外埋甕や土坑内

①・④などがあるが、ほ場整備の際に埋甕上半部が削平されおり、不明点が多い。

e 包含層

現在、接合作業が終わっていないため、詳細は不明。

4 竪穴建物跡 SB10出土の有孔鏢付土器の位置づけと二次的な痕跡

竪穴建物跡が長期間利用されたSB10を取り上げる。居住施設としての使用が終了後、最も早く納められたと推定されるのが有孔鏢付土器（第5図）である。

縄文時代中期の有孔鏢付土器の本来の用途としては、貯蔵具・酒造具・太鼓などの説がある（副島2007）。本例（第5図）を含め、内外面に漆などによる彩色が認められる場合が多く、いずれの説にせよ火にかける目的で製作された器種ではない。また、個体数が少ないのも特徴である。当遺跡では多く見積もっても各時期2・3個体程度だったとみられる。希少・貴重品といえよう。

当遺跡の有孔鏢付土器の出土状況には、

- ① 残存率の高い個体が竪穴建物跡から出土
- ② 大形破片（同一個体とみられる）が数軒の竪穴建物跡などに分かれて出土
- ③ 接合しない小破片が散在して出土
- ④ 屋外埋甕に利用

がみられる。②・③の違いから、最終的な処分の仕方にも差があったことがうかがえる。

SB10出土例は①に相当し、当遺跡で残存率が最も高い。また、他に比べて装飾が複雑・丁寧な優品である。胎土に含まれた混和材は在地土器と異なっており、諏訪方面から持ち込まれた可能性が高い。土器型式は勝坂式（中期5～6期＝藤内期）である。これらの特徴から、本来の用途で利用されていた時点ですでに、集落内で特別な位置づけを与えられていたと考えられる。

本例にみられた二次的痕跡には、

- a 二次焼成による彩色部の焦げと剥落
- b 底部の欠損
- c 口唇部—底部（縦）方向の直線的な破断
- d 方形に割れた部位と、下半部の欠落
- e d部位表面だけの風化（劣化）

が認められた。いずれも本来の使用目的ではつかない痕跡である。

5 有孔鏢付土器の出土状況

偶然ではなく、意図的に手が加えられた可能性を探るため出土状況を確認していく（第6～8図）。

平面的な出土位置は炉西側で、炉石に一部重なるが、炉石との間には若干の堆積土が認められる。居住終了から一定期間が経ったのか、あるいは湾曲する土器下面を安定させるために土を入れた可能性もあろう。炉には新しい時期の土器片が混在していることから、ある程度は開口していたとみられる。一方、上層にみられる土器（第8図8ほか）は中期8～9期であり、本例とは時期差がある。本例とこれらの土器群が一括廃棄、あるいは同時埋納されたとは考えにくい。

出土状態は横位である。ただし、

- ① 上・下の土器片に大きさの違いや、位置にズレがある。
- ② 土器の破断面が、割れやすい輪積（横）方向でなく、口唇—底部（縦）方向で、しかも直線的である。
- ③ 底部が当竪穴建物内で見つからない。

このように、単に横倒しに捨て、その後、土圧で潰れたにしては不審な点が複数みられる。

6 有孔鏢付土器の二次的な痕跡と出土状況の照合

次に、二次的な痕跡を出土状況と照合し、いつ、どこでこれらの痕跡がつき、最終的にこの場所に持ち込まれたかについて、現段階での案を提示しておく。

(1) 二次焼成（5-a）

片付けられていれば別だが、炉の再利用や屋内で火を焚いた痕跡はない。10号竪穴建物跡に持ち込まれる前に火にかけられた可能性が高い。

(2) 底部の欠損 (5-b)

底部破断面は外側が若干剥落しており、内側から打撃を加えたとみられる。底部片は堅穴建物内で発見されていないため、堅穴内で割った後持ち出したか、本体を持ち込む前に割ったとみられる。破断面に焼痕やおこげの付着はなく、火から降ろした後に割っている。火にかけた際の中身(内面には底部の欠損部の際までおこげが付着)は、底部を抜く前に取り出されたと考えられる。

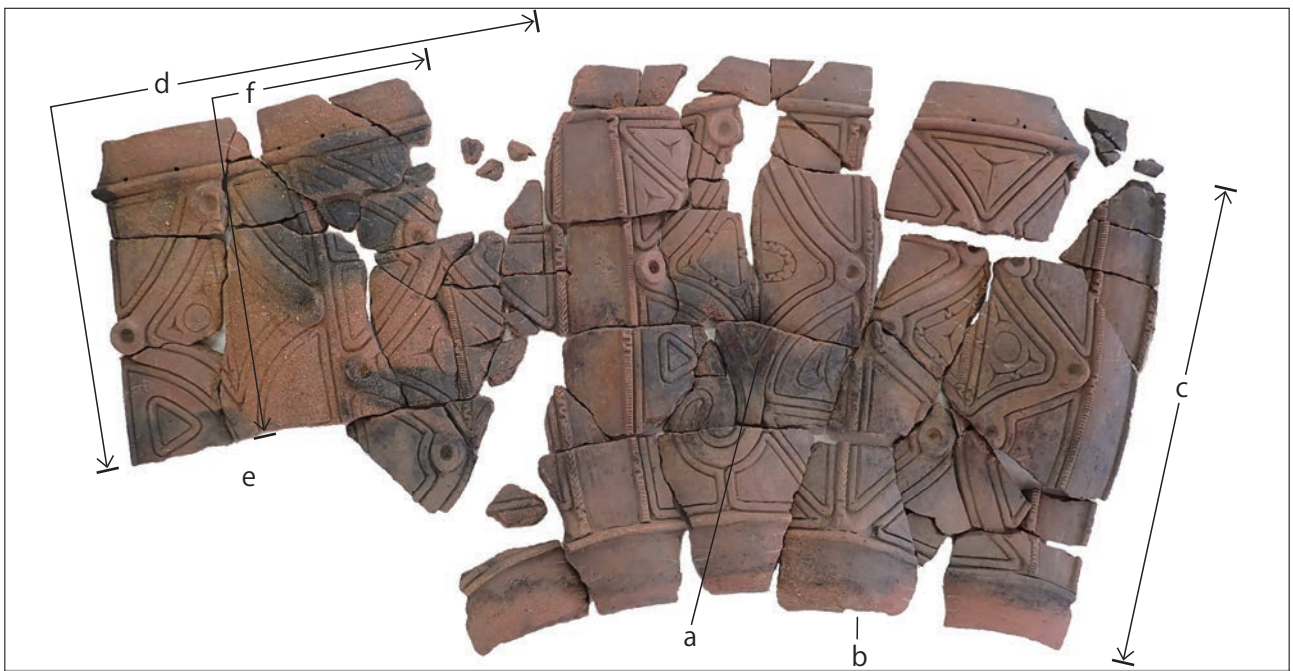
(3) 縦方向の直線的な割れ (5-c)

第6・7図から、円筒形の土器が土圧で潰れた

状態には見えない。何かを乗せて納めるため、床面直上に丁寧に敷かれたと思われる。納める対象物に合わせて形と大きさ(縦約49×幅38cm)を整えた可能性がある。

(4) 方形の小破片と下部欠落 (5-d)

敷いた大破片の内側に収まるように小破片(縦約30×幅34cm)が出土している(第7図)。敷いた土器の上に何かを納め、それに被せるため大きさを整えた可能性がある。割り取った下半部は一部しか見つかっていない。また、納めたモノには有機物を想定した。腐朽・消滅したため上の小破



第5図 有孔鏢付土器接合展開写真



第6図 有孔鏢付土器および周辺の土器出土状況



第7図 有孔鏢付土器出土状況

片が沈み、下の土器と密着する形になったとみられる。上層の土器（第6図8）の倒れ込みも、沈み込みがあった影響によると考えられる。

（5）小破片表面の風化（5-e）

上に被せた土器片の表面（上面）だけが激しく風化したのは、埋納行為の最後に全体には軽く土をかぶせたものの、この土器片部分だけ露出させていたためと考えられる。

7 有孔鏝付土器に関わる行為の復元案

では、有孔鏝付土器の二次利用に関わる行為について、暫定的な復元案を提示しておく。捨てるだけであれば必要のない手が複数加わっていることから、何らかの儀礼行為に用いられ、埋納（主役は中身か）されたと推定した。

前段階 特例的な行為が実施された理由

本例は、集落内でパターン化できるほど事例がある行為ではない。特例となった要因を残されたモノから推察する。

まず、利用されたのが有孔鏝付土器である。これは集落内において、①特殊な用途、②希少な器種、③装飾が優れた逸品、④搬入品の可能性が高いなど、特別な品であった。保有・使用主体が個人か限定者だったと仮定すると、この人物は特別な立場にあったと考えられる。現段階では推測の域をでないが、特別な品が役割を終え、この竪穴建物跡に埋納されたということは、この土器・この竪穴建物の所有・利用者自身か関係者に何らかの異変生じたのかもしれない¹¹⁾。

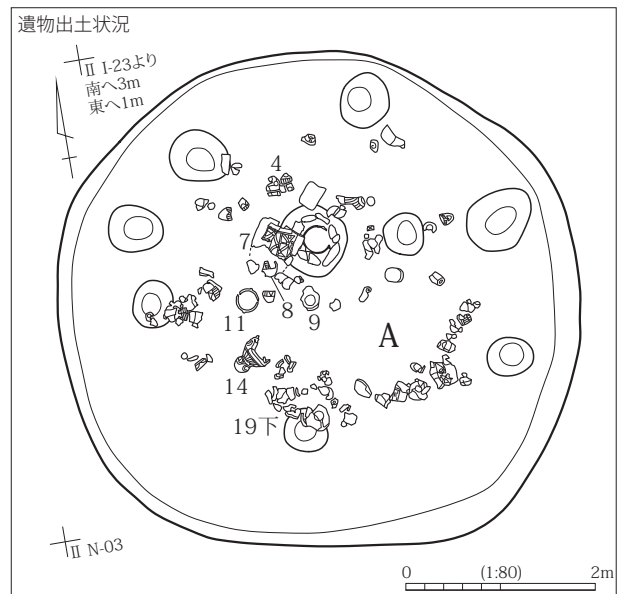
また、この土器は炉体土器（中期7期：井戸尻I期）より古い。伝世した可能性もあるが、保有者が長寿であった可能性、あるいは別の場所に一度埋納・仮置きされた後、再埋納されたことなどが想定される。いずれにせよ、この竪穴建物への埋納行為の主催者は、この土器の主な保有・使用者本人ではなく、次世代の人物であろう。

二次利用の行程は、以下のように推定する。

第1段階1 竪穴建物外での火を伴う行為

二次的痕跡6-(1)より

儀礼に際し特別に焼く・煮る道具として利用したとみられる。内面にはおこげが付着しており、



第8図 竪穴建物跡 SB10遺物出土状況図

何かが入っていたことは確かである。

竪穴建物外（中央広場など）で実施されたとすれば、集落構成員周知の元であり、場合によっては儀礼に参加した可能性もあろう。

第1段階2 底部を抜き、器の役割を断つ行為 二次的痕跡6-(2)より

次に、器の役割を断つため底を抜いている。第1段階1で火にかけられた中身は取り出され、次の儀礼行為への準備が行われたと推定される。

第2段階 竪穴建物跡内に埋納する行為 二次的痕跡6-(3)～(5)より

第1段階から一連の行為とみた場合、竪穴建物跡内で新たな段階に入る。炉の西（左）脇で何かの埋納行為に使ったと考えている。この場で埋納物に合わせて有孔鏝付土器を割って敷き、有機物と思われるモノを納め、残った小破片を蓋にして、周囲には土をかぶせたと推定した。土器敷きが炉石と重なるため、埋納時には炉に火が入っていないと考えられる。また、上屋の有無については判断材料が不足している。

第3段階 継承された廃屋での行為

二次的痕跡6-(5)より

蓋とした土器片上面は露出・風化しており、埋納場所は後々も特定でき、意識されていたとみられる。その後の二次利用に際して、本例直上に土

器が重なる例が中期9期（曾利Ⅰ期）までなかったことから裏付けられよう。

現段階における儀礼行為の復元は、仮定の上に仮定を重ねた推論に過ぎない。今後、類例を収集し、良好な資料と比較検討することで、仮定部分の一つずつ潰していく必要がある。また、第2、第3の仮説を想定した上で、最適な解釈を求めていきたいと考えている。

8 竪穴建物跡 SB10の継続利用

さて、有孔鏢付土器を使った埋納行為後の本竪穴建物跡の継続利用について触れておこう。

第1段階 顔面把手付土器

中期6期（藤内Ⅱ期）。有孔鏢付土器と近い時期の顔面把手付土器（口絵⑧）が、南壁側の床面直上（第8図19）で出土している。顔面が敲打によって壊されている。有孔鏢付土器と一連の行為に利用されたかは定かではない。ただし、この土器をきっかけに、周辺及び上層へ中期7・8期（井戸尻期）の土器が持ち込まれるようになる。これに絡んで注目されるのは、これらの土器群が囲うように遺物の空白域（第8図A）が存在することである。南壁側からの土器廃棄の結果にすぎないのか、Aに儀礼対象となる何らかの存在があったのか、今後、見極めていきたい。

第2段階 半截土器の正位設置

中期7～8期（井戸尻期）。炉の南西、有孔鏢付土器南隣の床面直上に、頸部で切断され、破断面が摩耗した土器（第9図）が正位で出土している（第6・8図11）。この周囲からは復元可能な土器が出土しない空間がある。その外側の床面直

上で横倒しの土器が出土しているが、関連性は判然としていない。

第3段階 輪切り状土器の正位設置

中期8～9期（井戸尻Ⅲ～曾利Ⅰ期）。炉の南隣に口縁部と底部を割り取った土器が正位（第6・8図9）で出土している。第2段階同様、正位配置の土器周囲は復元個体のない空間となっている。また、竪穴建物内への土砂堆積が進むが、炉上からの土器出土はない。正位出土の9・11、他の土器も炉を囲むように出土しており、炉への意識が続いていたと考えられる。

この土器設置以後、復元可能な土器の多くは炉の南側から出土しなくなり、炉周辺から竪穴建物跡の北半部に变化する。

第4段階 半截土器など

中期9期（曾利Ⅰ期）。炉よりも西側の地区上層部から口縁部を切断された土器が出土している（第11図）。出土状況は不明であるが、二次加工行為からみると設置されていた可能性もある。

このように、SB10は長期にわたって利用され続けた。その利用方法は、二次加工を施した土器が正位で出土するなど、単なる廃棄の積み重ねではないことを示している。

9 竪穴建物跡 SB13との対比

当集落内で、同様な出土状況を示す例はSB13だけである。SB10同様、集落の北群の西端に位置する。利用期間もSB10とほぼ同じで、中期6期（藤内Ⅱ期）か直後に居住施設としては廃絶し、その跡地利用が中期9期（曾利Ⅰ期）まで続く。



第9図 第2段階 正位出土土器
第6・8図11



第10図 第3段階 正位出土土器
第6・8図9



第11図 第4段階
上層出土土器

ただし、土器の使い方には大きな差が認められる。SB10では有孔鏝付土器（第8図7）、蛇体把手付土器（14）や顔面把手付土器（19）など、祭祀・儀礼に関連性の高い土器が中心であった。これに対し、SB13で床面直上からまとまって出土した3個体をみる（P26-図49）と、逆位の勝坂式土器を中心に、焼町式土器と櫛形文土器を配している。いずれも大形の深鉢で、さらに異系統の優品を選択したとみられ、このことから、関係者の性格がSB10とは異なっていたとみられる。この3個体には、出土状態と関連した特異な加工痕が認められ、廃屋墓の可能性が考えられる¹²⁾。土器の復元作業が進んだ時点で、あらためて速報したい。

10 廃屋墓、儀礼の場への二次利用

竪穴建物跡の凹地に残された土器、これらにみられる意図的な割れや摩耗痕などは「モノ送り儀礼」の痕跡かもしれない。ただし、中には捨てた（送った）のではなく、意図的に設置・埋納された事例（二次利用）が混じっている可能性もある。これらを特定するには、個別に土器の二次痕跡と出土状況を照合することが肝要である。と同時に類例の探索が重要となる。最後に、簡単に類例を紹介しておく。

竪穴建物跡 SB10や SB13では、床面直上や埋土中に、逆位・正位の土器（半截や底部が抜かれた事例が多い）があり、これらに接して敷かれたような土器、周囲に横転した複数の土器が残されていた。縄文時代中期中葉までさかのぼる類例には、山梨県一の沢西遺跡、塩尻市峯畑遺跡、豊丘村三島遺跡などがある。勝坂式土器文化圏内で共通した行動様式が存在が見えてきそうである。今後、さらに類例の収集に努めたい。

また、目を少し遠くへ向けると、東京湾沿岸部の遺跡で、土器を被せた廃屋墓の事例などが増加している（中村2018、縄文時代文化研究会2019）。当遺跡では、時期的に若干古い事例も含まれるが、両地域に類似した習俗が広がっていたとすれば、SB13の事例も埋葬に伴う土器の二次利用の可能性が高くなるであろう。

一方、SB10でみられた有孔鏝付土器のあり方は、正位・逆位設置の土器とも異なる。また、有孔鏝付土器が関わる特殊な出土事例（副島2007）の中でも、細部まで類似した事例はない。いつの時代においても、儀礼や葬送には集団ごとの大まかな標準型があるとしても、個別の事情により定型化できない部分も多い。そのため、集成にあたって、一回性の、当事者個別の歴史をも考慮して、丹念に追うしかないと考えている。

11 おわりに

沢尻東原遺跡の土器接合を始めると、二次的な加工痕が次々とみつき、出土状況にフィードバックして検討してみることにした。その中で、これまで廃棄の一言で片づけられがちだった竪穴建物跡出土土器のあり方を見直す必要性を感じた。多くの土器は廃棄されたものかもしれないが、その方法も多様（中山2012）であったとの感触を得ている（寺内2020）。個々の土器に残された痕跡を丹念に拾うとともに、接合関係などと照らし合わせていき、縄文人の行動様式やその背景の解明に一步でも接近できればと考えている。

註

- 1) 現時点では、二次利用の際に上屋が存在していたか否か確定できていない。建物の二次利用か、凹地利用かが明確でないため、本稿では竪穴建物跡の二次利用と表記していく。
- 2) 竪穴建物跡の出土品は、「棄（捨）てる」という用語で処理される傾向が強い。その要因は、本文でも記すが、出土状況から廃棄（モノ送りの行為が加わったとしても）以外の行為を証明しづらい（廃棄とも断定できない）ためである。これに加え、現代人の感性も関わっている。現代日本では、鍋や茶わんの一部が破損、あるいは古くなっただけでもゴミにされることが多い。供養や祀り上げの感情や行動が伴ったとしても、処分・交換が前提の生活スタイルが身についていると言えよう。凹地に埋まった大量の破損品に出会えば冷徹に「捨てたモノ」と言いたくなるのも不思議ではない。

一括出土例などとされてきた事例中に廃棄ではない（山本2018）、縄文人の世代を超えた行為を復元する手があると考えている。人骨が伴う例では、竪穴建物跡とその凹地が長期にわたって利用されていたことが判明してきている（下総考古学研究会2020など）。本県では人骨などの残存が望めないため、土器などの二次的な

痕跡と出土状況を照合することから始めるしかないと思われる。

- 3) 土器の時期比定はこれからであり、暫定的に日本考古学協会長野大会の時期区分（宮崎・綿田2013）にあわせてある。また、本稿では型式論が主眼ではないので「縄紋」を用いず、編集方針に従って「縄文」と表記した。
- 4) 対外的に開放された天竜川の側（東）に対して、上位段丘崖下の西端は、集落成立当初に屋外埋甕が設置されるなど、当集落構成員の精神的な要の場所だった可能性がある（高橋2007）。
- 5) 筆者は発掘調査に参加していないため、出土状況については諸記録および調査担当者の証言による。
- 6) 埋甕の大形品の中には、専用に製作された例もあったかもしれない。しかし、一般の深鉢形土器に比べ、形態・装飾・製作に差がない場合、判断が難しい。
- 7) 千曲市屋代遺跡群では、把手の意図的な切断痕が観察されている（水沢2000）。
- 8) 茅野市長峯遺跡では、三本指の意匠部分を切り取り、破断面を磨いた例（寺内2005）があり、当遺跡でも類似した事例（第3図）がある。
- 9) 千曲市屋代遺跡群中期後葉（水沢2000）や茅野市長峯遺跡・聖石遺跡（寺内2005）では、灰色に変色し、変形・劣化した土器が認められた。ただし、筆者らが全点を観察したこれらの遺跡でも量は少量にとどまったのに対し、当遺跡ではまとまった数量が出土している。
- 10) 煮炊き（本来の用途）時に、すでにひび割れがあつて油分がしみ込んだ可能性も否定できないが、割ったのちに被熱した例もあると予想される。
- 11) 証明は無理だが、この土器と竪穴建物跡に関係の深い人物（所有者・利用者）と仮定した。
- 12) 集落の外縁部の廃屋墓、さらには屋外埋甕と竪穴建物群の関係などについて、高橋龍三郎先生から多くのご教示を得た（信濃毎日新聞2020年10月6日朝刊）。

参考文献

- 榎原功一 2010「廃屋墓・土坑墓にみる縄文人の空間認識『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』14
- 小林謙一・大野尚子 2002「土器と遺構のライフサイクル—縄紋中期集落遺跡を読み解くために—」『民族考古』6
- 縄文時代文化研究会 2019『第2回研究集会基礎資料集 列島における縄文時代墓制の諸様相』
- 下総考古学研究会 2020「千葉県松戸市中峠貝塚遺跡第8次調査の成果」『下総考古学』25
- 副島蔵人 2007「有孔鏝付土器の出土状態とその用途—中部高地を中心に—」『史叢』77
- 高橋龍三郎 2007「関東地方中期の廃屋墓」『縄文時代の考古学9 死と弔い—葬制—』同成社
- 寺内隆夫 2005「第4章第3節2土器 オ 土器転用に伴う加工」『聖石遺跡・長峯遺跡・別田沢遺跡 本文編』長

野県埋蔵文化財センターほか

- 寺内隆夫 2020「縄文人の行動や思考を探る～土器の観察と接合作業」『信州の遺跡』第16号、長野県埋蔵文化財センター
- 中村耕作 2018「縄文時代廃屋墓における追葬・改葬行為」『考古学研究』65-1
- 中村耕作 2019「家屋墓・廃屋墓」『縄文時代葬墓制研究の現段階』縄文時代研究会
- 中山真治 2012「縄文時代中期の集落と廃棄について—南関東の中期前半～後半を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』172
- 廣田和穂 2020「(6) 沢尻東原遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』36
- 水沢教子 2000「第10章第1節2中期後葉の土器(4)土器の残った痕跡—土器の使用と廃棄方法—」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—縄文時代編—』長野県埋蔵文化財センターほか
- 宮崎朝雄・綿田弘実 2013「長野県における縄文時代中期土器の編年と動態」『日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集文化の十字路信州』同実行委員会
- 山本暉久 2018『住居の廃絶と儀礼行為』六一書房

(2) 縄文時代中期の松本盆地における下呂石製石器

村井 大海

1 はじめに

氏神遺跡は、東筑摩郡朝日村西洗馬に所在する。鎖川支流の内山沢左岸の河岸段丘上に立地し、周辺には熊久保遺跡や長野県埋蔵文化財センター（以下当センターと言う）が2016・17年度に発掘調査を実施した山鳥場遺跡・三ヶ組遺跡が分布する。2020年度の当センターの発掘調査において縄文時代と平安時代の遺構と遺物が出土した。

縄文時代の遺物は、中期初頭の五領ヶ台式と中葉の新道式、藤内式に含まれる土器のほか、それらの土器に伴い石器が出土している。上記の遺物は2021年度の本格整理において資料化および分析を実施し、報告書を刊行予定である。これらの土器、石器の中に遠隔地との関りを見いだせるものが認められる。関西の特殊凸帯文系土器と岐阜県下呂市湯ヶ峰を原産地とする下呂石を原材料とする石器である。そこで、本稿では下呂石製石器に焦点をあて、松本盆地の縄文時代中期における遠隔地石材の搬入形態および獲得方法を把握し、その利用背景を予察したい。

2 氏神遺跡出土の石器群

氏神遺跡では総計1450点の石器が出土している。これは基礎整理作業が終了した時点での認識であり、今後の本格整理作業における集計で、点数や器種分類等に修正の可能性があるため、詳細な点数は差し控えるが、そのうち7割以上は剥片や碎片、石核等の石器製作に伴う残滓である。石鏃や石匙、石錐等の小形の剥片石器や、打製石斧等の大形の剥片石器は、それぞれ全体の1割に満たず、石皿や台石、敲石、凹石等の礫石器が1割強ほど認められる。

石材を見ると、出土点数では黒曜石が突出しており、全体の7割近くを占める。黒曜石は科学分析を実施しており、分析した黒曜石の95%は星ヶ台群、5パーセントが鷹山・小深沢群のものであった。この黒曜石の産地傾向は近隣の熊久保遺跡

と一致する。砂岩や泥岩、粘板岩は合わせて全体の2割ほどである。これらの堆積岩は遺跡の近くを流れる内山沢や鎖川で一般的に採取できる岩石である（杉木2019）。残りの1割は、本稿で問題となる下呂石のほか、チャート、安山岩、流紋岩等の岩石が利用されている。チャートは砂岩等の堆積岩同様に遺跡近隣で採取することができるが、下呂石、安山岩、流紋岩は採取することができない。

ただし、重量比で見ると、石材構成の印象は大きく異なる。遺跡出土の石器の総重量は85kgほどになるが、黒曜石はそのうち2kgほどで全体の約2%を占めるに過ぎない。ほとんどは砂岩や泥岩、粘板岩等の堆積岩で、合わせておおよそ70kg、全体の80%ほどを占めている。

黒曜石は出土石器の大半を占める剥片等の石器製作の残滓や石鏃等の小形の剥片石器に利用されている。小型の剥片石器には切る、削る、穿孔等の機能が考えられるが、これらの機能を満たすためには、割れ口が鋭い、細粒緻密な岩石が適している。これらの特徴をもつ岩石はチャートを除いて遺跡近くでは採取できないため、直線距離で25kmほどの距離がある星ヶ台を原産地とする黒曜石を利用したのだろう。ただし、小形の剥片石器の製作に大形の原石は必要ない。黒曜石の多くは剥片や石核等の残滓のため、遺跡には原石や石核状態で搬入したと考えられるが、この時の運搬コストの低減をはかるため小形の黒曜石原石または石核が積極的に利用されることになり、その結果、出土点数は多いが、総重量は軽くなる。長距離を運搬するためのコストの低減が計られている点、原石または石核の状態では遺跡に搬入している点、小形の剥片石器の大多数が黒曜石を原材料としている点等を考え合わせると、黒曜石の獲得方法は直接採取の蓋然性が高い。

一方、砂岩や泥岩、粘板岩は打製石斧等の大形

剥片石器や砥石、敲石等の礫石器に利用される。これらの石器は土掘りや物を叩く、研ぐ等の機能を有すると考えられる。これらの機能を満たすためには細粒緻密である必要はないが、衝撃にある程度耐性がある、大形の岩石が適している。このような石質の岩石は遺跡近隣に分布しており、大形の岩石を遺跡に搬入する際の運搬コストを低減するため、積極的に利用したと考えられる。したがって、遺跡近隣で採取できる大形の砂岩や泥岩、粘板岩が利用されることになり、出土点数は少ないが、総重量は重くなる。

下呂石はどうだろうか。下呂石製の石器は縄文時代中期初頭、五領ヶ台式土器を伴う竪穴建物跡の埋土から剥片（第1図-1）と二次加工ある剥片（第1図-2）、上記の竪穴建物跡とほぼ同時期と思われる土坑から剥片（第1図-3）が出土している。1は長さ3.3cm、幅2.2cm、重量5.36gである。背面右側面の自然面を打面とし、下側の剥離面から上側の剥離面に連続剥離をした後、打面を90度転移して打撃した結果得られた剥片である。背面左側面には折面が認められるが、これは最終打撃の際に生じたものであり、意識的な折断ではない。2は長さ4.4cm、幅6.0cm、重量34.30gである。背面左下の剥離の後、打面を90度転移して背面左下を剥離、その後自然面を打面として、背面右側から連続剥離を行ない、打点を後退して打撃した結果得られた剥片の下端に連続的な二次加工が施される。3は長さ5.3cm、幅3.5cm、重量21.75gである。背面右側からの打撃により下部の剥離面から剥離した後、打面を90度転移し、単設打面からの打撃により得られた剥片である。背面右側には折面が認められるが、1と同様に最終打撃の際に生じたものである。背面左側には自然面が認められる。2と3の自然面の特徴は角礫または亜角礫と推定され、触感はややなめらかであるが、爪状の衝突痕は認められない。この自然面の特徴は、齊藤基生氏や中村由克氏によれば、原産地湯ヶ峰からほど近い、下呂市域の河原で採取できる原石に認められるとのことであり（齊藤2005、中村2007）、原石の採取場所は原産地に近い河原で

あったと推定する。

3 縄文時代中期松本盆地における下呂石製石器

(1) 朝日村

氏神遺跡の他、山鳥場遺跡と熊久保遺跡第10次発掘調査において下呂石製の石器が出土している。

山鳥場遺跡では3793点の石器が出土している。内、3035点は石核や剥片等の石器製作に伴う残滓であり、これらの主体は黒曜石、チャート、砂岩である。石鏃や石錐等の小形剥片石器には黒曜石が、打製石斧等の大形剥片石器には砂岩や粘板岩が、敲石や凹石、磨石等の礫石器には砂岩が主体的に利用される。下呂石は後葉の唐草文系土器の時期に属するSB16より石匙が1点（第1図-4）、検出面のため時期は不明だが石鏃（第1図-5）が1点出土している。

熊久保遺跡第10次調査では1810点の石器が出土している。大半は黒曜石や砂岩、頁岩、チャートの石核および剥片である。製品は617点出土しており、石鏃や石匙、石錐等の小形剥片石器には黒曜石が主体的に利用され、チャートもごくわずかに利用される。打製石斧等の大形剥片石器や敲石、台石等の礫石器には砂岩や頁岩が主体的に利用されている。下呂石は中葉の井戸尻式から曾利式期の第6号住居址から石鏃が1点出土している（第1図-6）。

(2) 山形村

殿村遺跡において下呂石製石器が確認できた。当遺跡では596点の石器が出土しており、石鏃や石錐には黒曜石およびチャートが、石匙にはチャートが、打製石斧等の大形剥片石器や敲石、凹石、磨石等の礫石器には砂岩や粘板岩が主体的に利用されている。下呂石は後葉の曾利式期の10号住居址から出土した石匙No.1、同時期の27号住居址から出土した石匙No.5の2点が認められる¹⁾（第1図-7、8）。

(3) 塩尻市

縄文中期の大規模集落として著名な平出遺跡をはじめ、峯畑遺跡、剣ノ宮遺跡D地区で下呂石製石器が確認できた。

平出遺跡では環境整備事業に伴い2002年～2011

年に行われた発掘調査において、住居内から1224点の石器が出土している。石鏃や石匙等の小形剥片石器には黒曜石やチャート、打製石斧等の大形剥片石器や敲石等の礫石器には砂岩や凝灰岩、ホルンフェルスが主体的に利用されている。下呂石は初頭の九兵衛根式期のJ-75住居跡から石匙が1点(第1図-9)²⁾、中葉の新道式期のJ-29住居跡から石匙、同時期のJ-51住居跡から石鏃がそれぞれ1点出土している(第1図-10、11)³⁾。

峯畑遺跡では397点の石器が出土している。石鏃や石錐、ピエス・エスキューには黒曜石、石匙にはチャート、打製石斧等の大形剥片石器には頁岩、敲石等の礫石器には砂岩や凝灰岩が主体的に利用されている。これらの石器の内、石鏃1点が下呂石であることが確認できた⁴⁾(第1図-12)。中葉の井戸尻式期の2住からの出土である。

剣ノ宮遺跡D地区から出土した石器は、製品708点が報告されている。石核や剥片等を含めるとさらに数は増える。石鏃等の小形剥片石器には黒曜石やチャート、打製石斧等の大形剥片石器には砂岩等が主体的に利用されている。石核や剥片類の大半は黒曜石であった。下呂石は二次加工ある剥片に1点確認することができた(第1図-13)。二次加工は背腹両面に施され、腹面上部には微細剥離が認められる。石鏃の失敗品の可能性がある。グリッド6Hの検出面からの出土であり、詳細な時期は不明だが、周辺遺構の帰属時期に鑑みれば、縄文時代中期の所産であろう。

(4) 松本市

松本市では一ツ家遺跡、小池遺跡、川西開田遺跡において下呂石製石器が出土している。

一ツ家遺跡では1947点の石器が出土しており、石鏃や石錐には黒曜石が、石匙にはチャートが、打製石器等の大形剥片石器にはホルンフェルスや砂岩、頁岩が、敲石、凹石、磨石には石英閃緑岩や砂岩が主体的に利用されている。下呂石製石器は初頭の梨久保式期の82住からスクレイパーが1点出土している(第1図-14)。

小池遺跡は4498点の石器が出土している。出土石器の器種および石材の利用形態は一ツ家遺跡と

ほぼ同様である。下呂石製石器は中葉の井戸尻式期の162住から石鏃が1点(第1図-15)、同時期の164住から石鏃およびスクレイパーがそれぞれ1点出土している(第1図-16、17)。

川西開田遺跡からは7080点の石器が出土している。石核および剥片等の石器製作に伴う残滓の出土が最も多く、これらの石材は黒曜石やチャート、砂岩、頁岩を主とする。製品は石鏃や石錐、石匙等の小形剥片石器には黒曜石およびチャートが、打製石斧等の大形剥片石器には頁岩が、凹石には安山岩が主体的に利用されている。下呂石製石器は初頭から中葉、九兵衛尾根式期、猪沢式期、新道式期の住居址、溝、土坑から計8点出土しており、内訳は石匙1点(第1図-18)、石錐1点(第1図-19)、ピエス・エスキュー1点(第1図-20)、二次加工ある剥片3点、微細剥離痕ある剥片1点、石核1点である。

エリ穴遺跡は、中期から晩期にわたり長期間継続する大規模な集落遺跡である。87462点の石器が出土しており、77507点は石核や剥片および碎片、原石等の石器製作に伴う残滓である。内、黒曜石の石核が413点、剥片および碎片は71142点を占めており、黒曜石原石および石核を大量搬入し、石器製作が行われたことは明確である。石鏃や石錐には黒曜石とチャートが、石匙にはチャートとホルンフェルスが、打製石斧にはホルンフェルスや頁岩が、敲石や凹石、磨石には砂岩や安山岩が主体的に利用されている。下呂石製石器は211点出土している。器種は石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、二次加工ある剥片、微細剥離ある剥片、剥片および碎片である。石核は認められない。ただし、中期の所産と判断できる資料は中葉から後葉、新道、藤内式期から唐草文の時期と見られる16住から石鏃が1点見られるのみである(第1図-21)。

(5) 安曇野市

安曇野市では市域を代表する縄文時代中期の遺跡である他谷遺跡の他、東小倉遺跡の資料を実見したが、下呂石製の石器を確認することはできなかった。

4 下呂石製石器の搬入形態と利用背景

氏神遺跡では、下呂石製の石器は二次加工ある剥片および剥片の3点であり、剥片を剥離するための石核や二次加工時に生じる碎片は見いだせなかった。石器に残された自然面の状態も勘案すれば、原産地にほど近い河原で採取した原石を、採取地、または他の遺跡に運搬し、そこで二次加工ある剥片および剥片の状態に加工したものが搬入されたと考えられる。

他の遺跡においても状況は氏神遺跡とほぼ同様である。ほぼすべての遺跡で下呂石製石器の出土は一桁におさまり、明らかに客体的な存在である。エリ穴遺跡では、211点出土しているが、ほとんどは後晩期の遺構および包含層からの出土である。川西開田遺跡では石核が1点出土しているが、石匙や石錐、二次加工ある剥片を製作する際に生じる剥片および碎片は確認できない。また、当遺跡の整理作業では接合作業が精力的に実施されているが、下呂石の接合例は見いだされず、下呂石の加工が行われた可能性は非常に低いと考えざる負えない。したがって、松本盆地において縄文時代中期の遺跡から出土する下呂石製石器は、他地域で加工を施された製品や二次加工ある剥片、石核、石核から剥離させた剥片の状態でもたらされたと判断すべきである。これらの下呂石製石器は、原産地近隣までの直線距離が60km以上あること、出土点数が非常に少ないこと、当遺跡への搬入形態等を総合的に考えると、交換による他の集団を媒介とした間接的な獲得の可能性が高いと考える。

下呂石製石器の交換元であるが、木曾地域、特に王滝川流域に展開する集落にその可能性が高いと見ている。長野県において木曾地域は、下呂石がまとまって出土する地域であるが、特に王滝川流域に立地する王滝村大岩橋遺跡や崩越遺跡は下呂石製石器の出土数が、黒曜石やチャート製の石器に匹敵し、剥片も非常に多い。原石、石核、剥片の状態でもたらした下呂石を加工したのだろう。王滝川の上流部には水無沢が流れ、その源流近くには鞍掛峠が位置し、そこを越えれば角礫や亜角

礫の下呂石が採取できる乗政川に合流する竹原川の源流にたどり着く。これらの河川、峠伝いに王滝川流域の遺跡に搬入し加工された下呂石製石器が、松本盆地に展開する縄文時代中期の集落にもたらされたものと推察する。

共伴する土器を見ると下呂石製石器の松本盆地への交換による搬入は縄文時代中期において継続して認められる。下呂石製石器は、石鏃、石匙、石錐、スクレイパー等の小形剥片石器のほか、二次加工ある剥片、微細剥離ある剥片、剥片、石核である。下呂石を原材料とする石器としては一般的なものであり、特定の器種に偏る傾向は見いだせない。また、松本盆地では、黒曜石やチャート等、これらの石器の原材料として優良なものが近隣に分布しており、下呂石を利用する必然性は認められず、事実、出土数も少ない。石器組成から下呂石製石器を除外したとしても、数値上の影響はほぼない。さらに、石核や剥片等の素材として利用するため交換したように見えるものも、実際には当地で加工の痕跡は見いだせない。石鏃の失敗品すら交換している。以上の状況に鑑みれば、下呂石製石器の交換および利用は、機能的および経済的な理由に求めることはできない。公的な統治機構を持たない社会において、交換の役割は機能・経済的理由以上に、集団や個人間の社会関係を開始・継続することにあるとされる（サーリンズ 1984）。下呂石製石器は松本盆地と木曾地域、さらには岐阜県湯ヶ峰に展開した縄文人集団の社会関係を構築、維持するために交換されたと推定する。下呂石は産出地が限定され、なおかつ肉眼でも十分に識別できるほど石質に特徴がある。おそらく縄文人もそのことは認識していたはずであり、贈与側からすればどの集団に受贈したか、受贈側からすれば、どの集団から贈与を受けたかが明白であったのだろう。これは社会的紐帯を目的とした交換物として、非常に優秀な特性であったと思われる。

社会的に重要な意味を持つ下呂石製石器であるが、松本盆地の北部、安曇野市域で確認できなかった。安曇野市他谷遺跡は石材の構成が、松本盆

地の他地域と異なり、黒曜石の利用が少なく、良質な珪質頁岩の剥片が多く確認できた。石材から推察すれば、直接採取を想定した場合資源獲得領域が、交換等を想定した場合他集団との交流圏が異なっていた可能性があり、このことが影響し下呂石製石器の搬入が特に稀な地域であったのではないかと考えている。

5 おわりに

これまで、松本盆地における縄文時代中期の遺跡からの下呂石製石器出土報告は非常に少なかった。本稿で資料調査を実施した結果、当該地域における下呂石製石器の実態を把握することができ、社会的紐帯を目的とした交換によって搬入されたとの仮説を提示した。この仮説に立ち、下呂石製石器を、松本盆地における縄文時代中期の社会関係や集団論を議論する上で非常に重要な資料と位置付けたい。

本稿を草するにあたり以下の遺跡の資料を実見させていただいた。

山形村殿村遺跡、淀の内遺跡、三夜塚遺跡

塩尻市平出遺跡、峯畑遺跡、剣ノ宮遺跡

松本市南中島遺跡、内田雨堀遺跡、向畑遺跡、

川西開田遺跡

安曇野市他谷遺跡、東小倉遺跡

資料実見にあたり下記の機関および個人には格別のご配慮を賜った。感謝申し上げます次第である。

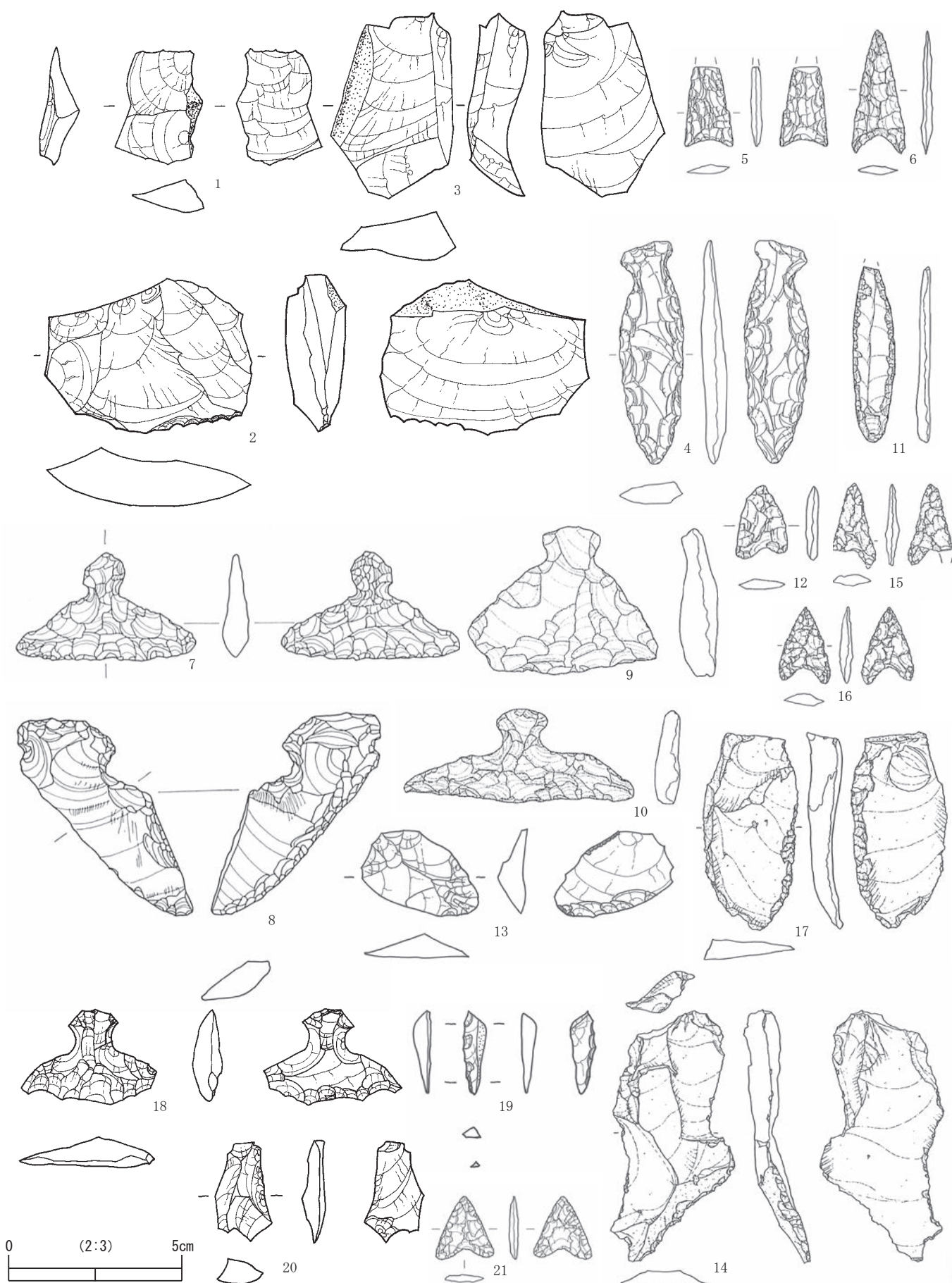
安曇野市教育委員会、塩尻市教育委員会、平出博物館、松本市教育委員会、松本市立考古博物館、山形村教育委員会、一ノ瀬幸治氏、小松学氏、土屋和章氏、直井雅尚氏、牧野令氏、村田幸子氏

註

- 1) 報告書では頁岩と記述される。
- 2) 報告書ではチャートと記述される。
- 3) 報告書では石匙はチャート、石鏃はホルンフェルス製の打製石斧と記述される。
- 4) 報告書では珪質粘板岩と記述される。

参考文献

- 阿部朝衛 1997「新潟県北部地域における縄文時代の石材使用とその背景」『帝京史学』第12号
- 阿部朝衛 2007「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』No.560
- 阿部朝衛 2014「後期旧石器時代の石材獲得戦略-新潟県荒川台遺跡を例として」『帝京大学文学部史学科創立30周年記念国際シンポジウム「歴史と環境」予稿集』
- 石原哲爾 1981「飛騨下呂石を石材とした石器の研究」『飛騨史学』第2巻
- 石原哲爾 1992「飛騨の地理と下呂石の動き」『飛騨のあけぼの』
- 岩田 修 1995「湯ヶ峰流紋岩と下呂石」『飛騨と考古学』
- 岩田 修 2012「飛騨の「下呂石」から見た縄文時代の長野」『平出博物館ノート』No.26
- 岩田 修 2019「下呂石研究の現状（五）縄文時代中期の下呂石」『斐太紀』第21号
- 神村 透 1995「考古学に見る飛騨と木曾の交流」『飛騨と考古学』
- 齊藤基生 2005「下呂石の動き」『地域と文化の考古学』I
- サーリンズ, M著 山内 昶訳 1984『石器時代の経済学』
- 杉木有紗 2019「朝日村山鳥場遺跡の石材利用—剥片石器編—」『長野県埋蔵文化財センター年報』35
- 中村由克 2007「下呂石の供給」『縄文時代の考古学』第6巻
- 馬場伸一郎 2018「下呂石の産出状況と流通—旧石器時代から弥生時代—」『ナイフ・石鏃・磨製石斧—石材資源とその流通—』
- 馬場伸一郎 2019「湯ヶ峰産出の「下呂石」の分類について（覚書）」『斐太紀』第22号
- 古川知明 2011「北陸の下呂石」『第4回下呂石シンポジウム2011「旅する下呂石—思えば遠くへ行ったもんだ」資料集』
- 古川知明 2013「日本海域の下呂石流通」『石器石材のつどい第2回シンポジウム「富山の石材と玉髄・碧玉」予稿集』
- 山内良祐 2018「縄文時代の下呂石の利用—長良川中・上流域における検討—」『東海石器研究』第8号
- 山田 哲 2013「石材資源調達の経済学—石器インダストリーの空間配置と技術に関する考察—」『考古学研究』第60巻第3号
- モース, M著 吉田禎吾・江上純一訳 2009『贈与論』
- 山本直人 1992「縄文時代の下呂石の交易」『名古屋大学文学部研究論集』113
- ※報告書は紙幅の都合により省略した。



第1図 松本盆地における縄文時代中期の下呂石製石器
 (1~3、13、18~20は筆者実測、それ以外は報告書から転載)

(3) 弥生時代後期の較正年代

—IntCal20による炭素14年代の再較正—

馬場 伸一郎

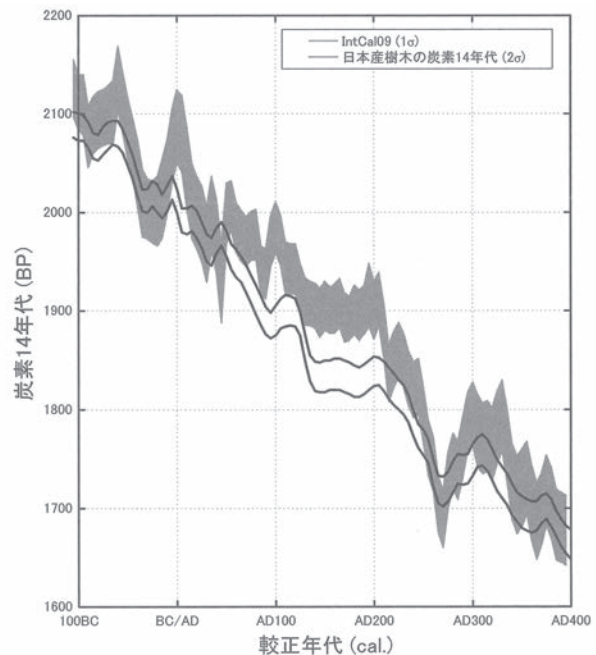
1 はじめに

『発掘調査のてびき—整理・報告書編—』(文化庁2010)によると、自然科学分析の成果は「遺跡の総合的理解に寄与するものであり」、整理等作業の一環に位置づける必要があるとする。また、同書の年代測定の項では、新たな補正法や改訂が行われた場合でも対応できるよう、年代測定機関が報告する各種数値や算出方法に関する基礎データを示すことが不可欠であるとする。

特に、発掘調査報告書に年代測定の基礎データを掲載する必要性については自治体や調査機関において今後留意されるべきで、2020年の夏に較正曲線「IntCal20」公開されたことにより、基礎データ報告の重要性が増す結果となっている。

炭素14年代法では、炭素14濃度を機械的に年代に換算した炭素14年代を縦軸にとり、較正曲線の振幅部分との接点を求めると較正年代が得られる。ただし、通常は複数の較正年代が得られるため、どの年代が最も信頼できるものかは確率により計算される。結果として示された較正年代は、「確率値」であることをまず理解しておく必要がある(設楽2004)。「IntCal」と呼ばれる較正曲線について、今村峯雄氏によると、国際暦年較正データベースは、石炭などの化石燃料の使用やあるいは集中的な工場立地や都市化により大気中の炭素14(^{14}C)の乱れが生じる以前、すなわち産業革命以前であるならば、世界共通の較正曲線が定義できるという前提に立つ(今村2004)。

その「IntCal」は数年間で更新されることが常であり、これまで1998年のINTCAL98をスタートに、2004年・2009年・2013年に更新され、2020年8月に最新のIntCal20が公開された(Reimer et al.2020)。その公開が日本列島に大きな影響を及ぼす理由は、日本列島と欧米の大気中の炭素14濃度が異なる可能性のある部分(Sakamoto et al. 2003・中村ほか2004)について、国立歴史民俗博



第1図 日本列島産樹木年輪の示す炭素14年代 [トーン範囲] と IntCal09 の比較 (春成ほか2011)

物館が中心となり測定を進めてきた日本列島産樹木年輪のデータが採用されたためである。その作業の中心を担った尾寄大真氏らは、年輪年代の定まった秋田県・長野県・神奈川県のスギ・ヒノキ材等測定し、紀元前11世紀から後4世紀の間、複数の日本列島産樹木のデータを得ることに成功した(尾寄2009)。

日本列島産樹木と IntCal09 の較正曲線を比較した第1図(春成ほか2011)では、較正年代の後50年頃から200年頃の間まで、相互のズレが大きいことがよくわかる。そのため、IntCal20以前の較正年代は、現在適用できない年代になっていることに注意しなければならない。

ただし、発掘調査報告書には、年代測定分析機関により、先々較正曲線が変更された場合に対応できるよう、「暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)」が必ず掲載されており、それを発掘調査報告書の掲載から除外しない限りは、都度、第三者が再較正することができる。報告書総括で較正年代に触れる場合において IntCal20 公開前の分析結果が含ま

れる場合は、報告者自身で IntCal20 を使い、再較正を行う必要がある。

本稿では、近年、長野県埋蔵文化財センターの発掘調査報告書に掲載された炭素14年代測定の実例を中心に、特に較正年代が大きく変わる弥生時代後期の事例を取り上げ、筆者自身により再較正を実施し、その年代について検討を行う。

2 炭素14年代を再較正する方法

まず始めに、南大原遺跡・本村南沖遺跡・北裏遺跡群・西近津遺跡群と北一本柳遺跡Ⅲに掲載されている「暦年較正用年代」を第1表の「炭素14年代」に転記する。その年代は、同位体分別効果の補正に $\delta^{13}\text{C}$ を用いて得られた炭素14年代である（坂本2006）。ちなみに、土器付着炭化物の $\delta^{13}\text{C}$ は -25% より低い値を示すことが一般的だが、この値が正の方向に傾くと海洋生物由来の可能性があり、起源物質解明の手がかりになる。なお、長野県埋蔵文化財センターの場合、年代測定機関の報告書は全て発掘調査報告書付属の CD に格納されているため、そこを参照した。

次に、OxCal4.4¹⁾ 較正プログラム（Bronk Ramsey and Lee 2013）を用い、較正曲線データを IntCal20（Reimer et al.2020）として較正年代を得る。その際、注意したいのは、炭素14年代は通常下1桁を四捨五入し表記されるが、較正プログラムに入力する値は四捨五入をしていない第1表の炭素14年代を入力する点である。

OxCal では較正年代を 1σ （68.3%信頼限界）・ 2σ （95.4%信頼限界）・ 3σ （99.7%信頼限界）から選択することができるが、ここでは 2σ を選択する。その結果得られる第1表の「Int Cal20による 2σ 較正年代範囲」のうち、カッコ内の百分率の値はその範囲内に年代が入る確率を示す。なお OxCal では、較正結果を一つ一つのグラフにすることや、複数の結果を一覧形式のグラフにすることも可能である。また、書き出し方式を選択すれば Adobe Illustrator で編集が可能になり、例えば IntCal13と IntCal20の結果を比較したグラフを作ることもできる。

さて、較正プログラムに炭素14年代を入力すれ

ば容易に再較正の年代を得ることができるが、最も重要であるのは試料の時期である。特に、試料が土器付着炭化物ではない場合、試料と遺物の共伴関係を知る手立てとなる情報が重要である。ここでは地点・層位情報と、遺構図や土層断面図への図示に加え、試料を採取した遺構や層位の時期別遺物量の事実記載が添えられていると、試料の時期を吟味する際の有力な手立てとなる。

第1表の「遺物の時期もしくは遺構の時期」は、土器付着炭化物もしくは土器内の炭化物であればその土器の時期を入力し、遺構内の炭化材や炭化物であれば、遺構の時期を吉田・箱清水式土器の編年（青木1998・小山2016）に依り示した。後期1と後期2は吉田式土器、後期3と後期4が箱清水式土器の前半、後期5と後期6が箱清水式土器の後半に相当する²⁾。

今回幸いにも、棺上に供献土器を伴う佐久市北裏遺跡群の18号木棺墓（SM18）で、炭化した木棺とその覆土中の試料が相互に極めて近似する炭素14年代を示したことから、佐久市北一本柳遺跡ⅢのH56住居跡から出土した型式が明らかな箱清水式壺の、壺内出土炭化米を試料とした実例が存在した。それをまず土器型式との接点が高い試料とみなした。その結果、較正年代が大幅にずれる試料が含まれていることがわかり、床面直上でも炉内の炭化物でもそれはみられた。較正年代の蓋然性という点では、型式の判明する土器付着炭化物が最良である。ただ全てにそれは望めないため、今回は上記の土器型式との接点が高い試料を軸に、年代の検討を実施した。明らかに弥生時代から外れる炭素14年代の試料、時期不明の遺構採取試料、時期の詳細が遺物実測図等で確認できない遺構採取試料は、第1表から除外した。次に IntCal20を用いた再較正を実践してみよう。

3 IntCal20による弥生時代後期の較正年代

第1表の炭素14年代を IntCal20により較正した年代を第2図に示した。相互の試料を比較できるよう、一覧形式のグラフで結果を示した。

後期1は中野市南大原遺跡の試料①の1例のみだが、168calBC-39calBCに高い確率を示す。た

第1表 IntCal20により再較正を実施した試料一覧と得られた2σ較正年代範囲

試料 番号	測定機関番号	試料情報				炭素 14 年代		IntCal20 による 2σ較正年代範囲	遺物の時期 もしくは遺構の時期	
		遺跡	遺構	層位 場所	試料 形態	yrBP	誤差 ± 1σ			
①	IAAA-132929	南大原	SB13	2層	炭化物	2078	25	168calBC-39calBC(91.4%) 12calBC-3calAD(4.0%)	吉田式	後期1
②	PLD-30891	本村南沖	SB01	床面	炭化材	2039	20	101calBC-67calBC(11.9%) 60calBC-26calAD(83.2%) 50calAD-54calAD(0.4%)	吉田式	後期2
③	PLD-30890	本村南沖	SB03 pit10	埋土	炭化材	2028	20	93calBC-77calBC(3.3%) 55calBC-29calAD(89.0%) 43calAD-59calAD(3.1%)	吉田式	後期2
④	PLD-30899	本村南沖	SB17	炉埋土	炭化材	2026	20	92calBC-78calBC(2.4%) 55calBC-30calAD(89.0%) 41calAD-60calAD(4.0%)	吉田式	後期2
⑤	IAAA-103175	北裏	SB20	床面直上	炭化物	2073	26	169calBC-34calBC(88.2%) 16calBC-6calAD(7.2%)	吉田式～ 箱清水式	後期2～3
⑥	PLD-30894	本村南沖	SM02	土器棺内	炭化材	1950	20	15calAD-126calAD(95.4%)	箱清水式	後期3
⑦	IAAA-103171	北裏	SB25		炭化物	1951	26	36calBC-14calBC(3.0%) 4calAD-130calAD(91.4%) 144calAD-155calAD(1.0%)	箱清水式	後期3
⑧	PLD-15411	西近津	SB8005		炭化材	1979	25	41calBC-9calBC(15.2%) 1calAD-87calAD(69.3%) 93calAD-119calAD(10.9%)	箱清水式	後期3
⑨	IAAA-103176	北裏	SB24	床面直上	炭化物	2086	28	176calBC-37calBC(92.2%) 14calBC-4calAD(3.2%)	箱清水式	後期3
⑩	IAAA-103177	北裏	SB17	炉	炭化物	2059	27	156calBC-15calAD(95.4%)	箱清水式	後期3
⑪	IAAA-103179	北裏	SB25	床面直上	炭化物	2020	26	95calBC-74calBC(3.4%) 56calBC-70calAD(92.1%)	箱清水式	後期3
⑫	PLD-15393	西近津	SB0041	炉内	炭化材	1995	23	45calBC-79calAD(93.5%) 100calAD-108calAD(1.9%)	箱清水式	後期3～4
⑬	PLD-15394	西近津	SB0067 pit3		炭化材	1904	22	75calAD-211calAD(95.4%)	箱清水式	後期3～4
⑭	IAAA-103189	北裏	SM18	No.154 高坏内	炭化物	1948	26	34calBC-15calBC(2.2%) 6calAD-131calAD(90.4%) 141calAD-159calAD(1.9%) 191calAD-201calAD(0.9%)	箱清水式	後期4
⑮	IAAA-103186	北裏	SM18	棒状炭 (木棺)	木炭	1910	25	61calAD-213calAD(95.4%)	箱清水式	後期4
⑯	IAAA-103187	北裏	SM18	棒状炭 (木棺)	木炭	1913	25	31calAD-40calAD(1.5%) 60calAD-212calAD(94.0%)	箱清水式	後期4
⑰	IAAA-103190	北裏	SM18	3層	炭化物	1925	25	27calAD-48calAD(6.6%) 56calAD-206calAD(88.9%)	箱清水式	後期4
⑱	PLD-14359	北一本柳 III	H56	No.14 壺内	炭化米	1827	25	129calAD-253calAD(85.6%) 291calAD-318calAD(9.9%)	箱清水式	後期5～6
⑲	PLD-14360	北一本柳 III	H61	床面	炭化 種子	1845	25	125calAD-245calAD(95.4%)	箱清水式	後期5～6
⑳	PLD-14361	北一本柳 III	H61	床面	炭化材	1870	22	123calAD-232calAD(95.4%)	箱清水式	後期5～6

だし、竪穴建物跡覆土中の試料であること、そして同遺跡の栗林2式新段階もしくは栗林3式の遺構から出土した試料もほぼ同じ較正年代を示すため、今後試料を増やし、検討を重ねる必要がある。

後期2は、長野市本村南沖遺跡の試料②から④

があり、60calBC-26calAD、55calBC-29calAD、55calBC-30calADに高い確率を示す。炭素14年代が誤差(1σ)の範囲で重なる。較正年代は紀元1年を中心とした前後の年代にあたる。

後期3は、本村南沖遺跡のほかに北裏遺跡と、

佐久市西近津遺跡群の例がある。15calAD-126calAD（試料⑥本村南沖）、4calAD-130calAD（試料⑦北裏）、1calAD-87calAD（試料⑧西近津）の3点が互いに近い較正年代を示す。そのうち、本村南沖遺跡の試料⑥はSM02土器棺内から採取されており、土器型式と試料の接点大きい。なお、第2図の⑨から⑪の試料は前記の3点とは大きく外れる年代値を示す。ここでは、後期3を1世紀中頃から2世紀初め頃と考えておく。

後期4は、先述の通り、北裏遺跡群の18号木棺墓（第3図）に良好な試料がある。炭化した木棺を試料とした⑮・⑯の2点は、61calAD-213calAD、60calAD-212calADに、木棺墓の覆土3層の試料⑰は56calAD-206calADに高い確率を示す。第1図の較正曲線をみると、炭素14年代の1900¹⁴CBP付近は較正曲線が平坦になっているため、較正年代の幅も大きくなっている。また、IntCal13と比較すると、IntCal20による後期4から後期5の較正年代は大幅に新しくなっていることがわかる（第2図）。なお、棺上に供献されたと考えられる高坏（第3図-2）内部の土壌から得た試料⑱は、6calAD-131calADに高い確率を示し、木棺の試料よりやや古い。後期4はおおよそ2世紀代にあたる。

後期5あるいは後期6に関しては、北一本柳遺跡ⅢのH56号住居跡から出土した壺内出土炭化米と、H61号住居跡の床面出土の炭化物試料がある。壺の時期は箱清水式後半ではあるが、箱清水式壺の地域性もある故、それ以上の絞り込みが難しい（第3図-3）。その試料⑱は129calAD-253calADに高い確率を示す。H61号住居跡の試料⑲と⑳は、炭素14年代がほぼ誤差（1σ）の範囲で重なり、⑲が125calAD-245calAD、⑳が123calAD-232calADに高い確率を示す。後期5から後期6は、2世紀中頃から3世紀前半にあたりと考える。

4 実年代資料との対比

IntCal20による再較正の結果、長野県の弥生時代後期の較正年代は次のように考えられる。

- ・後期2：紀元1年を中心とした前後の年代

- ・後期3：1世紀中頃～2世紀初め頃
- ・後期4：およそ2世紀代
- ・後期5～6：2世紀中頃から3世紀前半

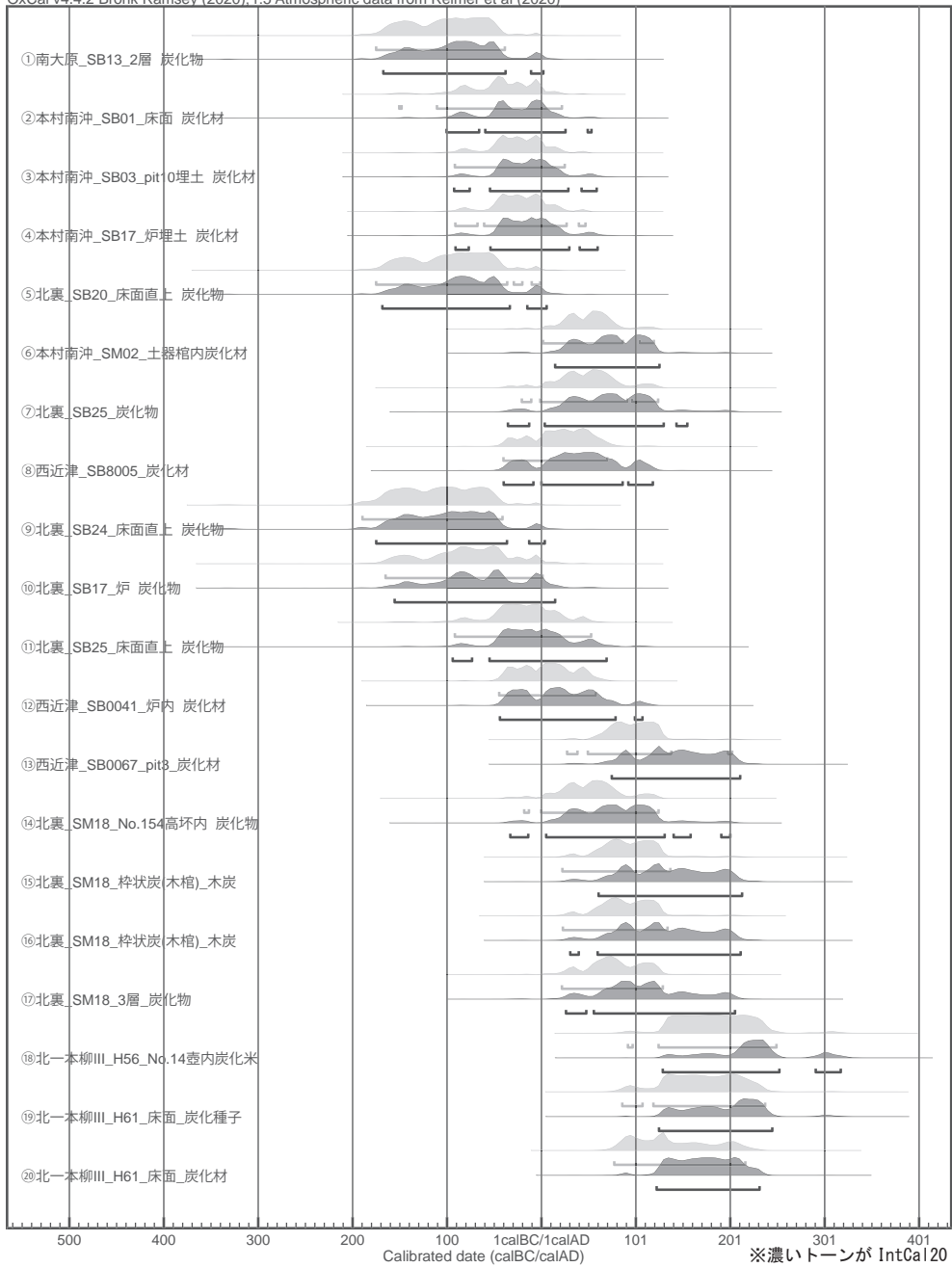
その較正年代と、年代的定点が得られている資料を対比してみよう。

後期初頭の年代は、西日本にその土器と貨泉との共伴関係が複数例あり、紀元前にさかのぼることはない（森岡2002）。そのため、後期2の吉田式後半の較正年代は、後1世紀の前半に概ね絞り込める。

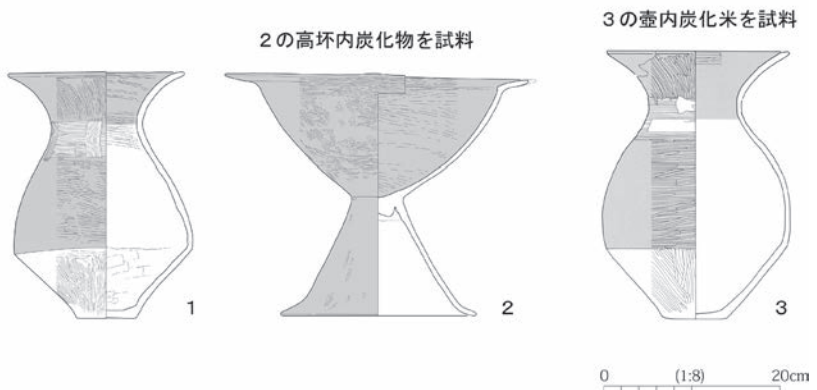
福井県小浜市の府中石田遺跡では、法仏式成立期の土器を伴う周溝建物SH8の礎板について、光谷拓実氏による年輪年代測定により、伐採年が西暦84年と判明した（杉山編2011）。長野市長野女子高校校庭遺跡の2号土坑では、後期3の箱清水式と法仏式古相の擬凹線文甕が共伴し（平林2014）、本村東沖遺跡100号住居跡で法仏式後半の有段高坏が出土する（森本2006）。法仏式と箱清水式土器の併行関係に基づくと、後期3の較正年代と西暦84年は整合的である。

次に、月影式の定点としては、金沢市大友西遺跡で光谷拓実氏の年輪年代測定により、SE18の井戸側上部の部材から西暦169年が得られている（出越編2002）。SE18の時期は堀大介氏の月影2式（漆町3群相当）である（堀2009）。後期4ないしは後期5に月影式を伴うため、その較正年代と矛盾はない。

白江式に関しては、森本幹彦氏は、篠ノ井遺跡群聖川堤防地点の6号方形周溝墓の出土土器中に白江式の壺が含まれることを指摘し、後期6は白江式に接しているとみる（森本2006）。石川県二口かみあれた遺跡で光谷拓実氏による井戸枿材の年輪年代測定の結果、伐採年代が西暦258年とされているが（上野編1995）、その年代が白江式後半に接点をもつ（堀2009）。白江式後半はS字状口縁甕B類中段階を伴う御屋敷式と併行する。そのため、御屋敷式以前の後期6は白江式後半の年代より古いため、後期6を含む較正年代と整合する。以上までの較正年代によると、箱清水式土器の始まりはおおよそ1世紀中頃、終わりは3世紀前



第2図 IntCal13とIntCal20の較正年代の比較



第3図 北裏遺跡群18号木棺墓の棺上供献土器（1・2・左写真）と北一本柳遺跡Ⅲ H56号住居跡出土の土器（3）

半に収まる。

なお、参考までに、布留0式の良好な一括資料とされる箸墓古墳周辺第7次調査出土土器は、定型化した前方後円墳である箸墓古墳の、築造直前の土器である。炭素14年代の多くが 1800^{14}CBP 台で(春成ほか2011)、較正年代は3世紀前半である。箱清水式土器の終末と定型化した前方後円墳の出現直前段階は、較正年代において併行する。

5 今後の課題

吉田・箱清水式土器の地域性を考慮した編年整備と併行関係の検討は、炭素14年代法の基盤を成すため、継続的な研究を今後も要する。また、十分な試料が得られず検討を保留した栗林3式と吉田式前半(後期1)、そして箱清水式後半(後期5)に関しては、新たな年代測定結果を加え、今回の成果を更新していく必要がある。その際、長野県内で事例が少ない土器付着炭化物と年輪年代の測定を加えることができれば、弥生時代後期の実年代の精度を高めることができると考える。

註

- 1) OxCal4.4は、<https://c14.arch.ox.ac.uk/oxcal/OxCal.html> で利用登録をすれば誰でも使用が可能である。ただし全てが英語表記であるため、株式会社パレオ・ラボの中村賢太郎氏による「OxCalを使った14C年代較正講座」(<https://www.youtube.com/>)を参照するとよい。
- 2) 文中の後期1から後期6は青木一男1998の後期第1段階から第6段階に相当する。また、小山岳夫2016の編年は青木編年の6段階区分に対応させ、読み替えている。

引用文献 (紙幅の都合、一部文献は執筆者を省略した)

- 青木一男1998「第4章第1節5 長野盆地南部の後期編年」『松原遺跡 弥生後期・古墳前期』長野県埋蔵文化財センター、197-249頁。
- 今村峯雄2004「世界の炭素14年代測定」『弥生時代の実年代—炭素14年代をめぐって—』、85-92頁、学生社。
- 上野敬編1995『二口かみあれた遺跡』、石川県志雄町教育委員会。
- 尾寄大真2009「③樹木年輪の炭素14年代測定」(データ集)『弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—』平成16年度～平成20年度科学研究費補助金(学術創成研究)研究成果報告書(西本豊弘編)、508-524頁、国立歴史民俗博物館。
- 小山岳夫2016「前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落—佐久盆地の集落分布の変遷を中心と

して—」『専修考古学』第15号、31-87頁。

- 設楽博己2004「AMS炭素年代測定による弥生時代の開始年代をめぐって」『揺らぐ考古学の常識—前・中期旧石器捏造問題と弥生開始年代—』、97-129頁、吉川弘文館。
- 坂本稔2006「炭素14年代法の原理」『新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代』、29-39頁、雄山閣。
- 杉山拓己編2011『府中石田遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財センター。
- 出越茂和編2002『大友西遺跡Ⅱ(本文編)』、金沢市埋蔵文化財センター。
- 中村俊夫・福士浩士・光谷拓実・丹生越子・小田寛貴・池田晃子・太田友子・藤根久2004「年輪年代と14C年代の比較」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書XV』、名古屋大学年代測定総合研究センター、206-213頁。
- 春成秀爾・小林謙一・坂本稔・今村峯雄・尾寄大真・藤尾慎一郎・西本豊弘2011「古墳出現期の炭素14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集、133-176頁。
- 平林大樹2014「3. 長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器」『長野女子高校校庭遺跡』、93-97頁、長野市教育委員会。
- 文化庁文化財部記念物課監修2010『発掘調査のてびき—整理・報告書編』、同成社。
- 堀大介2009「第1章年代論 第2節暦年代の検討」『地域政権の考古学的研究』、101-134頁、雄山閣。
- 森岡秀人2002「近畿から見た併行関係と実年代試料」『日本考古学協会2002年度榎原大会研究発表資料集』、133-150頁。
- 森本幹彦2006「信濃北部の円形周溝墓について」『物質文化』81、21-49頁。
- Bronk Ramsey, C and Lee, S.2013 Recent and Planned Developments of the Program Oxcal.Radiocarbon 55(2-3): 720-730.
- Reimer, P.J.et al.2020 The IntCal20 Northern Hemisphere Radiocarbon Age Calibration Curve (0-55cal kBP). Radiocarbon 62(4): 725-757.
- Sakamoto, M.et al.2003 Radiocarbon Calibration for Japanese Wood Samples. Radiocarbon 45(1): 81-89.
- [第1表掲載の遺跡と発掘調査報告書]
- ・南大原遺跡：長野県埋蔵文化財センター2016『南大原遺跡』
 - ・本村南沖遺跡：長野県埋蔵文化財センター2017『浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡』
 - ・北裏遺跡群：長野県埋蔵文化財センター2020『北畑遺跡群・二東餅遺跡・北裏遺跡群・西東山遺跡・東山遺跡』長野県埋蔵文化財センター
 - ・西近津遺跡群：長野県埋蔵文化財センター2015『西近津遺跡群』
 - ・北一本柳遺跡Ⅲ：佐久市教育委員会2010『岩村田遺跡群 北一本柳遺跡Ⅲ』

(4) 小島・柳原遺跡群出土の塔鏡形合子蓋の模様

寺内 貴美子

1 はじめに

小島・柳原遺跡群は長野市柳原に位置する。一般国道18号（長野東バイパス）改築工事に伴い、2016～2019年度に長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、平安時代と中世以降を中心とした遺構遺物がみつかった。

類例も少なく、注目された銅合金製仏具である塔鏡形合子（以下本遺跡出土品という）は2020年3月に刊行した発掘調査報告書に調査成果を掲載した。本年度、保存処理を実施し、得られた成果を報告する。

2 塔鏡形合子とは

仏塔の相輪形鈕を持つ蓋と台脚付身で一組なる金属製合口造の容器である。舍利容器として使用された例もあるが、本遺跡出土品は、柄香炉と共に法会等で使用された供養具の香合（香の入れ物）と考えられる。国内では、法隆寺献納宝物、正倉院宝物、日光男体山山頂遺跡出土品が知られている。中国（唐時代）や朝鮮半島（統一新羅時代）でも出土例があり、大陸や半島との関係が強い金属製品である。

3 保存処理の実施

劣化をおさえるための保存処理を実施した。鉛や微量のヒ素を含む銅製品である本遺跡出土品の保存処理は、①処理前記録、②錆取り（メス・実体顕微鏡使用）、③有機溶剤洗浄、④ベンゾトリアゾール処理、⑤パラロイドB-72キシレン溶液による樹脂含侵（1回）、⑥coating、⑦処理後記録の工程で行った。

土砂を巻き込んだ錆を除去した結果、本来の器面がみえるようになり全体の形状が明確となった（図1）。なお、重量は、97.2g（処理前）から96.4g（処理後）と減少した。

4 新たな模様の確認

器面を覆っている錆を除去している過程で、蓋本体上部の沈線で仕切られた区画（図2）に、極細沈線で表現した模様と打刻点を確認した。図3の1から3にかけて残存しており、極細沈線で形を表し、線と線の間を打刻点で一部埋めている。磨滅で消えている範囲があるが、連続した意匠であること推定できる。

また、X線CT画像でしか確認できなかった竜



第1図 保存処理後の塔鏡形合子

舎上面の模様も、今回の鑄取りを行った結果、肉眼でも少し確認できるようになった（図6）。

5 形態と模様

形態と模様については、報告書に記載したが、一部修正して再掲する。

法量：高さ6.3cm（宝珠除く）、口径7.8cm、最大径8.2cm、竜舎直径1.6cm、相輪直径上段2.6cm、中段3.1cm、下段3.5cm、基壇上部直径3.9cm、重量96.4gを測る。蓋本体厚さは0.07～0.2cmで、1mmに満たない部分がある。

模様：竜舎上面、相輪3段各上面、基壇上面、蓋本体外面に施されている（図5）。

竜舎上面には、雲状曲線が極細沈線で3か所に刻まれる。その内側には極細の短い沈線が、外側は三角状の刻みが疎になされている（図5・6）。

相輪は3段とも、凹線による同心円が2本ほぼ同じ位置に確認できる。1本は外縁から1.5～2.0mm、もう1本は4.5～5.0mm、線幅は外側が0.2～0.5mm、内側が0.1～0.2mmである（図5・7）。

基壇上面にも凹線による同心円が2本、外縁から1.0mm、6.0mmの位置に確認できる（図5・7）。

蓋本体外面では、基壇直下と真ん中あたりに2本で1単位になる沈線、身との接合部分直上に沈線1本が確認できる（図5・8）。基壇直下と次の沈線で仕切られた区画には、連続した模様が施される（図3～5）。

成分：銅を主成分とした合金で、鉛・微量のヒ素を含むことが、蛍光X線分析の結果判明している。

6 日光男体山出土品との比較

日光男体山山頂遺跡では、塔鏡形合子13点のう

ち、蓋は7点出土している。日光男体山山頂遺跡の塔鏡形合子蓋には、本遺跡出土品と酷似するものがあることは、報告書で指摘し、比較検討をしている。今回、蓋本体上部区画部分で、新たに模様がみつかったのを受けて、改めて比較検討をする。比較するのは、蓋本体の上部区画部分に模様がある日光男体山山頂遺跡出土品（以下男体山出土品という）5点と本遺跡出土品である（図9）。

男体山出土品1・2・3・5では、唐草文が蹴り彫り¹⁾、唐草文の外側は魚々子地²⁾にしてい



第2図 塔鏡形合子 各部位の名称



第3図 新たにみつかった模様位置



1

2

3

第4図 新たにみつかった模様（拡大）

る。唐草文は蔓（茎）と葉が連続して表現される。蔓から分かれて伸びた葉の方向が、左向き（男体山2）と右向き（男体山1・3・5）と、2方向に展開するが、それ以外はよく似た特徴を持つ。

男体山4は魚々子鑿を連続打刻して唐草文風の模様を展開し、前述した4点とは技法、模様とも異なる様相を示す。

本遺跡出土品では、男体山で施されている葉の表現と同様の模様とやや太めの蔓が、極細沈線で表現されている。蔓から分かれて伸びた葉は、左向きである。途切れている部分はあるが、唐草文と考えられる。極細沈線は線彫りであると思われるが、磨滅しているため技法は確認できない。唐草文の外側は、三角状の打刻点³⁾が疎にみられる。これらのことから、蓋本体上部区画部分の模様は、男体山2と類似するといえる。

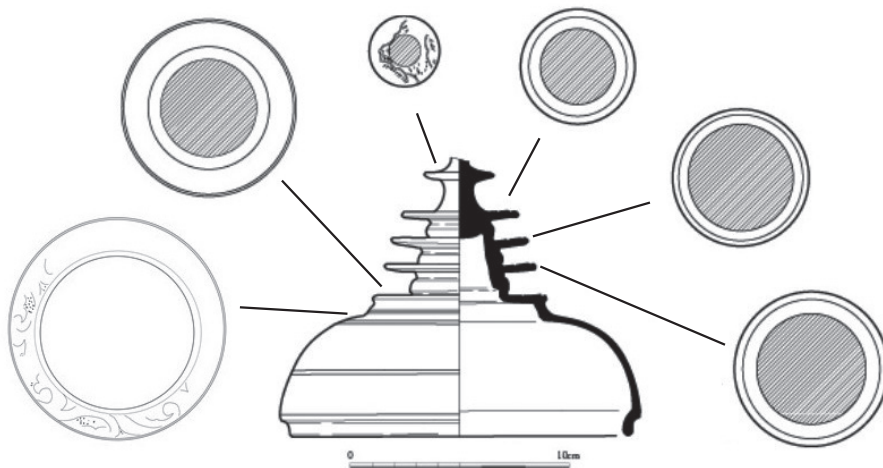
以上のことを考慮して、本遺跡出土品の蓋本体区

画部分の模様全体の推定を試みた。蔓から分かれた葉が区画の上部に接する箇所から次に葉が上部に接する箇所（図3▼部分）までを1単位とすると、確認できる1単位は区画円で90°前後の範囲に展開する。全周ならば、4単位程になると考えられ、男体山2よりゆったりとした印象を受ける唐草文の外側は、三角状の打刻点が疎に充填されると推定する（図10）。

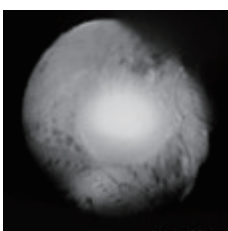
7 おわりに

当初より、器形などから男体山山頂遺跡出土品との関係を指摘されていたが、今回新たに見つかった唐草文は、その見解をより強めるものといえよう。

最後に、地元をはじめ、研究者や調査に携わった多くの方々の関心を集めたこの出土品が、今後さまざまな意味で活用されること切に願うところである。



第5図 塔鉢形合子蓋の模様



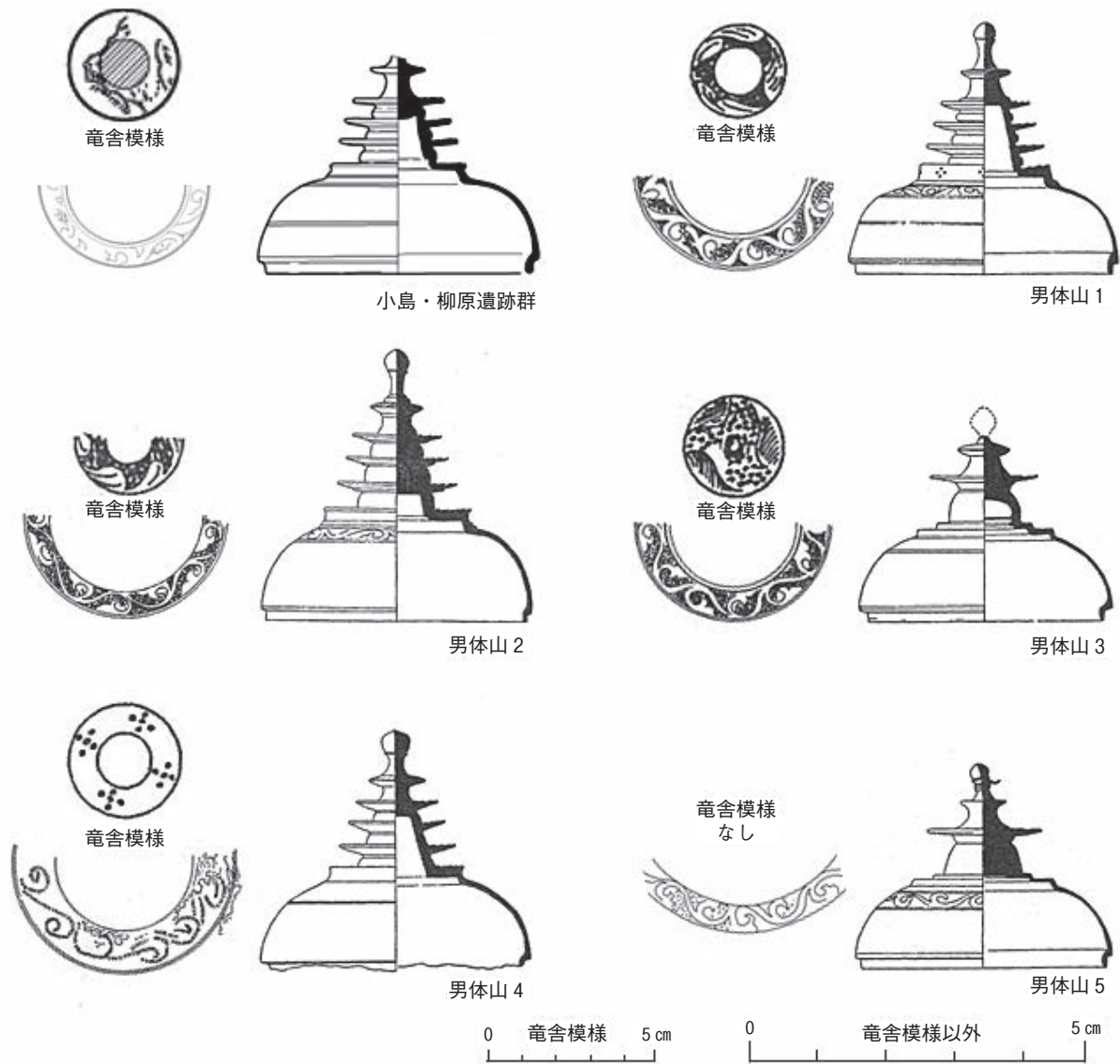
第6図 竜舎の模様



第7図 相輪・基壇上面 刻線



第8図 蓋本体刻線



第9図 塔鏡形合子の模様

註

- 1) 金属製品に施す装飾技法「線彫り」の一つ。鑿を斜めに打って楔形の打痕を連続させて線状にする技法のこと。線彫りは他に「毛彫り」、「点線彫り」がある。
- 2) 金工の技法の一つ。先が小さな円形の魚々子鑿で、地の部分を魚の卵のような円文の埋めるように打つ技法のこと。
- 3) 三角状の打刻点は、魚々子鑿を斜めに打込んでできる打刻点であると奈良国立博物館内藤栄氏が指摘している(2020年12月12日実施『掘るしん in ながの一塔鏡形合子は何を語る一』内藤氏講演「塔鏡形合子がたどった道」)。
- 3) 日光男体山山頂遺跡出土品実測図は、報告書掲載図を加工している。ただし、男体山5の蓋本体上部区画内の模様は資料調査時の写真からおこしたスケッチである。

参考文献・図版出典

日光二荒山神社1963『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告



第10図 本遺跡出土品模様の推定復元

書』角川書店(名著出版 1991 再刊)
 西川明彦2006『正倉院宝物の装飾技法』至文堂
 長野県埋蔵文化財センター2020『小島・柳原遺跡群』
 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書127

長野県埋蔵文化財センター年報37 2020年度

発行日 2021（令和3）年3月23日

編集発行 （一財）長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

電話：026-293-5926 FAX：026-293-8157

E-mail：info@naganomaibun.or.jp

印刷 信毎書籍印刷株式会社

